

石狩市郷土研究会創立 60 周年記念号

石狩市小中高等学校校務録

現在の学校 石狩市立石狩八幡小学校 石狩市立花川小学校 石狩市立生振小学校
石狩市立南線小学校 石狩市立花川南小学校 石狩市立紅南小学校 石狩市立緑苑台
小学校 石狩市立双葉小学校 石狩市立厚田学園 石狩市立浜益小学校 石狩市立石
狩中学校 石狩市立花川中学校 石狩市立花川南中学校 石狩市立花川北中学校 石
狩市立樽川中学校 石狩市立浜益中学校 北海道石狩翔陽高等学校 北海道石狩南高
等学校

統廃合となった学校 石狩市立石狩小学校 石狩市立八幡小学校 石狩市立若葉小
小学校 石狩市立紅葉山小学校 石狩町立石狩東小学校 石狩町立高岡小中学校 石狩
町立美登位小学校 石狩町立五の沢小学校 石狩町立志美小学校 石狩町立樽川小中
学校 石狩町立発泉小学校 石狩市立厚田小学校 石狩市立聚富小中学校 石狩市立
望来小学校 厚田村立発足小学校 厚田村立古潭小中学校 厚田村立桂の沢小学校
厚田村立正利冠小学校 浜益村立黄金小学校 浜益村立浜益中央小学校 浜益村立浜
益北部小学校 浜益村立濃昼小中学校 浜益村立尻苗小中学校 浜益村立千代志別小
中学校 浜益村立実田小学校 浜益村立浜東小学校 浜益村立浜益（茂生）小学校
浜益村立群別小学校 浜益村立床丹小学校 石狩町立生振中学校（旧）石狩町立花
川中学校 石狩市立厚田中学校 石狩市立望来中学校 浜益村立幌中学校 北海道浜
益高等学校

校歌がなかった学校 石狩町立若生小学校 石狩町立八の沢小学校 石狩町立参泉
小学校 厚田村立安瀬小学校 浜益村立幌小学校 廳立来札尋常小学校

石狩市郷土研究会

発刊によせて

石狩市郷土研究会会長 村 山 耀 一

わたしたち誰もが小学校時代の校歌を口ずさむことが出来るのではないのでしょうか。

それは子供のころ学校で儀式や運動会に向けて何度も何度も繰り返し歌ったことにあると思います。また校歌の歌詞にはふるさとの野山や海などの情景や学校のめざす児童・生徒像が折り込まれているため、私たちの脳裏に懐かしく残り、当時の先生や友の姿が浮かんでくるのでしょう。

この度、「石狩市立厚田学園」の校歌を作詞された元厚田小学校校長の伊藤潮氏によると、わが国の校歌は明治政府の教育改革の一環として位置付けられ、身分や境遇の異なるさまざまな児童、生徒が集う学校で校歌は建学の精神や理想とする校風を一つの学校の一員であるという自覚を高める目的で歌われていたといわれています。特に戦前は校歌を作成した場合、作詞・作曲者名、歌詞、楽譜や歌詞の説明を添えて文部省へ認可申請を行わなければならない、手続きを経て初めて正式に校歌として認可されました。

伊藤氏は戦前の官報に載った現石狩市で認定校歌をもった学校は生振小学校、厚田小学校の2校だけといえます。また戦前に校歌のあった学校は外に石狩小学校と茂生小学校があります。その中で、生振・厚田・石狩小学校の三校は歌詞が三番まであって、特に三番の歌詞が忠君愛国に通ずる内容でしたので戦後は二番までしか歌わなくなりました。茂生については二番までの歌詞が残っていますが、三番目があったかは不明です。また、当時は校歌のない学校もありました。石狩市の多くの学校は戦後になって校歌を作るようになり、新設校では最初から校歌を制定しています。石狩市では今年3月末をもって明治初期に創設された石狩小学校と厚田小学校が共に140年を超える歴史を閉じ、新たな統合で石狩八幡小学校と厚田学園として再出発しました。石狩市は明治以来、鮭や鯨漁の盛んな時期があり、さらに内陸部の開拓により集落ごとに学校が創られました。しかし、時代の変化とともに多くの学校が統合、閉校、廃校になり、一方で新しい学校も生まれました。

石狩市郷土研究会は昭和35年(1960)3月31日に創立し今年が60周年の年にあたり、記念事業としてこれまで統廃合した41校(小中併置校・道立高校を含む)と現在校18校(道立高校を含む)の校歌を後世に残し伝えたいと考え、調査、研究を進め、この度「石狩市小中高等学校校歌集」を発行するに至りました。校歌集には楽譜や歌詞の外、各学校の概要も添えて馴染みやすい形にいたしました。併せてCDや本会のホームページで音声として記録を残し、いつでも、誰でもが聴くことができ、後世に伝えられるようにいたしました。

最後になりましたが校歌集発行にあたり、市内在住の音楽家で元厚田区地域協力隊をされた今野博之・くる美ご夫妻にご協力して頂いたことにお礼を申し上げます。

また、石狩市芸術文化振興奨励補助金の対象としてご援助いただきましたことに、深く感謝とお礼を申し上げます。

令和2年(2020)10月

目 次

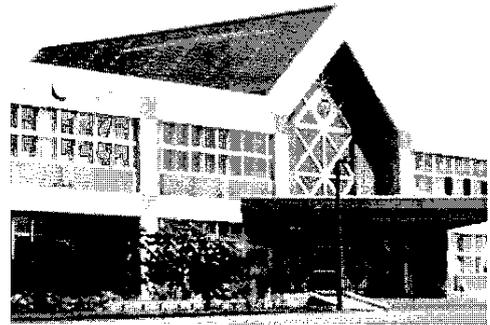
発刊によせて	33	厚田村立発足小学校	70
石狩市郷土研会会長 村山耀一	1	厚田村立古潭小中学校	72
現在の学校	35	厚田村立桂の沢小学校	74
1 石狩市立石狩八幡小学校	4	厚田村立正利冠小学校	76
2 石狩市立花川小学校	6	浜益村立黄金小学校	78
3 石狩市立生振小学校	8	浜益村立浜益中央小学校	80
4 石狩市立南線小学校	10	浜益村立浜益北部小学校	82
歌われなくなった3番の歌詞	13	浜益村立濃昼小中学校	84
5 石狩市立花川南小学校	14	41 浜益村立尻苗小中学校	86
6 石狩市立紅南小学校	16	42 浜益村立千代志別小中学校	88
7 石狩市立緑苑台小学校	18	43 浜益村立実田小学校	90
8 石狩市立双葉小学校	20	44 浜益村立浜東小学校	92
9 石狩市立厚田学園	22	45 浜益村立浜益（茂生）小学校	94
10 石狩市立浜益小学校	24	46 浜益村立群別小学校	96
11 石狩市立石狩中学校	26	47 浜益村立床丹小学校	98
12 石狩市立花川中学校	28	48 石狩町立生振中学校	100
13 石狩市立花川南中学校	30	49 石狩町立花川中学校	102
14 石狩市立花川北中学校	32	50 石狩市立厚田中学校	104
15 石狩市立樽川中学校	34	51 石狩市立望来中学校	106
16 石狩市立浜益中学校	36	52 浜益村立幌中学校	108
17 北海道石狩翔陽高等学校	38	53 北海道浜益高等学校	110
18 北海道石狩南高等学校	40	校歌のなかった学校	
統廃合となった学校		54 石狩町立若生小学校	112
19 石狩市立石狩小学校	42	55 石狩町立八の沢小学校	113
20 石狩市立八幡小学校	44	56 石狩町立参泉小学校	114
21 石狩市立若葉小学校	46	57 厚田村立安瀬小学校	115
22 石狩市立紅葉山小学校	48	58 浜益村立幌小学校	116
23 石狩町立石狩東小学校	50	59 廳立来札尋常小学校	117
24 石狩町立高岡小中学校	52		
25 石狩町立美登位小学校	54	旧石狩市地区の学校系統図	118
26 石狩町立五の沢小学校	56	厚田区の学校系統図	119
27 石狩町立志美小学校	58	浜益区の学校系統図	119
28 石狩町立樽川小中学校	60	旧石狩市地区の学校位置図	120
29 石狩町立発泉小学校	62	厚田区の学校位置図	121
30 石狩市立厚田小学校	64	浜益区の学校位置図	122
31 石狩市立聚富小中学校	66	参考文献、引用資料	123
32 石狩市立望来小学校	68	あとがき	125

石狩市立石狩八幡小学校



制定 令和2年4月1日

雪の結晶と石狩市の鳥「カモメ」、同校校舎の屋根の形を組み合わせる表現、厳しい冬の寒さに負けず、明るく健やかに、カモメのように未来に向けて羽ばたいてほしいという願いが込められている。



【所在地】 石狩市八幡4丁目167番地

石狩川河口両岸地域とその背後の田園地域の中心校となる石狩八幡小学校の校下は石狩市の中でも古い歴史を持つ地域である。河口部は松前藩時代藩主が直轄する交易の場であり、幕末には鮭漁を中心とした石狩十三場所を一括した元小屋が置かれた。蝦夷地を再び直領とした幕府が安政4年、石狩改革の目的で石狩役所と学館の「教導館」を置いたのが若生である。河口部は明治になってからも鮭漁業で繁栄し文化意識が高い町だった。一方、明治4年以降、田園地域でも入植による開拓が進んだ。石狩の公教育は石狩小学校につながる明治6年の石狩教育所設置に始まる。その後、各地区の学校が次々開校され、かつ統合が進んでいった。両岸にそれぞれ残った石狩小学校と八幡小学校も、児童の減少で複式化を避けられない状況になった。幕府の教導館と石狩教育所につながる石狩川河口地区の教育は、北海道で最も由緒ある歴史を有している。今回、両地区の歴史に由来する石狩小学校と八幡小学校が一つになり、「石狩八幡小学校」として開校することが、石狩の教育に新たな伝統を作る契機となることを期待される。

【開校までの経緯】

- 平成16年1月11日 石狩市立小学校及び中学校の規模・配置等検討会。石狩小及び八幡小は、児童数の減少傾向から将来的に統合の方向で検討することを確認
- 平成26年9月 「本町・八幡地区小中学校の整備に係る検討会」設置（4回）
- 平成27年11月13日 上記「検討会まとめ」と「外部の有識者意見書」に基づき、「学校整備の具体策（案）について～本町・八幡地区～」を教育委員会会議で決定
- 平成29年7月6日 「（仮称）「石狩・八幡小学校設立準備委員会」活動開始
- 平成30年3月27日 「（仮称）石狩・八幡小学校基本計画」を、教育委員会会議において決定
- 平成30年7月12日 公募による35の校名案から設立準備委員が「石狩八幡小学校」を選考
- 平成30年9月21日 準備委の答申により石狩市議会が校名を「石狩市立石狩八幡小学校」と議決
- 平成31年2月19日 公募による132点から校章を決定
- 令和元年5月24日 校歌作詞者を、田岡克介氏（前石狩市長・旧石狩東小学校第7回卒業生）、作曲者を台坂香織氏（石狩小教諭・江別第一小校歌作曲者）に決定
- 令和元年12月8日 校歌制定
- 令和2年4月1日 石狩八幡小学校開校
- 令和2年5月1日 [8学級 児童数94名]

石狩市立石狩八幡小学校校歌

♩=110

作詞：田岡 克介
作曲：台坂 香織

イ シ カ ラ ベ ッ が な が れ く ー る

さ か な の む れ に ひ と と ひ と

れ き し を つ む ぐ な - み - の お と

い し か り は ち ま ん つ ど う ま な び や

石狩市立石狩八幡小学校校歌

作詞 田岡 克介
作曲 台坂 香織

一 イシカラベツが 流れ来る

鮭影(さかな)の群れに 人と人
歴史を紡ぐ 波の音

石狩八幡 集う学び舎

二 吹雪に耐えて 春を待つ

柏のように たくましく
りりしく光る ころろざし

石狩八幡 歩む学び舎

三 夕陽を受けて 奮い立つ

心はいつも 真紅(まくれない)
平和の誓い 築く未来(あす)
石狩八幡 ひらく学び舎

令和元年12月8日 制定

石狩市立花川小学校



制定 昭和8年

中央に一ひらの桜「国花」をすえ、その下に悠久の清流、石狩川を配し周りを地域（当時）の象徴である黄金稲穂でつつみ、その根元を小の字でしめくくって花川小のあるべき姿を表現している。



【所在地】 石狩市花畔1条1丁目7番地

校下地域の花畔はアイヌ語で「パナ・ウングル・ヤソツケ」（川下の人たちの漁場）に由来する。この地は松前藩時代から鮭の漁場があったところだ。明治4年、内陸部の開拓がすすみ岩手県からの入植により花畔村が開かれた。開拓民は子弟への教育に対する深い理解と期待により、石狩で最初に開設されたのが花畔教育所である。特に明治25年、花畔の総代人となった金子清一郎は翌年作られた村民契約証の四条で「小学学齢の児童あらば その期を怠らず就学せしむること」と記し、村民に対し教育の重要性を促した。尚、校庭に立つイチョウの二本木は「石狩市指定記念樹保護樹林」に指定されている。（昭和3年11月 御大典記念植樹）

【沿革】

- 明治6年4月8日 開拓使の許可を受け民家を借りて、花畔教育所を創立（石狩市で最初）
- 明治16年5月 石狩郡花畔学校と改称（3年制、児童数27名）
- 明治17年 木造平屋建ての校舎を新築（15坪）
- 明治23年11月 校舎を移転、新築（敷地150坪、校舎15坪）
- 明治24年4月1日 花畔小学校と改称（単級、児童数23名）
- 明治28年4月1日 花畔尋常小学校と改称（単級、児童数34名）
- 明治29年8月22日 校舎を移転、新築（敷地600坪、校舎24坪）
- 明治31年4月 補習科を設置（夜学）
- 明治37年8月10日 花川尋常高等小学校と改称（明治35年～同40年まで花川村成立による）
- 大正15年7月1日 青年訓練所を併置
- 昭和16年4月1日 花川国民学校と改称
- 昭和22年4月1日 石狩町立花川小学校と改称 5月1日 花川中学校を併設
- 昭和35年3月 校歌制定
- 昭和35年12月21日 花川中学校を分離、独立校舎が落成
- 昭和48年6月8日 開校100周年記念式挙行
- 昭和52年1月1日 児童数急増し、18学級編制認可となる（児童数627名）
- 昭和52年4月1日 児童増に伴い若葉小学校創立 児童減により12学級編制
- 平成15年4月1日 新設緑苑台小学校の設置により分離 11学級編制 児童数313名
- 令和2年5月1日 [14学級 児童数27名]

石狩市立花川小学校校歌

作詞：深田 利秋
作曲：伊藤 清逸

せんこのもりーを きりーひらき あせ
としんくに ゆめーをのせ
つよく ただーしく あゆもーうと
そせんがのこーせし おしえをば とも
に のばさん げんきよく あー
あ われー ら われ ら のま なび や

石狩市立花川小学校校歌

作詞 深田 利秋
作曲 伊藤 清逸

- 一 千古の森を きりひらき
汗と辛苦に 夢をのせ
強く正しく 歩もうと
祖先が残せし 教えをば
共に伸ばさん 元氣よく
ああ 我等 我等の 学舎
- 二 はるかに望む 手稲山
峰に耀く 白雲の
清く明るく 生きようと
父母の願いを 胸にひめ
今日も学ばん 元氣よく
ああ 我等 我等の 学舎
- 三 空ゆく雲の かげ宿し
石狩川の 水すめり
愛と誠を 広めんと
人の望みを はぐくんで
平和につくさん 元氣よく
ああ 我等 我等の 学舎

昭和35年3月 制定

石狩市立生振小学校



制定 昭和5年

北国の象徴である雪の結晶に生振の「生」を配し、集団の力と生振の豊かな理想郷建設の夢を託している。



【所在地】 石狩市生振375番地 1

生振の地名はアイヌ語の「オヤフル」（次の丘または川尻の丘）に由来する。明治4年生振村が設置され宮城県、岩手県からの入植により開拓が始まった。明治11年に民家を借り教育をした時期もあったが生振尋常小学校として創立されたのが明治29年である。その後、何度か場所を変え現在に至っている。豊かな田園地帯とミズバショウ群生や原始林の面影を残す防風林など、四季折々の豊かな自然環境などを生かした特色ある教育活動を進めている。昭和60年全町通学区の特認校となり、平成22年には全道小学校初のユネスコスクールの認定を受け、環境教育、体力づくり、少人数指導等、体感・体験を重視した教育が行われている。

【沿革】

- 明治29年12月31日 生振尋常小学校として生振五線北四号に創立 初代校長中島源五郎単級修業年限3年（在籍児童45名）
- 明治30年2月14日 生振尋常小学校開校式
- 明治32年4月5日 尋常科課程が修業年限4年となる
- 明治36年8月21日 生振尋常小学校が七線北六番地に移転、新築された
- 明治41年12月17日 生振尋常高等小学校と改称（高等科併置）
- 昭和5年10月17日 開校35年記念式を行い校旗、校章、校歌（昭和10年2月認可）を制定
- 昭和16年4月1日 生振国民学校と改称（3月1日 国民学校令公布）
- 昭和22年4月1日 石狩町立生振小学校と改称
- 昭和22年5月21日 新制石狩町立生振中学校開校（3学級）併置
- 昭和28年4月1日 生振小中学校 参泉小学校と統合し生振村五線北に新築移転
- 昭和35年4月1日 改訂校歌制定
- 昭和55年4月1日 生振中、石狩中学校へ統合
- 昭和56年2月22日 火災により生振小学校全焼（生振五線北 児童数75名）12月 校舍完成
- 昭和59年9月18日 特色ある学校として全町通学区の「特認校」として指定を受ける
- 昭和60年4月7日 特認校開校（前年9月18日 全町通学区の「特認校」として指定される）
- 平成22年6月 北海道小学校初のユネスコスクール認定書交付
- 令和2年5月1日 [6学級 児童数90名]

石狩市立生振小学校校歌

作詞：菅原 武夫
作曲：工藤富次郎

♩ = 100



石狩市立生振小学校校歌

作詞 菅原 武夫
作曲 工藤 富次郎

一

朝風のおう
みどり野に
光を追いて
つどうもの

新しきちえ
力あふれ

心きよし

学び舎に

二

とこしえの流れ
石狩の

豊けきおもい

ゆあみして

睦みあうもの

山をよび

のぞみは高し

学び舎に

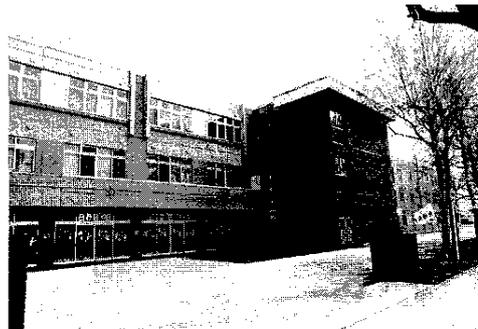
昭和35年4月1日 制定

石狩市立南線小学校



自然の厳しさの中にも地域の特色を生かした学校づくりを目指している。
雪は風雪にめげず力強く育つ子を、稔り豊かな穂は頭を垂れる如く謙虚な子を願い限りない成長を希望している。

制定 昭和26年12月3日



【所在地】 石狩市花川南3条1丁目18番地

校下は明治15年樽川村として開村され、明治25年に樽川村と花畔村が合併して花川村となった。その時樽川地区に設定されていた殖民地区画の南部を「南線」と称した。同地区では公立学校設立の要望が行われ、その結果同年10月20日、公立樽川簡易教育所として認可されたのに始まる。校下は純農村地域であるが時代により畑作・酪農・水田地帯と変化してきた。学校は児童数は少ない小規模校であったが、昭和40年頃から札幌市のベッドタウンとして急速に宅地化が進み、人口の増加と共に児童数が急激に増加し、大規模学校に発展した。

【沿革】

- | | |
|-------------|---|
| 明治35年10月20日 | 公立樽川簡易教育所として認可。（樽川西6線2号） |
| 明治38年11月23日 | 土地30アールを町村敬貴氏、建物を田所正義氏から譲り受け新校舎落成する（花川南3条2丁目） |
| 明治39年4月1日 | 南線尋常小学校として認可される |
| 明治41年 | 花川尋常小学校南線分教所となる |
| 昭和13年7月21日 | 南線尋常小学校として独立する（児童数 15名 学級数 1） |
| 昭和16年 | 国民学校令により南線国民学校と改称 |
| 昭和22年4月 | 学校基本法による学制改革で「石狩町立南線小学校」と改称 |
| 昭和31年 | 現在地（花川南3条1丁目）に校地を確保する |
| 昭和32年 | 校歌を制定する（最初の校歌） |
| 昭和40年 | この頃より新札幌団地として宅地分譲始まる |
| 昭和41年 | 児童数46名 |
| 昭和56年4月 | 児童数増加（1,409名）のため分離し「花川南小学校」開設 児童462名移籍する |
| 昭和49年3月 | 改訂校歌制定 |
| 昭和59年4月 | 児童数 1,174名 |
| 昭和60年1月 | 分離新設校「紅南小学校」開設 児童277名移籍する |
| 平成8年9月1日 | 市制施行により「石狩市立南線小学校」と改称 |
| 平成13年10月19日 | 100周年記念式典挙行 |
| 令和2年5月1日 | [33学級 児童数911名] |

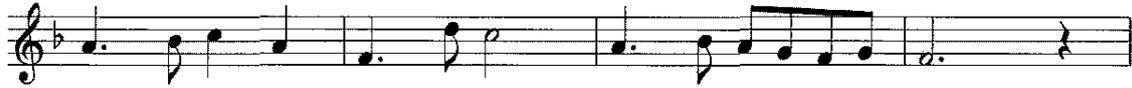
石狩市立南線小学校校歌

作詞：吉田 繁雄
作曲：山田 祐功

明るく 和やかに



は ま な す か お る い し か - リ - は ま に



ゆ め を も と め て つ ど い - く - る



ほ くら は - か ぜ の こ げ ん き な こ



さ と を つ く ろ う み な み せん しょう が っこう

石狩市立南線小学校校歌

作詞 吉田 繁雄
作曲 山口 祐功

一 はまなすかおる 石狩浜に
夢を求めて 集いくる
ぼくらは風の子 元気な子
里をつくろう 南線小学校

二 青い牧場と みのった稲穂
歴史をほこる この郷土
ぼくらは仲よい 元気な子
未来に夢の 南線小学校

三 手稲おろしの つめたい風に
ほほを赤らめ 雪合戦
ぼくらは北の子 元気な子
みんなで学ぼう 南線小学校

昭和49年3月 改訂

石狩町立南線小学校校歌

作詞：村岡 幸正
作曲：千葉日出城

♩ = 103

い し - かり の の の か ぎ ろ い - の ひ
ろ が る と - こ - ろ と ち ひ ろ く う
る お す み ず - に め - ぐ ま れ て み -
の - り ゆ た か な み な み せ ん

石狩町立南線小学校校歌 (旧)

作詞 村岡 幸正
作曲 千葉日出城

一 石狩の野の かぎろいの
ひろがるところ 土地広く
うるおす水に 恵まれて
みのり豊かな 南線

二 歴史は遠く 開拓の
祖の苦闘を 享けついで
至誠 敬愛 協力の
希望にたたえる 南線

三 朝夕のぞむ 手稲峰
雲嶺の照りの 清らかさ
高く理想に かけもち
学ぶ我等の 南線

昭和32年 制定

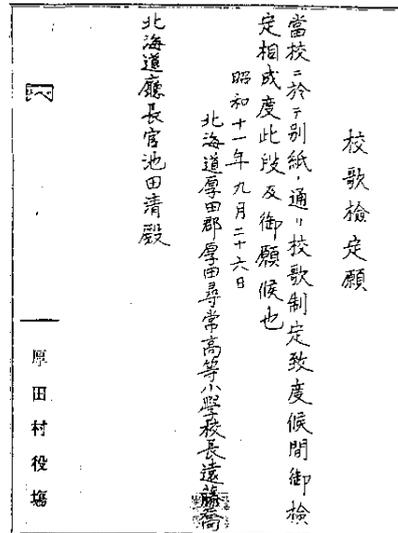
歌われなくなった三番の歌詞 ～生振小学校 厚田小学校 石狩小学校～

戦前の教育は子供たちに忠君愛国の思想の意識を高めさせるため文部省は認可制度を定め、学校が校歌を作成する場合は「校歌検定願」を提出させた。右は厚田尋常高等小学校が北海道廳経由で申請した写しである。

石狩市の学校において戦前に校歌が三番まであったのは生振尋常高等小学校、厚田尋常高等小学校、石狩尋常高等小学校の三校のみである。特に生振小と厚田小は元厚田小学校校長伊藤潮氏によると文部省の官報に認可された記録がある。

しかし、石狩小は戦時中に制定された関係で認可の記録は残っていない。三校とも歌詞の三番は忠君愛国にそった内容であることから戦後は校歌の二番までしか歌われていなかった。

生振小学校に関しては昭和35年に歌詞を新しく変えて現在歌われている。三校に共通するのは、作詞（含校訂）・作曲が同一人物であることだ。認可を得るために名のある人物に依頼した可能性も考えられる。



旧厚田小学校所蔵の校歌検定願写し

生振尋常高等小学校

明治29年10月31日創立
 昭和5年10月17日制定
 昭和10年2月15日認可
 作詞 石井正造
 校訂 飯田廣太郎
 作曲 工藤富次郎

<p>三 学びの庭につどひては 心をみがき身をきたへ 崇き訓を仰ぎつつ わが生振の名をあげん</p>	<p>二 大野が原をとこしえに 流れてやまぬ石狩の 水に心を澄ましつつ たえず進まん諸共に</p>	<p>一 朝な夕なに仰ぐなる 手稲の峯の気高さを おのが姿とかえりみて つとめ励まん諸共に</p>
--	---	---

厚田尋常高等小学校

厚田尋常高等小学校
 明治10年3月 創立
 昭和11年9月26日申請
 昭和11年12月24日認可
 昭和12年3月 制定
 作詞 飯田廣太郎
 作曲 工藤富次郎

<p>三 朝な夕なに 手をとりにて 大みことのり 長こみて 心と身体 鍛へては 忠誠の国民 なるぬべし 嬉しわれ等はこゝに生ふ</p>
--

歌詞の一、二番は
 「厚田小学校」に記載

石狩尋常高等小学校

昭和18年10月3日制定
 昭和12年3月 制定
 作詞 飯田廣太郎
 作曲 工藤富次郎

<p>三 皇国の 姿気高く 仰ぎみて 誠の心 磨きつつ 強く育たん 御民我</p>

歌詞の一、二番は
 「石狩小学校」に記載

石狩市立花川南小学校



制定 昭和56年2月16日

・北国、石狩の地を悠々と流れ、絶えることのない石狩川と雪の結晶を象徴した六角形は、現在と未来へ向かって大きく羽ばたくことを願っている。
・中央には、知育、徳育、体育の調和と統一、さらには、それを支える学校・家庭・地域社会が三位一体となって取り組む姿を三本のペンに託し、しかも人間性豊かな花川南小学校の児童の育成を希求している。



【所在地】 石狩市花川南6条5丁目1番地

花川南地区は明治15年樽川村の開村に始まる。現在の道々石狩手稲線を境にして石狩湾方面を西線、札幌方面を南線と区割りされた。「花川」の地名は、明治35年に花畔村と樽川村の合併により生まれた「花川村」に由来する。校下は畑作・酪農・水田地帯として発展を遂げてきたが、隣接する札幌市の急激な人口増加に伴い、昭和40年から民間業者による住宅団地の造成がなされ人口が飛躍的に増えた。

当時の南線小学校は小規模校であったが、児童数の増加により分離校の設置が町議会で可決され、昭和56年4月に「花川南小学校」が誕生した。校舎東側に防風林、南側に花川南公園があり、環境面でも恵まれている。保護者、地域社会は学校への関心・期待は高い。

【沿革】

- 昭和56年4月1日 石狩町立花川南小学校開校
- 昭和56年4月10日 花川南小学校入校式 学級数 16 児童数 596名
- 昭和56年4月26日 P T A 設立
- 昭和56年11月29日 体育館落成、開校記念式典、祝賀会、校歌制定、校旗採納
- 昭和59年12月30日 増築校舎落成（普通教室6 特別教室4 他）
- 平成元年4月1日 学級数 26 児童数 979名
- 平成2年11月25日 開校10周年記念式典挙行政
- 平成8年9月1日 市制施行により「石狩市立花川南小学校」と改称
- 平成9年3月27日 創意工夫育成功労学校」科学技術庁長官賞 受賞
- 平成12年10月6日 石教振・石教研「学校課題」研究発表会
- 平成12年11月25日 開校20周年記念式典挙行政
- 平成14年4月1日 特殊学級2「たんぽぽ学級」新設 学級数 22 児童数 671名
- 平成15年2月2日 児童会「グッドハートプライズ賞」受賞
(リングプルを収集し、車椅子を贈る活動に対して市教委より)
- 平成22年1月7日 全学級に新JIS規格机、椅子配置
- 平成22年1月15日 太陽光発電設置(稼働開始)
- 平成29年4月1日 道教委「授業改善等支援事業」拠点校指定(平成31年度までの3カ年)
- 令和2年5月1日 [22学級 児童数583名]

石狩市立花川南小学校校歌

作詞：花川南小学校父母と教師の会
作曲：高橋 達雄

♩=124 *mf* 明るくのびのびと

いし かりの の に ひ が の - ぼ - り あ げ ぼ の の

そ - ら も え る と - き さ や か に ひ び く -

あ かる い こ - え - は あ ら た な ち し き も と め つ -

つ ま な - び つ ど え る わ れ ら ま な び や て い や は

な が わ み な み は な が わ み な み し ょ う が つ こ う

石狩市立花川南小学校校歌

作詞 花川南小学校
父母と教師の会
作曲 高橋 達夫

一 石狩の野に 陽がのぼり

あけぼのの空 燃えるとき
さやかにひびく 明るい声は
あらたな知識 求めつつ
学び集える 我ら学び舎

二 手稲の山に夕日映え

北の星空 おおぐとき
優しさあふれる 明るいひとみ
豊かな心 求めつつ
みがき集える 我ら学び舎

三 世紀にわたる このまちの

明日の未来を 語るとき
力みなぎる 明るい笑顔
強いからだ 求めつつ
きたえ集える 我ら学び舎

花川南 花川南 小学校

昭和56年11月29日 制定

石狩市立紅南小学校



制定 昭和59年10月15日

子供たちが石狩の風雪に耐え強い身体と豊かな心そして伸びる学力をこの紅南小学校で培うことを願って設定した。外郭の六角は紅葉の型と6学年通じて伸びる学力、又その隣り合わせに分断しているのは明るい仲間。内郭の六角は石狩の風雪に耐える身体(港のイカリ)、中心の円は豊かな心を表している。



【所在地】 石狩市花川北1条6丁目1番地

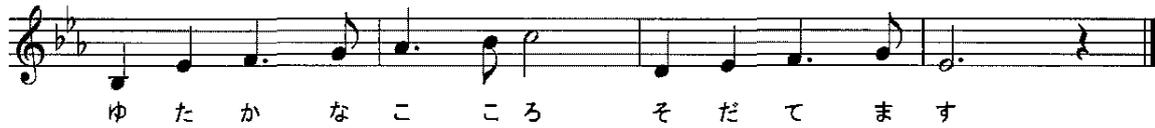
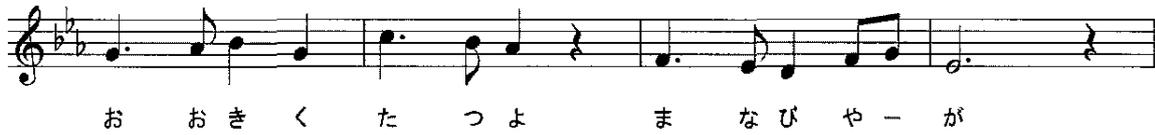
発寒川、紅葉山砂丘の北に位置する校下地域は、明治初期から入植、開拓された純農村（米作・酪農）地帯であった。しかし昭和47年から実施された石狩湾開発に伴い、札幌圏の住宅団地として新たな発展を遂げてきた地域である。学校は紅葉山砂丘を整地した土地に建ち、4000年前の鮭漁の遺構等が出土した紅葉山49号遺跡に隣接する。保護者の職業は自営業と商店経営者も一部あるが、総じて給与所得者が多く、札幌圏への通勤者が多く保護者の教育的関心は高い。昭和60年同地域にあった紅葉山小学校と南線小学校の児童数増加に伴い分離開校された。

【沿革】

- 昭和60年1月 開校告示、教職員人事発令・配置（職員数26名）
3学期始業式に開校 普通学級数 20 児童数 797名
紅葉山小学校より 520名 南線小学校より 277名
- 昭和60年4月6日 第1回 入学式 特殊学級開級26学級（特学2） 児童数980名
- 昭和60年9月25日 校歌制定
- 昭和62年3月31日 校区変更（花川北1条3丁目、4丁目を紅葉山小学校校区へ）
これに伴う児童の移動（1～4年の児童104名が紅葉山小へ、5年生については教育的配慮から現在校に留まる）
- 昭和63年3月31日 P T A広報紙「とうだい」 全道P T A広報紙最優秀賞受賞
- 昭和63年12月28日 校舎増築竣工（普通教室2，オープンスペース，自作教室）
- 平成3年9月 P T A主催第1回紅南祭開催（土曜休業日実施）
- 平成8年2月23日 石狩管内教育実践奨励表彰受賞
- 平成9月1日 市制施行に伴い石狩市立紅南小学校と改称
- 平成12年9月 第1回石狩市花壇コンクール最優秀賞受賞
- 平成13年12月19日 国際ボランティア作文コンクール全国審査で「国際ボランティア貯金普及協会理事長賞」受賞
- 平成22年7月22日 総務省フューチャースクール実証校決定
- 令和2年5月1日 [15学級 児童数354名]

石狩市立紅南小学校校歌

作詞：奈良 孝秋
作曲：伊藤 文康



石狩市立紅南小学校校歌

作詞 奈良 孝秋
作曲 伊藤 文康

一 広く拓ける 石狩に

大きく立つよ 学び舎が
緑の森に かこまれて
希望あふれる 紅南は
ゆたかな心 育てます

二 風雪強い 石狩に

しっかり立つよ 学び舎が
ぼくらがみんな あつまって
元気あふれる 紅南は
じょうぶな身体 育てます

三 流れはつきぬ 石狩に

永久に立つよ 学び舎が
新たな文化 創りつつ
未来にすすむ 紅南は
明るい仲間 育てます

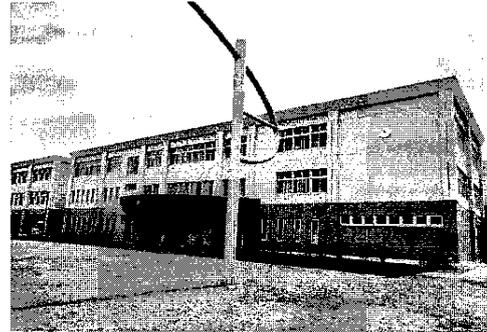
昭和60年9月25日 制定

石狩市立緑苑台小学校



制定 平成14年10月24日

・中央の輪は子供たち一人ひとり手をつなぎ、仲よく一つの輪（和）を作ることによって友達との絆を大切にすることを表現
・外周の星型は、六方に広がり、学校の発展と飛躍、子供たちのかぎりない未来と夢と希望を表現。
・6枚の葉（1年生～6年生）は、石狩の広大で緑豊かな環境の中で健やかに学習に励むことを表現。



【所在地】 石狩市緑苑台中央3丁目603番地

緑苑台地域一帯は、約五千数百年前までは海が入り込み、石狩湾（古石狩湾）の一部であった。やがて紅葉山砂丘の形成がきっかけに、次第に陸地化が進み遺跡も残された。この地は炭戸川（旧石狩川本流）と発寒川、伏古川などが合流する地点であり、湿地が広がっていた場所である。明治4年(1871)に花畔村が開村し、この付近は上花畔と呼ばれ、戦前までは牧草地が広がり、戦後は畑作や水田が耕作されていた所である。この地が平成2年から、大規模な宅地開発が進み人口の増加により、新設されたのが緑苑台小学校である。学校は今までにない設計がされ、校舎内の中央には多目的に活用できる広いスペースが設けられ、学年ごとの教室は仕切りが一部取り払われたオープンスペースになっていて特色ある学校経営が行われている。

【沿革】

平成13年9月	（仮称）緑苑台小学校建設に関わる協定書の締結
平成14年5月	（仮称）緑苑台小学校建設工事の着手
平成14年9月	一般公募した結果「石狩市立緑苑台小学校」と決定
平成14年11月24日	一般募集し校章を決定
平成15年4月	石狩市立緑苑台小学校開校 第1回入学式・始業式 児童229名 10学級
平成15年9月	開校をお祝いする会実施 校歌制定
平成15年10月	開校記念植樹
平成17年3月	学校版ISO認定式
平成19年10月	石狩市教育振興会研究大会、石狩市PTA連合研究大会開催
平成24年2月	校舎増築工事完了
平成25年3月	第10回卒業証書授与式 卒業生 60名
平成25年4月	第11回入学式・始業式 児童530名 21学級
平成27年4月	第13回入学式・始業式 児童518名
令和2年5月1日	〔14学級 児童数350名〕

石狩市立緑苑台小学校校歌

作詞：稲尾 勝美
作曲：向山 千晴

♩=116

はまなす ゆらぐ みどりの かぜ りよく えん だいの -
 こどもたち - はなさく ような ほほえ - みで
 ともからともへ やさしさを - かぜとひかりとまなびやで
 てとてをつなぎ ひびきあって かたろう ゆめを - - ゆめを
 さわやかに - - のびようあしたへ かがやいて わかい - みどりの
 かぜかおる りよく えん だ い しょう がっ こう

石狩市立緑苑台小学校校歌

作詞 稲尾 勝美
作曲 向山 千晴

一

はまなすゆらぐ 緑の風
 緑苑台の子どもたち
 花咲くような ほほえみで
 友から友へ やさしさを
 風と光と学び舎で
 手と手をつなぎ 響きあって
 語ろう夢を さわやかに

二

風車をまわす 北の風
 明るくはすむ 友の声
 大地に深く 根を張って
 はまぼうふうの 逞しさ
 風と光と学び舎で
 手と手をつなぎ 励ましあって
 学ぼう仲良くすこやかに

のびよう明日へ 輝いて
 若い緑の風薫る 緑苑台小学校

平成15年9月 制定

石狩市立双葉小学校



制定 平成21年2月26日

・石狩川、日本海、石狩平野の豊かな自然と石狩市の市木「かしわ」の若木の双葉を2校の統合の歴史として「い・し・か・り・し」の文字を組み合わせ、児童と児童、教師と児童、地域と学校が手をさしのべ向かいあって交流弾む学校の明るく元気な姿をデザインした。
・赤は燦然と輝く希望の太陽を表し21世紀をリードする双葉小を象徴する。



【所在地】 石狩市花川北4条3丁目1番地

校下は花川北防風林両側に広がる。この地は明治初期から開拓され約100年の歴史を持つ農村地帯であった。しかし、昭和50年代の道央札幌圏における人口の激増に伴い、北海道住宅供給公社をして花川北の団地化がすすみ、昭和52年4月若葉小学校が開校、更に人口増加が進み昭和54年1月には若葉小より分離独立して紅葉山小学校が開校した。その後、両校とも地域の高齢化と児童数の減少が著しいため、平成22年3月をもって閉校し、同年4月、新たな統合により「双葉小学校」として旧若葉小学校の校舎をもって開校した。家庭の大半はサラリーマン世帯であり、札幌市への通勤者が多く、学校と保護者・地域の連携を深め、保護者・地域同士の融和を意識した学校としての取り組みをしている。

【沿革】

平成19年7月	花畔・花川北地区小学校の適正規模・適正配置に係る基本方針決定
平成20年2月	教育委員会は若葉小学校と紅葉山小学校の統合を決定
平成20年12月	定例議会にて石狩市立学校設置条例の一部改正が議決 (平成22年4月に統合、校名を「双葉小学校」とすることを正式決定する)
平成22年2月	校舎耐震・大規模改修工事完了 校舎全面使用開始
平成22年4月1日	石狩市立双葉小学校開校 児童数 335名 学級数 14
平成22年4月8日	開校式、始業式、入学式(2学級 57名)
平成22年4月25日	双葉小学校PTA設立総会
平成22年10月17日	双葉小学校開校記念式挙行 校歌制定
平成24年4月	ユネスコスクール登録
平成24年11月30日	石狩管内学校課題研究発表会
平成25年4月	支援学級弱視学級開設
平成29年4月	特別支援学級肢体不自由児学級開設
平成30年3月	石狩管内教育実践奨励表彰
平成30年9月3日	学校力向上に関する総合実践事業 地域連携研修開催
令和元年12月	開校10周年記念 ありがとう集会実施
令和2年5月1日	[14学級 児童数266名]

石狩市立双葉小学校校歌

作詞・作曲：西木 祭



て いね の やま の ざ んせ つ に
ひ かり か が や く わ が ぼ こ う と も -
と かた ら い ゆ うじょ う - を は ば た
け の び - ろ ふ た ば の こ

石狩市立双葉小学校校歌

作詞・作曲 西木 祭

一 手稲の山の 残雪に

光輝く 我が母校

友と語らい 友情を

はばたけ伸びろ 双葉の子

二 はまなすの花 香り立つ

北の大地の 我が母校

知恵と勇気を 育みて

明日へ輝け 双葉の子

三 北風寒い 木枯らしに

耐えて雄々しい 我が母校

平和の願い 意志固く

永久に誇りを 双葉の子

平成22年10月17日 制定

石狩市立厚田学園



制定 平成31年2月21日

雪の結晶をモチーフに、九個の頂点は義務教育学校九学年を表している。中央の文字は厚田学園の頭文字「A」と「G」を曲線で図案化した形で「希望や夢、未来、健やかさ」などを象徴している。新たな歴史を刻んでいく未来への希望や夢を星の形で表現し、厚田川や日本海をイメージしたウオーターフロントブルーを基調色とした。



【所在地】 石狩市厚田区厚田171番地1

松前藩時代アツタ場所が設置され、古くからニシンの干石場所として繁栄をした。厚田の教育は、明治9年の古潭教育所開設に始まり、その後、住民の尽力によって学校が設立され、旧厚田村には多い時で、各地域に8校の小学校、5校の中学校が存在していた。昭和30年代頃からのニシン漁の衰退による人口の減少で過疎化が進行し、厚田村は平成17年に長い歴史を閉じて石狩市と合併した。

厚田村時代、合併後に共通して厚田の教育は、学校と地域との深い結びつきを大きな特徴としてきた。少子化による学校の再編にあたって、住民は学校と地域の連携、地域の学校としての小中学校の結び付きという厚田の伝統を基本として統合計画を進め、義務教育学校が新設されることになった。

【開校までの経緯】

平成10年	児童数減少を背景に、旧厚田村が村内中学校の統合の検討を開始
平成12年	厚田村学校配置問題検討委員会答申（中学校3校を統合し望来地区に新設）
平成17年10月1日	石狩市と合併これに伴い厚田村時代の答申、計画等が白紙に戻る
平成24年5月	石狩市「厚田区学校配置基本方針（案）作成懇話会」設置
平成27年11月	有識者からの意見書をもとに「厚田区学校整備の具体策（案）」決定 ・新たに小中一体型の施設を建設（仮称）厚田小中学校を新設する
平成28年8月26日	「（仮称）厚田小中学校設立準備委員会」活動開始
平成29年3月27日	「（仮称）厚田小中学校整備基本計画」を教育委員会会議において決定 ・義務教育学校として平成32年度に開校厚田中学校敷地に新校舎建設
平成30年7月17日	公募による24の校名案から設立準備委員が「石狩市立厚田学園」を選考
平成30年9月21日	準備委の答申により石狩市議会が校名を「石狩市立厚田学園」と議決
平成31年2月21日	公募による60作品から校章を決定
令和元年5月29日	校歌作詞者を元厚田小校長・伊藤潮氏、作曲者を同・高橋たい子氏に決定
令和2年1月29日	校歌制定
令和2年2月1日	新校舎工事落成（RC造 地上3階 2,989.70㎡）
令和2年4月6日	厚田学園開校（教職員 19名 児童生徒数 37名）
令和2年5月1日	〔前期課程4学級 児童数27名 後期課程3学級 生徒数10名〕

石狩市立厚田学園校歌

作詞：伊藤 潮
作曲：高橋たい子

Allegretto

1. あい か ぜ か お る お か の う え つ ど う わ れ ら の
2. (ゆう) ひ か が や る お か の う え つ ど う わ れ ら の

が く え ん ひ ろ ば お お き な ら は な を さ か せ ん と せ
が く え ん ひ ろ ば お お き な ら は な を さ か せ ん と せ

こ こ ろ ゆ た か で た く ま し く み ん な な か よ く い き て い
と も に ま な び た す け あ い つ よ く あ か る く い き て い

1.
く は ろ け き や ま な み あ お ぎ み て れ き し か が や く ふ

る さ と の お し え を む ね に き ょ う も ま た さ あ ホ ッ プ ス テ ッ プ ジ ャ ンプ ゆ う

2.
く あ つ た が く え ん さ か え あ れ さ か え あ れ

石狩市立厚田学園校歌

作詞 伊藤 潮
作曲 高橋たい子

一 あい風 薫る 丘の上

集う われらの 学園広場
大きな花を 咲かせんと
心豊かで たくましく
みんな仲良く 生きていく

はろけき山なみ 仰ぎみて
歴史輝くふるさとの
教えを胸に 今日もまた
さあ ホップ
ステップ ジャンプ

二 夕陽 輝く 丘の上

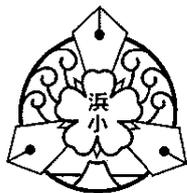
集う われらの 学園広場
寄せ来る波に 夢をのせ
共に学び 助け合い
強く明るく 生きていく

厚田学園 栄えあれ

栄えあれ

令和2年1月29日 制定

石狩市立浜益小学校



制定 平成11年11月21日

三本のペンは統合3校の子どもたちが、仲良く希望を持って勉学に励むことを願い、波は日本海の恵みとともに、自然の厳しさに立ち向かう力強さを表現している。ハマナスは風雪に耐え抜く強い心を、黄金山は、浜益の気高さと誇りを表している。そして、周りを包む輪は、全体の結束を表現している。全体として、浜益の子どもたちが、力を合わせ、助け合いながら学習や活動に励み、北国の厳しい自然に打ち勝つ強い心と体をつくって、豊かな心を持ち、たくましく生きていく人に成長していくことを願っている。



【所在地】 石狩市浜益区柏木1番地17

浜益はニシン漁場として繁栄し、海岸部を中心に最大で11校の小学校が存在していた、人口減少と少子高齢化が進む中、昭和40年には黄金小、中央小、北部小の3校に整理統合したが、それでも各学校の複式化を避けることができず、平成11年に村内の学校を一つに統合することになった。

当時、高校が浜益地区、中学校が川下地区にあったことと、校舎が新しかったことから、柏木地区の黄金小学校校舎を利用し、3校を対等統合し、名称は浜益村唯一の学校として「浜益小学校」を復活させ新設校として平成11年に開校した。

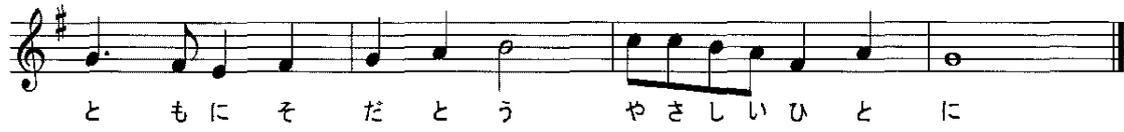
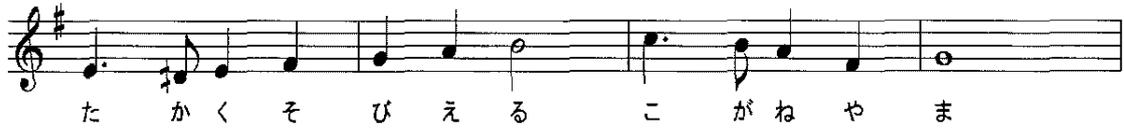
浜益小学校は、最新の情報機器を活用した僻地教育の先進校としてだけでなく、日本遺産構成文化財に認定された「沖揚げ音頭」を伝承し、地域の伝統を今に伝える教育活動でも注目を集めている。

【沿革】

- 平成11年4月1日 浜益北部小、浜益中央小、黄金小を統合し、浜益小学校が開校する
児童数 71名 7学級編制（普6特1）
- 平成11年11月21日 校歌、校章・校旗制定
- 平成15年9月26日 石教研学校課題発表校 地域学習の成果を発表 沖揚げ音頭も披露
- 平成17年10月1日 浜益村が石狩市、厚田村と合併したため「石狩市立浜益小学校」に校名変更
- 平成19年 前後期の2学期制を開始
- 平成22年12月16日 「僻地・小規模校におけるICT教育のあり方検証」事業を、石狩市事業として決定電子黒板、タブレット等、最先端のICT教育環境が整備される
- 平成23年1月26日 人形作家の八田美津さんから、地域の情景を表現した人形を寄贈され、常設展示を開始
- 平成25年4月1日 児童数減少により、一部を複式化し4学級編制となる
- 平成26年11月26日 石教振学校課題研究発表会ICTを活用した複式指導を発表
- 平成27年 北海道実践的安全教育モデル構築事業指定校（津波避難）
- 令和元年10月20日 北前船寄港地フォーラムin北海道・小樽石狩の石狩会場におけるオープニングセレモニーで、日本遺産構成文化財に指定された「沖揚げ音頭」を披露
- 令和2年5月1日 [4学級 児童数24名]

石狩市立浜益小学校校歌

作詞：坂本 汎
作曲：吉弘 文人



石狩市立浜益小学校校歌

作詞 坂本 汎
作曲 吉弘 文人

一 昇る朝日も 鮮やかに

高くそびえる 黄金山

栄えある伝統 創ろうと

仲よく励む 浜益小

集った仲間を 想いつつ

共に育とう 優しい人に

二 ハマナスかおる この里で

先人労苦 偲びつつ

厳しい自然に 打ち克って

進んで学ぶ 浜益小

豊かな大地を 踏みしめて

共に鍛えよう 身と心

三 夕陽に映える 日本海

恵みの海に いだかれて

春夏秋冬 心満ち

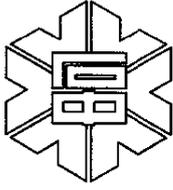
明日へと向かう 浜益小

故郷の優しさ 胸にして

共に歩こう 明るい未来

平成 11 年 11 月 21 日 制定

石狩市立石狩中学校



制定 昭和55年4月

・北海道開祖の地で、厳しい風雪に耐え、輝く偉業を残した先人の魂を受け継ぎ、強靱な身体と気高い理想を永久に育むことを希求する。
・六角は生徒たちの団結を、6Vは「健康である・よく考える・認め合う・協力し合う・進んで実行する・最後までやりぬく」生徒を表す。
・又、6Vは当時校下6小学校を表す。



【所在地】 石狩市志美293番地30

松前藩時代からアイヌとの交易や鮭漁場の拠点として栄えた本町地域に昭和22年5月1日新制石狩町立石狩中学校が開校した。校舎は石狩市弁天町（現在「番屋の湯」の敷地）に建てられていた。

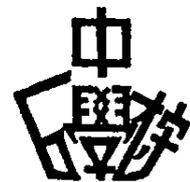
しかし、昭和54年3月31日、33年の歴史を閉じて統合移転した。この間2,554名が巣立った。

当時、石狩は花畔・花川地区団地造成、石狩湾新港開港と新たな都市へと変貌を遂げようとしていたが、歴史ある本町地区の石狩中、農村部の高岡中、生振中の生徒数の減少傾向に伴い3校の統合問題が起こった。その結果、昭和55年3地区からの通学に適した志美地区に学校名を引継ぎ新生「石狩中学校」が開校された。尚、校章は変更したが校歌は旧石狩中学校のもの（昭和30年5月24日制度）を継承された。

【沿革】

昭和55年4月	石狩中学校開校（石狩中・高岡中・生振中3校統合）7学級 生徒数257名 校歌は旧石狩中学校のものを継続（昭和54年5月に決定）
昭和55年11月	体育館竣工
昭和59年12月	石狩中学校区青少年健全育成会結成
平成元年11月	開校10周年記念式典挙行
平成8年9月1日	市制施行にともない「石狩市立石狩中学校」と改称
平成11年10月	開校20周年記念講演会
平成12年1月	全国都道府県対抗駅伝大会出場
平成13年3月	簡易水洗トイレ完成
平成14年3月	図書室整備
平成15年4月	省エネ教育推進・2学期制研究モデル校
平成15年12月	風力発電設置
平成21年6月	開校30周年記念体育祭
平成21年10月	開校30周年記念文化祭
平成22年4月	特別支援学級（自閉・情緒）開設
令和2年5月1日	[5学級 生徒数79名]

旧石狩中学校の校章
昭和22年7月制定



石狩の風土に根づいた教育の確立と、大きく伸びる石狩中学校の生徒の未来を示す

石狩市立石狩中学校校歌

(踊りのある校歌)

作詞：佐々木 利雄
作曲：千葉 日出城

♩=112

ひ ら - い た ひ と の こ - こ ろ を ひ め - る お
お - き な な が れ い し か り が - わ - に
わ れ ら わ こ う ど つ ど い む す ん で あ ら た な れ き し
つ く る を ち か う あ あ い し か り ち ゆ う
よ の そ - み わ き た つ

石狩市立石狩中学校校歌

作詞 佐々木利雄
作曲 千葉日出城

一 拓いた人の 心を秘める

おおきな流れ 石狩川に

我等若人 集いむすんで

新たな歴史 創るを誓う

ああ 石狩中よ 望みわきたつ

二 学びの友の 心を語る

親しい香り 砂丘の花に

我等若人 夢を託して

すなおな暮らし 創るを誓う

ああ 石狩中よ 望みわきたつ

三 世界のひと 心をつなぐ

波濤のうねり 青い流れに

我等若人 五体躍らせ

豊かな文化 創るを誓う

ああ 石狩中よ 望みわきたつ

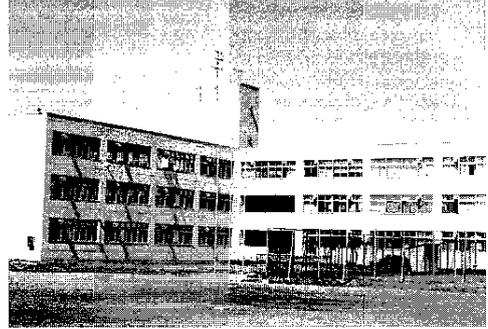
昭和30年5月24日 制定

石狩市立花川中学校



制定 昭和61年3月1日

・この校章は旧花川中学校と花川北中学校の両校で学んできた生徒たちが、互いに友情と協調の精神を持って進むようにとの願いを込めて作成された。
・外側の六角形は北国の雪の結晶を表す。その内側に手と手をつなぐ子どもたち、中央の丸い輪は友情と協調を示し、桜の花は、旧花川中学校の校章の花を残してある。



【所在地】 石狩市花川北4条1丁目2番地1

昭和50年代、花畔団地を含む花川北地区の人口増に伴い花川北中学校の生徒増によるマンモス化の解消と旧花川中学校校舎の老朽化による教育環境の低下に対する解消が問題化された。新たな中学校の設置に向けて準備が進んだ。町教育委員会は昭和61年12月、新中学校設置条件として旧花川中学校をいったん閉校させ花川北中学校の一部校区と統合することを決定する。新校舎は団地の一角、旧花川中学校と花川北中学校とのほぼ中間地点に位置を変えて建てられた。校名は「花川中学校」とされたが、旧花川中学校を継承しない新しい「花川中学校」として昭和62年4月1日、新たな歴史を刻む中学校としてスタートした。

【沿革】

昭和62年4月1日 開校（旧花川中学校廃校） 生徒376名 10学級 教職員22名
昭和62年4月10日 入学式 4学級165名
昭和62年6月1日 開校式 開校記念日とする
昭和62年9月14日 制服決定（生徒や保護者、地域の意見を取り入れる）
昭和63年2月15日 校歌制定
昭和63年9月18日 青少年科学技術展団体優勝
平成元年11月21日 石狩管内視聴覚研究大会開催
平成2年7月28日 全道中体連水泳大会で3年男子、堀川1500m自由形優勝
平成3年7月30日 恩納村中学生交流団出発（生徒5名参加）以後定期交流
平成4年4月1日 17学級 541名 教職員 33名
平成4年11月21日 旧花川中学校開校30周年記念碑「創造」移設 校舎周辺植樹
平成5年8月1日 全道中体連水泳大会で女子400mリレー優勝
平成6年8月3日 ロシア、ワニノ市交流訪問（生徒4名参加）
平成6年11月10日 北海道国際理解教育研究大会開催
平成9年2月21日 石狩管内教育実践奨励賞受賞
平成18年2月 國母和宏君（平成15年度卒業生）トリノ冬季オリンピック出場
平成18年11月10日 開校20周年記念式典挙行
平成28年6月1日 開校30周年
令和2年5月1日 [17学級 生徒数500名]

石狩市立花川北中学校校歌

作詞：佐藤 利雄
作曲：石山 美治

♩ = 108
mf

だ い - ち - ひらける い - し - かり に あさ -

ひ に は え - る き た ちゅう がっ こう

mp れ ん ぼ う てい ね を あ お ぎ つ つ ま -

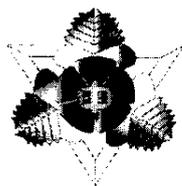
こ と の ひ か り ひ と す じ - に と も -

に - す す ま ん の そ み も た か - く 2. み ど - て

1, 2. 3.

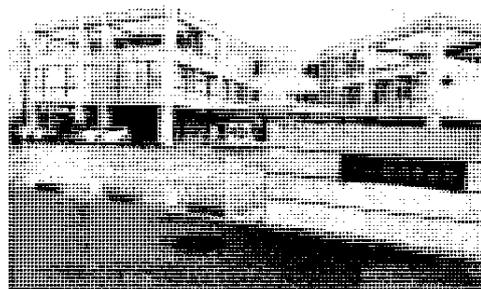
<p>昭和56年1月26日制定</p>	<p>三 風雪すさぶ 石狩に 雄々しく建てる 北中学校 遠き未来を 凝つめつつ 新たな文化 創るため 共に向かわん 決意を秘めて</p>	<p>二 緑かがやく 石狩に 姿美わし 北中学校 友情の輪を 広げつつ ゆたかな情操 育んで 共に学ばん 明るく清く</p>	<p>一 大地拓ける 石狩に 朝陽にはえる 北中学校 連峰手稲を 仰ぎつつ 真理の光 ひとすじに 共に進まん 希望も高く</p>	<p>石狩市立花川北中学校校歌</p> <p>作詞 佐藤 利雄 作曲 石山 美治</p>
---------------------	--	--	--	--

石狩市立樽川中学校



制定 平成6年12月1日

・三枚の葉は、石狩市の雄大な緑豊かな環境の中で健やかに勉学に励むことを意味している。
・三角の三方には「TARUKAWA」の「T」をアレンジし、三方に広がり、学校の発展を意味している。
・中央には、石狩の花（ハマナス）を配し、健康で明るく、お互いに助け合い、暖かいぬくもりのある校舎を意味している。



【所在地】 石狩市樽川6条3丁目600番地

昭和53年に開校した花川南中学校は、その後の花川南地域の人口増とともに生徒が急増し、プレハブ校舎での授業を余儀なくされていた生徒数1,000名を超えるマンモス校であった。同校PTAは平成2年10月、プレハブ校舎の早期解消要望書を教育委員会へ提出するなど、教育環境の整備を関係機関等へ要望を続けた。その結果、平成5年3月、町議会で「石狩町立花川南第2中学校建設決議」がなされ校舎の建設が進んだ。校名は地元住民の強い願いにより、昭和48年3月、石狩湾新港の建設と後背地開発にともなって閉校した「樽川中学校」の名前を復活させた。

【沿革】

- 平成7年4月1日 石狩町立樽川中学校開校（生徒505名 15学級 教職員33名）
平成7年10月7日 校歌制定
平成8年6月 和太鼓贈呈（樽川町内会より3台）
平成8年9月1日 市制施行で石狩市立樽川中学校と改称
平成9年6月 ワニノ市（ロシア）スポーツ交流参加（8名）
平成10年10月 石狩管内教育機器活用研究大会開催
平成13年10月 芸術文化ふれあい教室、東京フィルハーモニー演奏会
平成15年7月 ソフトボール部全道大会準優勝。8月に全国大会出場
平成16年10月 石教研学校課題研究発表会&石教振研究発表会開催
平成17年1月 石狩市学校版環境ISO校認定
平成18年4月 少人数学級実践研究開始（1学年4学級から5学級へ）
平成18年8月 演劇同好会北海道中学校演劇発表大会優勝
平成19年10月 第1回吹奏楽部定期演奏会開催
平成21年5月 千本桜運動に参加、エゾヤマザクラ15本植樹
平成22年4月 特別支援学級（かがやき・2学級）開設
平成27年7月 柔道個人、体操1部個人全道大会優勝
平成30年8月 石狩ワニノ姉妹都市提携25周年記念事業で、石狩太鼓同好会訪問
令和2年5月1日 [17学級 生徒数470名]

石狩市立花川中学校校歌

作詞：遠藤 力雄
作曲：高橋たい子

Moderato

ながれ ゆ た か な い し か り の う つ
す れ き し の か げ ふ か く
あ た ら し い ま ち ひ ら け ゆ く せん
じ ん の こ こ ろ う け つ い で の ぞ み の さ と え が き つ ー つ わ れ
ら が つ く る は な か わ ち ゆ う が つ こ う

石狩市立花川中学校校歌

作詞 遠藤 力雄
作曲 高橋たい子

一 流れ豊かな 石狩の

映す歴史の 陰深く
新しいまち 拓けゆく
先人のこころ 受け継いで
望みの郷 えがきつつ
われらが創る 花川中学校

二 風雪すさぶ 校庭の

たぎる血潮の 影おどり
希望の学び舎 築きゆく
ひろいこころ すこやかに
真理の道 究めつつ
われらが学ぶ 花川中学校

三 石狩新港 波青く

手稲の高嶺 影映し
未来の夢 広げゆく
世界にかける 友の愛
高い理想 かけつつ
われらが励む 花川中学校

昭和63年2月15日 制定

石狩市立花川南中学校



制定 昭和53年3月1日

・北国の北海道、石狩、風雪に耐え輝く偉業を打立てた先人の強靱な意志を受けつぎ、強健な、気高い理想を永遠に育まんことを願いとする。
・三本のペンは、英知の探求、平和と愛、豊かな創造を育てることを願い、二つの根を固く結んで学校と地域社会の和と協力を表す。



【所在地】 石狩市花川南9条4丁目94番地

昭和40年代この地域は石狩町大字樽川村と呼ばれ酪農と水田が広がる農村地帯であった。しかし、時代の変化で札幌市の郊外住宅地の計画が起り、民間業者の内外緑地開発による住宅地造成により新札幌団地が形成され、以来住宅の建築が相次ぎ人口も年を追うごと増加した。人口増に伴いこの花川南地区の通学区域であった花川中学校では生徒の増加で対応が困難になった。昭和51年地域住民が新札幌団地内に中学校増設の陳情を町に行なった。昭和52年3月30日、仮称南線中学校校舎建設を町議会で可決し校舎建築工事と開校に関わる準備が進められた。同年12月27日、教育委員会会議で校名を「石狩町立花川南中学校」と決定され翌年開校された。

【沿革】

- 昭和53年2月22日 校舎一期工事完成
- 昭和53年4月1日 石狩町立花川中学校より分離独立 9学級編制認可 生徒319名で開校
校歌制定
- 昭和58年12月24日 増改築校舎完成 学級移動
- 昭和59年4月1日 19学級編制（1学年7 2学年6 3学年6）生徒数823名
- 平成3年4月 28学級編制認可（この大規模な学級編制は平成6年度まで続く）
- 平成4年5月1日 生徒数 1,057名（開校以来最高の生徒数）
- 平成5年8月 全国中学校軟式野球大会出場（奈良県）
- 平成7年4月1日 生徒数の増加が続き花川南中より樽川中学校分離し15学級編制となる
- 平成7年8月 コンピュータ教室設置（生徒用40台）
- 平成8年9月1日 市制施行に伴い石狩市立花川南中学校と改称
- 平成9年8月 全国中学校バレーボール大会（香川県）に男女出場 ベスト8
- 平成10年8月 全国中学校バレーボール大会（山形県）に女子出場 男子ベスト16
- 平成13年10月 沖縄県恩納村との交流が始まる
- 平成14年8月 全国中学校バレーボール大会（奈良県）に女子出場
- 平成23年8月 札幌地区吹奏楽コンクールA編成金賞
- 令和2年5月1日 [10学級 生徒数271名]

石狩市立花川北中学校



制定 昭和55年2月1日

・雪の結晶を示す六角形は、石狩の厳しい風雪に耐え、開拓の偉業を成し遂げた先人の「たくましい意志と体力」の継承を願う。
・縁をとりまく六個の「北」は北中の和と協同の精神を示す。
・三つのペンは「真理の探究」「平和の希求」「豊かな創造」を表す。
・点粒は、母なる石狩の大地、生きとし生ける者を育む「愛」を象徴する。



【所在地】 石狩市花川北3条4丁目130番地

昭和40年代この地域は石狩町大字花畔村と呼ばれ酪農と水田の広がる農村地帯であった。しかし、昭和48年、花川南地区に続き花川北地区も道住宅供給公社花畔団地の分譲が始まった。その後花川北地区でもみるみる人口の増加がすすみ、新たな中学校の建設計画が起こった。昭和54年度には具体的な計画と工事が進められ、同年12月、校名を「石狩町立花川北中学校」と決まった。昭和56年4月、花川中学校から分離する形で開校された。父母の多くは札幌へ通勤し、教育に対する関心が高い地域である。

【沿革】

昭和54年7月	校舎第1期工事開始
昭和54年10月	花川中学校に花川第二中学校開校準備委員発足
昭和54年12月	石狩町議会 校名を石狩町立花川北中学校と決定
昭和55年4月1日	石狩町立花川北中学校開校
昭和55年4月8日	校旗贈呈
昭和55年4月10日	第1回 入学式（生徒数 569名 13学級 教職員28名）
昭和55年4月29日	P T A 設立総会
昭和55年5月9日	開校式（開校記念日）
昭和55年7月	第1期工事終了
昭和56年1月26日	校歌制定
昭和61年4月	生徒数 1,193名 30学級
昭和61年10月3日	文部省指定研究発表
昭和62年4月1日	新「花川中学校」設立に伴い、一部の校区変更される
平成元年11月	開校10周年記念式典
平成3年4月	A E T 配置
平成8年9月	市制施行に伴い石狩市立花川北中学校と改称
令和2年5月1日	[12学級 生徒数276名]

石狩市立樽川中学校校歌

作詞：福井 直之
作曲：上元 芳男

Andantino

い の ちをまもー る い し か りー の み
ど りのだいち に ね を お ろー し
わ か さ み な ぎ る せ い し ゅ ん を き よ く あ か る く た か め あ う さ
あ た る ち ゅ う ー よ す こ ー や か ー に の び ゆ く か ら ー
だ き ー た ー え よ う Health health! よ heart! Heart heart!

石狩市立樽川中学校校歌

作詞 福井 直之
作曲 上元 芳男

一 生命を守る 石狩の

緑の大地に 根をおろし
若さみなぎる 青春を
清く 明るく 高め合う
さあ 樽中よ 健やかに
伸びゆく身体 きたえよう
HEALTH(ヘルス)

二 陽光映える 学び舎に

手稲の連峰 仰ぎつつ
知性輝く 若人が
更に 厳しく 磨き合う
さあ 樽中よ 眉上げて
学びの道に 分け入ろう
HEAD(ヘッド)

三 世界を結ぶ 懸け橋と

石狩新港 担いつつ
未来に生きる 友情を
熱く 通わせ 結び合う
さあ 樽中よ たずさえて
明日への歩み 進めよう
HEART(ハート)

平成7年10月7日 制定

石狩市立浜益中学校



制定 昭和26年4月

・周囲は稲と波を図案化したもので、北の郷・幸豊かな五穀、そして潮とどろく海の幸に恵まれた理想郷を意味し、その中に、浜中が厳然と伝統を維持することを希求している。
・中心のHは、浜益の頭文字のHで、将来に向かって無限の広がりを象徴。
・中をHの上にし、浜益の未来を担う若人の力、中学生を意味する。



【所在地】 石狩市浜益区浜益50番地22

戦後の新学制により、昭和22年浜益（茂生）地区に浜益小学校校舎に併置されて開校した。浜益地区の拠点校として、当初は幌・尻苗・濃昼・実田・浜東の分校を有していたが、昭和29年に各学校は独立校となった。昭和26年に川下地区に校舎が落成し独立移転した。その後浜益村にあった他の中学校は、独立統合が進み、平成11年4月幌中を浜益中学校に統合してからは浜益村唯一の中学校となった。

平成23年8月、道立浜益高等学校閉校後の校舎に移転して現在に至る。

【沿革】

- 昭和22年6月5日 浜益村立浜益中学校開校（浜益小学校に併置） 3学級編制 106名
昭和22年6月6日、黄金中学校開校（実田・浜東分校設置）幌中学校開校
昭和22年6月24日 浜益中学校尻苗分校を設置し開校（尻苗小学校に併置） 生徒数32名
昭和22年8月18日 浜益中学校濃昼分校を設置し開校（濃昼小学校に併置） 生徒数12名
昭和25年4月 幌中学校を浜益中学校の分校とする
昭和26年2月1日 川下村に新校舎落成。黄金中学校は浜益中学校に統合される 6学級編制
295名 幌・尻苗・濃昼・実田・浜東の各中学校は浜益中の分校となる
昭和27年10月1日 浜益中学校千代志別分校を設置し開校
昭和29年4月1日 千代志別・幌・尻苗・濃昼・実田・浜東の各分校が独立校となる
昭和32年11月 開校10周年記念式典を挙げる
昭和34年3月 校歌制定
昭和39年4月1日 11学級編制 444名
昭和41年4月1日 浜東中学校を統合
昭和43年9月1日 実田中学校を統合
昭和58年4月1日 尻苗中学校を統合
平成3年8月 第1回ハワイ研修旅行実施（平成17年まで15回実施し終了する）
平成4年4月1日 濃昼中学校を統合
平成11年4月1日 幌中学校と統合
平成17年10月1日 石狩市 厚田村との合併により「石狩市立浜益中学校」に校名変更
平成23年8月1日 校舎移転 浜益区浜益 旧浜益高等学校校舎へ
令和2年5月1日 [3学級 生徒数16名]

石狩市立浜益中学校校歌

作詞：小田 観蜚
作曲：中川 則夫

あ さあさ み あ ぐ る た かきあ お ぞ ら
 き ほうに も ゆ る め からだをき た え
 よ きし の お し えに み がく は ち と く
 い ざい ざ は まーま す ま なび や み と せ
 つ き ひ を お し み て は げ む を み よ や

石狩市立浜益中学校校歌

作詞 小田 観蜚
作曲 中川 則夫

一 朝々見上ぐる 高き青空

希望に燃ゆる目 からだを鍛え
 よき師の教えに みがくは知徳
 いざいざ浜益 学び舎三とせ
 月日を惜しみて 励むを見よや

二 昼日に凧たる 海を真下に

舵ある船路の はるけき行手
 よき友連れだち たゆまぬ努力
 いざいざ浜益 学び舎三とせ
 世のため尽さん きおいを見よや

三 夕星またたく 黄金の富士に

安らぐ思ひよ 郷土のほこり
 よき村ここにぞ 住えるわれら
 いざいざ浜益 学び舎三とせ
 上がれる眉根に いそしむ見よや

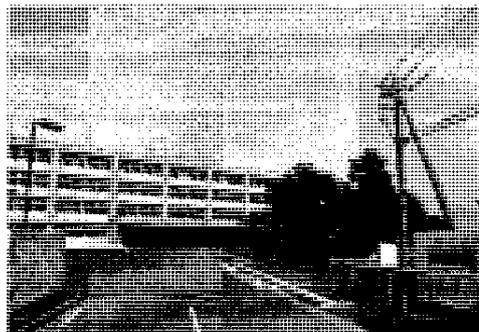
昭和34年3月 制定

北海道石狩翔陽高等学校



制定 昭和53年1月日

・各々の六角形に六語の校訓を抱かせそれを連ねて六華の雪の結晶とした。「協調信頼」の強い絆を表す。
・六華の遠近法によって奥行をもたせ、石狩平野の広がり豊かさ、発展する未来を表し「自主創造」の精神とした。
・中央をよぎる一筋の曲帯は、北海道を貫き大海に注ぐ石狩川を表し、強い信念「堅忍不拔」を意味する。



【所在地】 石狩市花川東128番地31

【沿革】

- 昭和52年12月22日 北海道立学校設置条例により北海道議会において、昭和53年4月1日
北海道石狩高等学校の設置を議決
- 昭和53年3月9日 校舎第1期工事検定
- 昭和53年3月20日 屋内体育館工事検定
- 昭和53年4月10日 北海道石狩高等学校開校（全日制普通科） 第1学年6学級 定員270名
PTA並びに後援会設立総会開催
- 昭和53年7月17日 生徒会発足
- 昭和53年7月18日 校歌制定
- 昭和53年11月30日 校庭・グラウンド造成工事検定
- 昭和53年12月9日 校舎第2期工事検定
- 昭和54年12月25日 格技場工事検定
- 昭和56年3月9日 同窓会発足
- 昭和61年10月5日 創立10周年記念式挙行
- 平成9年10月5日 創立20周年記念式挙行
- 平成12年10月12日 総合学科へ学科転換 北海道教育委員会決定
- 平成12年12月7日 学校名を「北海道石狩翔陽高等学校」に変更決定
- 平成14年3月29日 産業教育施設新築・学科転換改修工事・防火対策緊急整備工事検定
- 平成15年1月31日 普通科閉科式挙行
- 平成15年4月1日 総合学科に転換
- 平成16年3月1日 総合学科1期生卒業
- 平成19年10月27日 創立30周年記念式挙行
- 平成29年 創立40周年記念式挙行
- 令和2年5月1日 [24学級 生徒数937名]

【校訓】 「自主創造 堅忍不拔 協調信頼」

北海道石狩翔陽高等学校校歌

作詞：勝海 敏弘

畑本三津治

作曲：山中 幹雄

こん ぺ きの そ ら に ひ は - の - ぼ - り わ か ば は も ゆ
 る ば ら - と の に せ ん よ の ひ と - み き ぼ - う に
 も え - て い ま こ こ に は つ ら つ と い ら か に つ ど -
 う じ し ゅ そ う ぞ う の こ こ - ろ も か - た - く
 あ し ど り - た し か に ま な - び ゆ く い し か り
 の だ い ち に そ だ - つ わ こ う ど わ れ ら

北海道立石狩翔陽高等学校校歌

作詞 勝海 敏弘

畑本三津治
作曲 山中 幹雄

一 紺碧の空に陽は昇り

若葉は萌ゆる茨戸野に

千余の瞳希望に燃えて

今ここにはつらつと蕈に集う

自主創造の意志も固く

足どりたしかに学びゆく

石狩の大地に育つ

若人われら

二

はるけく続くわが沃野

清き流れは脱ぐ環りゆく

千余の胸は大志を抱き

今ここにたくましく蕈に集う

堅忍不拔の意志も強く

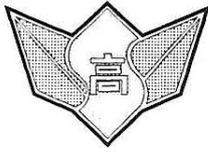
輝く未来を創りゆく

石狩の大地に生きる

若人われら

昭和53年7月18日 制定

北海道石狩南高等学校



制定 昭和57年12月

校章の原点は活力に満ちた石狩市の市花「ハマナス」にもとめ、この花の持つ純粹さ、明るさ、及び厳しい自然の中で育つたくましさ「イメージ」を葉に象徴化して二枚の菱形の組み合わせであらわし、中央には校名に付された「南」をとって石狩平野を実り豊かに潤す石狩川をS形で配してある。



【所在地】 石狩市花川南8条5丁目1番

【沿革】

- 昭和56年2月19日 北海道教育委員会において石狩地区に高等学校設置を決定
昭和56年12月21日 北海道議会において、石狩地区高等学校建設用地を石狩町花川に取得決定
昭和57年4月1日 (仮称) 北海道石狩地区高等学校準備事務室を設置
昭和57年6月 校舎建築第1期工事、グランド造成着工
昭和57年11月26日 昭和58年度開校時、第1学年10学級定員450名と決定
昭和57年12月28日 道議会において、北海道石狩南高等学校設置を決定
昭和58年3月15日 第1期工事完成
昭和58年3月28日 校歌制定
昭和58年4月1日 北海道石狩南高等学校開校
昭和58年4月30日 北海道石狩南高等学校父母と先生の会・体育文化振興会設立
昭和58年12月20日 第2期工事完成
昭和59年12月10日 第3期工事完成
昭和61年3月10日 北海道石狩南高等学校同窓会「石翔会」発足
平成2年4月4日 カナダ姉妹都市校提携 (ロブロン・セカンダリースクール)
平成4年10月19日 創立10周年記念式典挙行
平成6年4月12日 1時限65分授業開始
平成10年3月25日 第2屋内体育館完成 12月2日 身障者トイレ設置工事完成
平成11年2月5日 第1屋内体育館暖房改修工事完成
平成14年10月20日 創立20周年記念式典挙行・コンサート挙行 (札幌コンサートホール kitara)
平成20年4月1日 1時限50分授業開始
平成21年1月23日 校舎大規模改造工事完成
平成24年10月13日 創立30周年記念式典挙行
令和2年6月 総務大臣賞受賞「情報通信の安心安全な利用のための標語 学校部門」
令和2年5月1日 [21学級 生徒数837名]

【校訓】 「博学篤志」

北海道立石狩南高等学校校歌

作詞：原子 修
作曲：大坂 克之

Moderato ♩ = 116

イシカリのの が わたしたちのみどーりーの せすじをの
ほり そらのそらのは じーめてのひかりへ たび たって いく そのちからで
きょうのポプラは たかくおいしげり あすーの ーハマナスは
うつくしくさき ころよかおれとーころよかおれとーかぜはいう
イシカリのうみがハープなら ーはくがくのぎんを かなでよ
うーイシカリのかわがギターなら ーとくしのうおを つまびこう
ただいっほんの ちへいせんが さきへさきへと ひらいていくーせか
いむげんの ーむげんのむげん のむげんの わたしたち ー ー

昭和58年3月28日 制定	無限の わたしたち	ただ一本の地平線が 先へ先へとひらいていく世界	篤志の魚をつまびこう	イシカリの海がハープなら 博学の銀をかなでよう	イシカリの川がギターなら	風はいう	心よ かおれ・・・と	あすのハマナスは うつくしく咲き	きょうのポプラは たかくおいしげり	その力で	はじめての光へたびたっていく	空の	わたしたちの緑の背すじをのほり	イシカリの野が	北海道立石狩南高等学校校歌
	作曲 大坂 克之	作詞 原子 修													

石狩市立石狩小学校



制定 大正7年

全体を雪の結晶でかたどり純白で汚れない心を示し、その内側の六角形は日本海の荒波に負けない心と洋々たる希望を、「石」を囲んだ三角形は雪と石狩川と日本海に囲まれて本校の子どもたちが協力し合ってひた向きに勉強に励んでいる姿を表す。



【所在地】 石狩市横町39番地

石狩の地名はアイヌ語の「イシカラ・ベツ」（曲がりくねって流れる川）に由来する。その石狩川河口部に位置する本町地区は松前藩時代藩主の直領地としてアイヌとの交易や場所請負人による鮭漁業の重要拠点だった。安政2年に蝦夷地を幕府が直轄し石狩役所が置かれ安政5年、荒井金助により石狩改革が実施される。そのとき「教導館」が設置され学問や武術を詰め役人子弟に教育している。明治2年に北海道に開拓使が置かれ明治4年には能量寺の住職が寺子屋で教育を始めている。このように、本町地区は石狩における教育の先駆けの地であった。

【沿革】

明治6年6月	公立石狩教育所開設
明治12年6月	公立石狩小学校と改称
明治10年6月	若生分校設置（大正12年4月1日 分離独立）
明治28年	石狩尋常高等小学校と改称
明治30年	石狩水産補習学校併置
明治32年8月	高岡分校新設
明治36年	校舎新築（この校舎は昭和31年まで使用）
明治38年4月	石狩商業補習学校併置
明治41年9月	発泉分教所設置（大正12年4月1日 若生小学校発泉分教場と改称）
大正15年	石狩青年訓練所併置
昭和5年	石狩実業補修学校併置
昭和18年10月3日	校歌制定
昭和22年	石狩町立石狩小学校と改称
昭和31年7月	北海道で最初の円形校舎完成
令和2年3月9日	第129回卒業証書授与式 卒業生15名 [卒業生総数 4,880名]
令和2年3月31日	石狩小学校閉校 146年の歴史を閉じる 1～5年生児童数 39名 [閉校時児童数 54名] 八幡小学校と統合 「石狩八幡小学校」へ移行

石狩市立石狩小学校校歌

作詞：飯田廣太郎
作曲：工藤富次郎

$\text{♩} = 100$
mf

い し か りー の なー が ー れ ゆー

た か に そー そー き い る

mp

に っ ぽ ん か い の た か しー おー に

f *rit.*

き ぜん と た て る ま なー び や ぞ

石狩市立石狩小学校校歌

作詞 飯田 廣太郎
作曲 工藤 富次郎

一 石狩の

流れゆたかに
そそぎいる

日本海の

高潮に

毅然とたてる

学舎ぞ

二

はまなすの

薫ゆかしく

咲くところ

夕陽に映えて

ひるがえる

歴史は永し

わが校旗

昭和18年10月3日 制定

石狩市立八幡小学校



制定 平成元年4月1日

・全体の輪郭は、はまなすの花と石狩湾や海を表し、石狩市を表す。
・円の中心部は八幡小学校を、まわりの波形は教師と地域、父母との結びつきを表し、3本のペンは、知・徳・体を表す。
・3つの三角形は高岡・美登位・八幡地区の児童が力を合わせ、希望をもって前進していく意識を表す。



【所在地】 石狩市八幡4丁目167番地

石狩川右岸地区には幕末、若生に石狩役所が置かれ石狩改革の拠点であった。明治以降は本州からの移住者により開拓が進んだ地域である。八幡の名は幕末に八幡神社がこの地に建てられていたことに由来する。昭和50年代地域周辺にあった石狩東小・高岡小、美登位小の校舎が老朽化のため統合計画が出された。石狩町は新たな学校で教育の改善と環境の整備、そして右岸地区の発展を目的に、平成元年（1989）4月に石狩町立八幡小学校が開校した。平成時代の31年間、地域に根ざした特色ある教育を推進してきたが、児童数の減少に伴い令和2年3月、左岸の石狩小学校とともに閉校し同年4月より八幡小学校を使用して「石狩八幡小学校」が新たにスタートすることになった。

【沿革】

昭和53年3月	石狩川右岸地区3校統合を答申
昭和63年3月	教育委員会議で校名を「八幡小学校」に決定
平成元年3月	石狩東小学校、高岡小学校、美登位小学校閉校
平成元年4月1日	石狩市立八幡小学校開校（3校統合） 始業式（開校を祝う会） 6学級編制 児童数173名（男82 女91）
平成元年12月21日	校歌制定
平成3年12月	北海道体力づくり優良学校表彰受賞
平成5年5月	文部省奉仕等体験学習研究推進校に指定される（5、6年）
平成5年10月	優良こども郵便局として北海道郵政局長賞受賞（平成7年にも）
平成5年11月	開校5周年記念教育実践発表会及び石教振学校課題研究発表会を開催
平成9年11月	プール工事完了
平成12年4月1日	9学級編制 児童数244名（男130 女114）
平成15年4月1日	特殊学級開設2学級
令和2年3月19日	第31回卒業証書授与式 卒業生 9名 [卒業生総数 868名]
令和2年3月31日	閉校のため最後の修了式 1～5年生児童数 31名 [閉校時の児童数 40名] 石狩小学校と統合 「石狩八幡小学校」へ移行

石狩市立八幡小学校校歌

作詞：藤中 彰二
作曲：石塚 寿雄

mf

まぶしく ひか ー る さんか く や ね に

た の し く あ つ ま る か お と か お

mp

ま な ぶ よ ろ こ び ひ と み に あ ふ れ

f

み ん な と そ だ ー つ ち か ら あ ー わ せ あ

あ は ち ま ん た の し い ま な び や

石狩市立八幡小学校校歌	
作詞 藤中 彰二	
作曲 石塚 寿雄	
一	まぶしく光る 三角屋根に 楽しく集まる 顔と顔 学ぶ喜び 瞳にあふれ みんなと育つ 力を合わせ ああ 八幡 楽しい学び舎
二	はまなす薫る 校庭に 明るく響く 元気な声 郷土の願い 胸に抱き みんなと育つ 心優しく ああ 八幡 明るい学び舎
三	豊かに流れる 石狩川に 長くのびるよ 河口橋 大きな夢を 未来にかけて みんなと育つ たくましく ああ 八幡 輝く学び舎
平成元年 12 月 21 日 制定	

石狩市立若葉小学校



制定 昭和52年2月19日

・三つの外郭基盤と中心の円は、学校教育を通じ知・徳・体の調和を表す。
・中間に若葉を配し、石狩の大地で根強く育つ若々しさとたくましく成長することを願う。
・六頂を有することは、六カ年の小学校生活と未来にはばたくことを希望している。
・中央のの字を配したことは、すなおさと小学校を位置づけたものである。



【所在地】 石狩市花川北4条3丁目1

この地域は明治4年に花畔村として誕生し畑作・酪農・水田と開墾の歴史のある純農村地帯だった。

昭和48年から札幌近郊の花畔団地と称し北海道住宅供給公社が分譲しはじめ、急激に人口が増加したのに伴い昭和52年に創設された。その後も人口の増加が続き、転校生が一日10人～20人位ずつもあり児童数が800人を越えることもあった。それにより昭和54年1月紅葉山公園横に紅葉山小学校が創設され多くの児童が移籍した。その後も児童の増加は続いていたが、平成6年以降減少が進み、遂に平成22年3月31日、同じく児童数の減少にあった紅葉山小学校との統合のため閉校することになり33年の歴史を閉じた。同年4月からは旧若葉小学校の校舎を使用し新たに「双葉小学校」として歴史を刻むことになった。

【沿革】

- 昭和52年4月1日 石狩町立若葉小学校創立
- 昭和52年4月12日 第1回入学式・始業式挙行 学級数 12 児童数 399名
- 昭和52年11月6日 校歌制定
- 昭和53年4月1日 特殊学級の開設認可
- 昭和54年1月1日 紅葉山小学校分離開校により、児童538名移籍
児童数594名、16学級編制となる
- 昭和60年3月20日 紅南小学校へ「おおぞら学級」分離式、児童6名移籍
- 昭和61年11月11日 石教研、石教振、学校課題研究発表会実施
- 昭和61年12月7日 開校10周年記念式典挙行
- 昭和62年3月24日 通学区変更、花川小へ12名、紅南小へ113名、紅葉山小から46名移籍
- 平成15年5月6日 羊2頭を購入、飼育体験（5～12月）を開始
- 平成17年4月1日 「食育推進モデル校」「学校版ISOモデル校」
- 平成17年11月13日 6年生「30人31脚全国大会」優勝
- 平成22年3月24日 第33回卒業証書授与式 卒業生 38名 [卒業生総数 2,964名]
- 平成22年3月31日 閉校 [閉校時児童数 187名]
紅葉山小学校と統合 「双葉小学校」へ移行

石狩市立若葉小学校校歌

作詞：新井田 清志
作曲：津野 ツヤ

♩ = 100
mf

かいたくのれきしもふるくいき
いきとひらけゆくまちふう
せつのきびしいところたくましくつよ
くいきょうわかばのこども

石狩市立若葉小学校校歌

作詞 新井田 清志
作曲 津野 ツヤ

一 開拓の歴史も古く
いきいきと ひらけゆく町
風雪の きびしいところ
たくましく 強く生きよう
若葉の子ども

二 あげぼのの 光に映えて
美しく 広き学びや
あたらしき 未来求めて
ひたすらに 深く学ぼう
若葉の子ども

三 静かなる つぶらなひとみ
大いなる 希望を語る
子らはみな 心豊かに
のびやかに とともに育とう
若葉の子ども

昭和52年11月6日 制定

石狩市立紅葉山小学校



制定 昭和54年2月1日

・外側の六稜は、紅葉の葉と雪の結晶を表し、6年間の望ましい人間関係を表現する。
・中央の六角のうち、上の三稜は知・徳・体を表現し、下の三稜は調和・友情・忍耐を表現する。



【所在地】 石狩市花川北3条3丁目1番地

校下地域は昭和48～54年にかけて、北海道住宅供給公社により宅地造成された。同地区に先に開校されていた若葉小学校の児童数激増を緩和するため昭和54年に「紅葉山小学校」が開校された。紅葉山小学校は独立後も児童数が増え続けたため、昭和60年紅南小学校を分離独立した。その後は徐々に児童数の減少が進み、同じく児童数の減少にあった若葉小学校との統合のため平成22年3月31日をもって閉校し30年の歴史を閉じた。

【沿革】

昭和54年1月	石狩町立紅葉山小学校開校（若葉小より分離）1～5年 15学級 児童数574名
昭和54年4月	第1回入学式・始業式 15学級（内言語学級1）児童数799名
昭和54年6月	言語治療学級開級式
昭和55年2月	校歌制定
昭和57年4月	児童数急増により、プレハブ校舎のほかに図書室、音楽室、視聴覚室、児童会室を普通教室に転用
昭和59年4月	児童数1,490名 38学級（内言語学級3学級）
昭和60年1月	紅葉山小学校の児童数緩和のため、石狩町立紅南小学校を分離 児童数510名 職員13名を移籍
昭和62年4月	石狩町通学区の変更に伴い花川北1条3・4丁目の児童が紅南小から紅葉山小へ花川北3条2丁目の一部児童が紅葉山小から若葉小学校へ移籍
平成7年12月	プール建設工事完了
平成11年2月	開校20周年記念式実施
平成11年10月	『紅葉山子育て21!』（紅葉山子育て連絡協議会）を結成
平成22年3月30日	第30回卒業証書授与式 卒業生39名 [卒業生総数 3,340名]
平成22年3月24日	閉校のため最後の修了式 1～5年生児童数 148名 [閉校時児童数 187名] 若葉小学校と統合 「双葉小学校」へ移行

石狩市立紅葉山小学校校歌

作詞：横山 正
作曲：石山美治

自由に ♩ = 100

mp

ていねの やま な み く も がー とー び

V

いしかり がー わ の み ず きー よー く

mf

みんなのちからで たがやして おおきくひらける もみじやま

rit.

f a tempo

かー ぜ や ゆ き に も ま けー な いー で げん

V

き に つ よー く そ だー ち ま す

石狩市立紅葉山小学校校歌

作詞 横山 正
作曲 石山 美治

一 手稲の山なみ 雲がとび

石狩川の 水清く
みんなの力で たがやして
大きくひらける 紅葉山
風や雪にも 負けないで
元気に強く 育ちます

二 ハマナスかおる 学びやに

縁の木々も 笑ってる
きれいな心を よせ合って
ふれ合いぬくもる 紅葉山
一人ひとりが 手をつなぎ
明るくかしこく 育ちます

三 光り輝く 窓辺には

小さな花も 生きている
希望に胸を ふくらませ
未来に生きる 紅葉山
世界の子どもと 輪をつくり
いたわりはげまし 育ちます

昭和55年2月 制定

石狩町立石狩東小学校



制定 昭和42年10月

・ハマナスの葉と花で郷土石狩町を表現。
・葉と実の数は、教育基本法の外一条の教育の目的を表現している。則ち3枚の葉は「真理」と「正義」を愛し「個人の価値を尊び」を表現。
3個の実は「勤労と責任を重んじ」「樹種的精神に充ちた」「心身共に健康」な子を表現。
・中央の「東」をとりまく輪は、地域「教師・父母・子供」のかたい結びつきによって東小学校の名を高めようという意義をもっている。



【所在地】 石狩町大字生振村7線北459番地

石狩川右岸に位置し歴史は古く開拓使の石狩役所が置かれ、八幡神社が創設されていた所である。

この地には明治19年6月に石狩小学校若生分校が開校されて以来昭和26年までの65年間、地域の教育文化の中心としての役割を担ってきたが、校舎の老朽化の問題と発泉小学校との統合も合わせて八幡町、若生町、来札、北生振の間に新校舎建築が決まった。校名は石狩川の東に当る事から「石狩東小学校」として昭和27年に開校した。昭和51年に石狩河口橋が完全開通、昭和53年には石狩川右岸の築堤工事も進められ、若生町、八幡町の中心分は国道沿いへの移転が始まり、校下の様子に変化した。開校から36年、特色ある教育を進めてきたが、高岡小学校、美登位小学校との統合がきまり、昭和63年に八幡4丁目の地に町名を生かした「八幡小学校」に統合された。

【沿革】

- 昭和27年1月1日 若生小学校、発泉小学校を閉校し石狩東小学校として開校する
児童数205名、教員数7名、6学級
校舎は木造平屋建 間口31.5間、奥行5.0間、便所合わせて182.5坪
東側に教員住宅1棟2戸建設（若生小学校の解体材を利用）
- 昭和28年6月 校庭を整地しグラウンドの形にする
- 昭和29年5月 暴風雨のため校舎屋根20坪破損
- 昭和36年9月23日 校歌制定
- 昭和37年11月 開校10周年記念式典 P T Aからピアノ寄贈
- 昭和45年1月 スケートリンク完成 スケート授業始まる 閉校まで続く
- 昭和47年5月 スキー指導用のスロープを造成する
- 昭和51年 裏庭に相撲愛好会などから土俵が寄贈され、校内すもう大会が始まる
- 昭和55年1月 P T A教育実践奨励賞を受賞
- 昭和57年5月 第33回優良子ども郵便局郵政大臣賞受賞
- 昭和59年6月 開校20周年記念石碑を校舎前面に移設
- 昭和60年4月 6学級編制 児童数79名（最低数）
- 昭和61年12月 トーメン団地宅地造成により児童数110名となる
- 平成元年3月31日 石狩東小学校閉校 [閉校時児童数 109名] [卒業生総数 1,030余名]
高岡小学校、美登位小学校と統合 「八幡小学校」へ移行

石狩町立石狩東小学校校歌

作詞：西 忠義
作曲：田中 邦夫

あたらしい 光をうけて いしかりー
 の かがやくながれ さわやかに ひろ
 がる みどり そのめぐみ ここ
 にあふれて みんなあかるく みんなでまなぶ
 いしかり ひがし しょうがっこう

石狩町立石狩東小学校校歌

作詞 西 忠義
作曲 田中 郁夫

一 新しい 光をうけて
石狩の輝く流れ

さわやかにひろがるみどり
そのめぐみ ここにあふれて
みんな明るく みんなで学ぶ
石狩東小学校

二 打ちよせる 荒波超えて
舟をこぎ くわふりあげた
たくましい心と体
その力 ここにうけつぎ
みんな元気 みんなで励む
石狩東小学校

三 限らない 流れとともに
よろこびの うたごえ進み
花ひらく ゆたかな未来
このぞみ 高くかかげて
みんなでなかよく みんなで進む
石狩東小学校

昭和36年9月23日 制定

石狩町立高岡小中学校



制定 昭和26年4月18日

北国に自生する柏の葉で阿蘇岩山をかたどり、高く、けわしく、力強くを表現する。

三本のペンは「我が友よ道を究めん」と目標を示す。

中心に「高小」の文字を配する。



【所在地】 石狩町大字八幡町字高岡28番地5

高岡は明治18年(1885)に山口県からの移住者によって拓かれた。当時は原始林やクマザサが生い茂り開拓に困難をきわめた。しかし、土地は肥沃で知津狩川の水を利用し石狩で初めての水稻栽培も行われていた。開拓者たちは子弟の教育には関心があり、掘っ立て小屋を建てて寺子屋を開いて光明寺創立前の高岡説教所の開教師高松知聚氏や萩原戒念氏が教えていたと伝えられている。明治32年になり待望の教育所、石狩尋常高等小学校高岡分教所が設置された。又高岡中学校は昭和22年に併置された。しかし、児童生徒の減少により、高岡中学校は昭和55年に閉校し30年の歴史を閉じ、その8年後、高岡小学校は平成元年に閉校し88年の歴史を閉じた。

【沿革】

- | | |
|------------|---|
| 明治32年8月20日 | 石狩尋常高等小学校高岡分教場として創立(4年制) 児童男13名 女4名
通学区域 大字八幡町大曲・高岡・地藏沢・五の沢・九の沢(明治42年まで) |
| 明治34年4月23日 | 高岡尋常小学校と改称 独立 |
| 明治40年4月1日 | 尋常科修業年限6ケ年に延長 |
| 明治43年1月20日 | 五の沢教育所落成(48名) 2部授業廃止
高岡尋常小学校の通学区域を高岡・地藏沢とする |
| 大正3年3月31日 | 五の沢教育所独立 |
| 大正5年4月1日 | 補習科設置認可 |
| 昭和16年4月1日 | 高岡国民学校と改称 翌年、高等科併置 |
| 昭和22年4月1日 | 石狩町立高岡小学校と改称 |
| 昭和22年5月1日 | 高岡中学校を併置 |
| 昭和26年3月21日 | 校歌制定 |
| 昭和29年5月29日 | 高岡小学校校舎改築、中学校校舎落成(同8月2日) |
| 昭和55年3月20日 | 高岡小学校開校80周年 高岡中学校開校30周年
高岡中学校閉校記念式典挙行 |
| 昭和55年3月31日 | 中学校閉校 石狩中学校へ統合 [閉校時生徒数 36名] |
| 平成元年3月31日 | 小学校閉校 [閉校時児童数 33名]
[卒業生総数 1,266名]
石狩東小学校、美登位小学校と統合 「八幡小学校」へ移行 |

石狩町立高岡小中学校校歌

作詞：千葉 宏平
作曲：三浦 述而



あ そ い わ は あ さ ひ は み ち て お
ね は る か は ゆ る ま な び や あ
ら た ま を み が く よ ろ こ び あ
た ら し き ふ み ひ も と き て い
ざ と も よ み ち を き わ め ん

石狩町立高岡小中学校校歌

作詞 千葉 宏平
作曲 三浦 述而

一 阿蘇岩は 旭はみちて

尾根はるか 映ゆる学び舎
あらたまを磨く歓び

新しき 書よみひもときて
いざ 友よ 道を究めん

二 石狩の流れゆたけく

しおぎいの なごむ学び舎
清らなる 校旗あおぎて

新しき 誓いもたしか
いざ 友よ 強く育たん

三 日本海 高潮鳴りて

木霊する おかの学び舎
故郷の 生ける歴史に

新しき 息吹をかけて
いざ 友よ 勉め励まん

昭和26年3月21日制定

石狩町立美登位小学校



制定 昭和32年7月1日

(制定の趣旨は不明)
全体の六角形は雪の結晶を表している。
六角形の上半分に「北海道」下半分に
「石狩町」の文字がデザインされている。
中央には「美小」と記し、それを包む
ように稲穂で囲みりボンでまとめている
と思われる。



【所在地】 石狩町大字生振村11線北9番地

美登位の地名はアイヌ語の「ピトイ」（小石多い処）に由来する。ピツは小石、この地は石狩川が大きく蛇行する右岸、紅葉山砂丘の東端に位置し、まわり一帯は低地が広がる。石狩川の蛇行部では幕末に鮭漁場が置かれていた所でもある。美登位は明治以降、開拓が行われてきた純農村地帯であるが、泥炭地が広がり開墾が困難な所であった。この地は大正7年～昭和6年の生振捷水路の大工事のため生振村は分断され校下は右岸地区になった。そのため生活圏は八幡町方面に移行した。学校は明治33年生振尋常小学校美登位分教場として開校したのが始まりである。特色ある僻地教育の推進を進めてきたが平成元年、89年の歴史を閉じ、石狩東小学校、高岡小学校とともに八幡小学校へ統合となった。

【沿革】

- 明治33年6月18日 石狩郡生振尋常小学校美登位分教場として開校
- 明治35年3月25日 美登位尋常小学校として認可される
- 明治36年2月19日 補修科の加設が認可される
- 明治36年4月1日 補習科実施
- 明治37年2月9日 裁縫科の加設が認可される
- 明治39年4月 児童数33名
- 明治41年9月14日 石狩郡生振尋常小学校美登位分教場と改称
- 明治42年12月25日 公立生振尋常高等小学校美登位分教場と改称する
- 昭和8年4月1日 美登位尋常小学校として独立する
- 昭和16年4月1日 美登位国民学校と改称する
- 昭和22年4月1日 石狩町立美登位小学校と改称する
- 昭和26年1月16日 青年学級・社会学級が併置される
- 昭和38年12月11日 新校舎落成祝賀会
- 昭和41年1月1日 校歌制定
- 昭和55年8月18日 開校80周年記念碑「郷友」の建立
- 平成元年3月31日 美登位小学校閉校 [閉校時児童数 12名] [卒業生総数 不明]
石狩東小学校、高岡小学校と統合 「八幡小学校」へ移行



「郷友」の碑

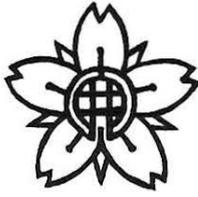
石狩町立美登位小学校校歌

作詞：塚本春夫
作曲：松尾 強
編曲：石山美治

いし - か り が わ - の か わ - す そ -
に こがねの ほ な - み ゆた - か な -
る し き - の す が たを うつ - し え -
て れ き - し も ふ る - き
1, 2. 3.
びと - い こ - う きず - か な ん

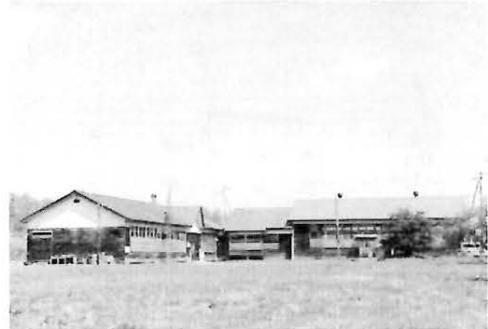
<p>昭和41年1月1日制定</p>	<p>三 嵐はげしく すさぶとも あすの希望を 胸に秘め 学びの庭に 羽ばたきて 久遠の文化 きずかなん</p>	<p>二 アカネに映ゆる 砂山に 理想の世界 えがきつつ けだかく建てる 学び舎は これぞわれらが 美登位校</p>	<p>一 石狩川の 川すそに 黄金の穂波 豊かなる 四季の姿を 写しえて 歴史も古き 美登位校</p>	<p>石狩町立美登位小学校校歌</p> <p>作詞 塚本 春夫 作曲 松尾 強 編曲 石山 美治</p>
--------------------	--	--	---	--

石狩町立五の沢小学校



制定 昭和50年

北海道を象徴する北極星をバックに配し、地域に多い桜を・・・将来、五の沢をサクラの名称にしたい。
・星の五角、桜の五弁、オシベなどで五を強調し、のを◎で表わし、サワを組み合わせで表現、石油で栄えた五の沢の油田の記号と併せて田、畑を意味づけ、中央に向かってセリ上がる上昇発展を願った図案である。



【所在地】 石狩市八幡町高岡五ノ沢290番地17

五の沢の地名は知津狩川沿いにある沢の一つの名である。この地名は当初「五ノ沢」と表していた。この地の開拓は明治28年に始まったとされている。五の沢、八の沢の油田は幕末に石狩役所の役人によって発見されていたが、試掘は明治36年インターナショナル（後の日本石油）がこの地に第1号の井戸を開掘されたのが最初である。学校は部落民の寄付と出役によって建てられた。校舎の材料は来札にあった樺太アイヌ子弟のために建てられていた「来札尋常小学校」の校舎を移築し、明治43年1月11日に開校された。児童は農家や油田関係者子弟であった。学校は常に地域の教育、文化の中心となっていたが、油田の衰退とともに人口減は続き、昭和57年閉校し石狩町立高岡小学校へ統合された。

【沿革】

明治43年1月11日 農家・石油会社子弟のため、五の沢教育所開設（児童48名）
来札にあった「廳立来札尋常小学校」の古校舎を移築した。

大正3年 五の沢尋常小学校と改称

昭和2年1月17日 八の沢特別教授場を開設

昭和16年4月 五の沢国民学校と改称

昭和17年4月 高等科設置

昭和22年4月1日 石狩町立五の沢小学校と改称

昭和23年9月1日 八の沢分校が独立する

昭和33年12月13日 校舎総改築落成

昭和37年4月1日 寄宿舍落成

八の沢小学校が五の沢小学校に統合される。

昭和39年4月1日 3学級となる

昭和41年3月16日 部落総出でオンコの木を校庭に移植

昭和45年 校歌制定

昭和50年3月 これまでの【卒業生総数 622名】

昭和50年9月7日 開校65周年記念式典挙行 児童数 6名

昭和57年3月31日 五の沢小学校閉校 【閉校時児童数 4名】

高岡小学校へ統合



オンコの木と記念碑

石狩町立五の沢小学校校歌

作詞・作曲：福島音次郎

♩=108

にわの みどりの しばふは マット とんだり はねたり
 おどったり とんぼ かえれば あおぞら まわる
 まわる あおぞら おおきく すって きょうも いち
 に - ち じょうぶ に そ だ つ -
 ごのさわ ごのさわ ぼくとわたし
 の ふ - る - さ と - よ -

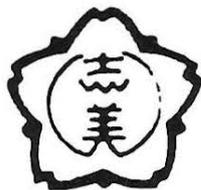
石狩町立五の沢小学校校歌

作詞・作曲 福島音次郎

- 一 校庭のみどりの芝生は マット
とんだり はねたり おどったり
とんぼかえれば 青空まわる
まわる青空 大きく吸って
きょうも 一日 じょうぶに育つ
五の沢 五の沢 ぼくと私のふるさとよ
- 二 田んぼ田の面は そよ風小風
大石狩の 夢の風
大きくなれと ささやき渡る
わたるささやき しっかり胸に
きょうも 一日 かしこく育つ
五の沢 五の沢 ぼくと私のふるさとよ
- 三 おかの堤の 清らな水よ
仲よしこよし 来てみれば
夕焼け空に とんびが歌う
歌うとんびに 力がわいて
きょうも 一日 希望に育つ
五の沢 五の沢 ぼくと私のふるさとよ

昭和45年 制定

石狩町立志美小学校



制定 昭和44年12月20日

(制定の趣旨不明)
(開校 70 周年記念として制定された)
全体は桜の花が図案化され中央に志美の文字が記され、美の文字の下部分を長くのばし志美の文字を丸く包んでいると思われる。



【所在地】 石狩町大字花畔村 3 線 4 番地

志美の地名はアイヌ語の「シビシビウシ」(トクサの多い処)に由来する。美しい志という漢字が当てはめられている。現在、石狩消防署石狩湾新港支所の敷地、南の一角に志美小学校記念碑がある。実際の学校はここから200m程花畔寄りの所にあった。記念碑には「大きなあかだもを 子どもらが見上げている志美小学校は ここにあった」(あかだもゆかり会 碑文 斉藤全) <第6代校長>と記される。

勉学、体育、音楽、弁論と…志の高い情熱溢れる教師の存在も際立っていた。地域の青年への指導も今も語り継がれている。明治32年より昭和53年まで、80年の歴史に終止符を打つ。

【沿革】

明治32年12月20日 花畔尋常小学校志美分校として創立 (3年生以上は本校へ通学)

明治33年 4月12日 志美分校認可 通学区域 6線以北

明治34年 5月26日 志美分校が分教場と改称

明治35年 4月1日 志美尋常小学校と改称

明治45年 9月14日 花川尋常高等小学校志美分教場と改称

昭和 4年 4月 6日 石狩郡公立志美尋常小学校と改称

昭和 8年 4月 1日 石狩町志美青年訓練所併置

昭和10年 8月 1日 青年訓練所を青年学校と改称

昭和16年 4月 1日 志美国民学校と改称

昭和18年 4月 1日 志美青年学校を花川青年学校に併合

昭和23年 4月 1日 石狩町立志美小学校と改称
通学区域 花畔村北 2線より北 6線まで

昭和44年10月23日 校歌制定

昭和53年 3月21日 志美小学校閉校 [閉校時児童数 27名]
[卒業生総数 655名] 明治38年～大正13年までの修了生 6名を含む、尚大正13年分は不明
在校生22名は花川小学校と石狩小学校へ分散移籍する

平成 7年 8月16日 「志美小学校記念の碑」 建立 (新港東65番地50)

平成26年 石狩市消防署石狩湾新港支所敷地内に移設



学校のシンボル「アカダモの木」



石狩町立志美小学校校歌

作詞：西 忠義
作曲：石山 美治

い し - か り - の みどりあ ふ - れ - る ひ -
ろ - い の を おおしく つ - よ い か
い た く の ち か ら う け つ ぎ す
す - も う よ み ん な げ ん き な
み ん な げ ん - き な し び し ょ う が っ こ う

石狩町立志美小学校校歌

作詞 西 忠義
作曲 石山 美治

一 石狩の 緑あふれる 広い野を

雄々しくつよい 開拓の

力受けつぎ 進もうよ

みんなげんきな みんなげんきな

志美小学校

二 石狩の 海べにかおる はまなすの

花を手に手に 友情の

大きな花輪を つくろうよ

みんななかよし みんななかよし

志美小学校

三 石狩の 流れ輝く 学び舎に

みなぎる光 胸はって

高いのぞみを 歌おうよ

みんな明るい みんな明るい

志美小学校

昭和44年10月23日 制定

石狩町立樽川小中学校

樽川小学校



樽川中学校



制定 昭和27年

(制定の趣旨不明)

小中どちらも星をかたどり星の下部を円形で囲んでいる。星形の上と下二つには樽川の「T」の字が記されている。中心にある波状の円の中に小学校は「樽」の文字、中学校は「中」の文字を記していると思われる。



【所在地】 石狩町大字樽川村211番地の2-3 (現在 小樽市銭函5丁目内)

樽川の地名はアイヌ語の「オタルナイ」(砂浜を流れる川)に由来する。明治15年、河口部に樽川村が誕生し同18年に山口県からの入植者により開拓が始まる。本格的に公立の簡易教育所が出来たのは明治31年になる。漁業と農業が中心の村が大きく変化したのは昭和45年7月「第三期北海道総合開発計画」が閣議決定された。石狩湾新港建設にむけてはいろいろ議論があったが、昭和45年、港湾管理方式が北海道、小樽市、石狩市の3者管理の合意がなされ港湾法の関係から石狩町大字樽川村の一部を小樽市域の中に編入する必要が生じた。昭和45年樽川地主会の同意も得て昭和50年4月15日、正式に境界変更がされた。これに基づき地域の移転が決まり、それに伴い樽川小中学校の閉校が決まった。

【沿革】

明治31年12月	簡易教育所設置 (樽川西3線)
明治32年10月	西6線25号に村内寄付金により校舎を新築する。27.5坪
明治34年3月	樽川尋常小学校と改称
明治37年8月	西6線31号に和佐乙三郎氏の校地寄付により校舎新築。33.5坪
明治41年9月	石狩町花川小樽川分教場と改称 (前年樽川村と花畔村の合併で花川村誕生)
明治45年6月	石狩町樽川尋常中学校と改称 (石狩町と花川村の合併で石狩町と改称)
昭和16年4月1日	石狩郡樽川国民学校と改称 (2学級編制)
昭和22年4月1日	石狩町立樽川小学校と改称
昭和23年1月	石狩町立花川中学校樽川教場を併置し中学校の授業を開始する
昭和29年4月	石狩町立樽川中学校と改称 (小学校に併置) 学級数2 生徒数55名
昭和32年12月	樽川小学校開校60周年記念式典挙行 校歌制定
昭和34年4月	樽川中学校3学級編制認可 小学校3学級編制認可
昭和47年9月	開校85周年記念式典挙行
昭和48年3月14日	樽川小中学校閉校式 [閉校時児童数 47名] [卒業生総数 小学校 761名 中学校 299名]

石狩町立樽川小中学校校歌

作詞：職員 一同
作曲：坂口 和夫

み どり の ち へ - い に さ な え は な - び - く ま
 な び の - ま - ど の ひ は う ら ら か に ぶ ん
 か の り そ う を む - ね - に - ひ -
 め あ か る く つ よ き ち か い も か た - く わ れ
 ら は ま な ぶ た - る か わ こ う

石狩町立樽川小中学校校歌

作詞 職員一同
作曲 坂口和夫

一 緑の地平に 早苗はなびく

学びの窓の 陽はうららかに
文化の理想を 胸にひめ
明るく強き ちかいかたたく
われらは学ぶ 樽川校

二 石狩湾の 塩風うけて

学びの庭に はまなすかおる
平和な世界を きずくため
手に手をとって 結びもかたく
われらは励む 樽川校

三 はるかな峰に 白雲たなびき

学びの道に いそしむわれら
自由の息吹 あらたなる
希望にもゆる 歩みもかたく
われらは築く 樽川校

昭和32年12月 制定

石狩町立発泉小学校

校章不明



学校は生北神社の隣にあった



昭和15年頃の発泉小学校

【所在地】 石狩町大字生振村 8 線北47番地

校下北生振は明治18年4月山口県より20戸（19戸）の自由移民が入植したのが始まりである。

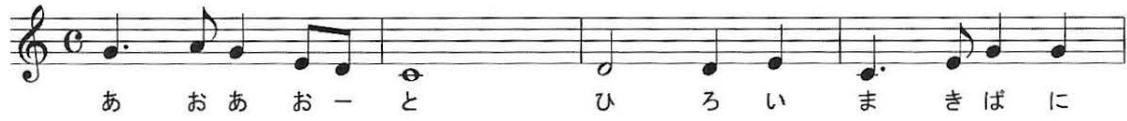
石狩川河岸は地味肥沃であったものの、河岸を離れると泥炭地や砂土であった。入植してまもなく石狩川の洪水で土地が削られることがあり、6月には6戸を残して高岡に再移住した。6戸は農業のほか漁業を兼ねる者もいて開拓を進めた。この地の学校は明治35年に生振尋常小学校発泉分教場として開校したのが始まりである。校名の発泉は生振村8線道路と北8号線の交差するところに位置していたことに由来するという。大正7年～昭和6年の生振捷水路の大工事のため生振村は分断され、校下は右岸地区になった。この地は入植以来水害、冷害、泥炭地、砂土との闘いの歴史を克服してきている。

【沿革】

- | | |
|-------------|---|
| 明治35年 | 蓮田仁太郎氏が土地450坪を寄贈
校舎新築32坪、建築費451円20銭 |
| 明治35年2月 | 生振尋常小学校発泉分教場として創立（八線北47番地） |
| 明治35年3月25日 | 発泉尋常小学校として4学年まで認可 |
| 明治35年4月1日 | 発泉尋常小学校として開校 児童数52名 |
| 明治37年4月1日 | 裁縫科加設 翌38年4月1日 補習科加設 |
| 明治41年9月20日 | 石狩尋常高等小学校付属発泉分教場となる |
| 大正6年4月1日 | 尋常科5、6年加入 |
| 大正12年4月1日 | 若生尋常小学校発泉分教場となる |
| 昭和16年4月1日 | 発泉国民学校と改称する |
| 昭和17年7月 | 熊倉正男氏が校旗を贈る |
| 昭和22年4月1日 | 石狩町立発泉小学校と改称する |
| 昭和23年11月 | 泥炭小屋建設 |
| 昭和24年 | 校歌制定 |
| 昭和26年3月 | 児童数 37名 1学級 |
| 昭和26年12月31日 | 発泉小学校閉校 [閉校時児童数 25名] [卒業生総数 270名]
若生小学校とともに新設「石狩東小学校」へ移行 |

石狩町立発泉小学校校歌

作詞・作曲：齋藤 全



石狩町立発泉小学校校歌

作詞・作曲 齋藤 全

一 青々と 広い牧場に 牛の群れ

赤いサイロよ 白雲よ

美しい村 その真ん中に 発泉校

二 その昔 アイヌが住んだ オヤフロは

さびしい野原 草のかけ

はげしい吹雪 汗で開いた 父や母

三 揚水場 石狩川に 影ゆらぎ

黄金色ます 田んぼ道

「僕も来たよ」 遠くで海が なっている

四 陽やけ顔 みんなにこにこ 仲よしが

世界の友と 手をつなぐ

わたしの学校 みんなの学校 発泉校

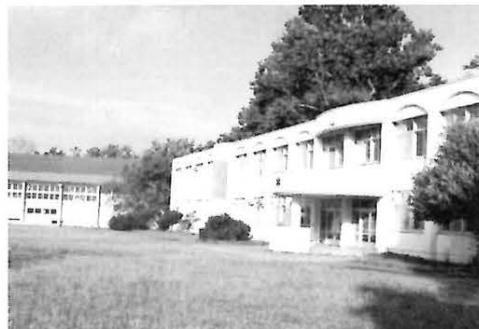
昭和24年 制定

石狩市立厚田小学校



制定 昭和42年7月

・六角の結晶は雪を型どり北海道を示し、六方に輝く光芒は児童の未来に強く明るく伸びる姿を表わす。
・中央の正六角形は手を固くつないだ団結の意を持ち、「厚」の文字と光芒の組み合わせの「小」で厚田小学校を示している。



【所在地】 石狩市厚田区厚田109番地

厚田の地名はアイヌ語の「アツタ」（あつしの皮を剥ぐ）に由来する。松前藩時代、厚田には運上屋がおかれニシン・鮭の漁場として重要な場所だった。明治時代もニシン漁で栄え、北前船もやってきて大いに賑わっていた。その厚田の教育は、開拓使が設置されたころは寺子屋式の教育所が置かれていたが、明治10年（1877）になって厚田教育所が開設された。その後、多くの人材を育成して来たが、地域の人口減と児童の減少に伴い開校以来143年の歴史を閉じ、令和2年4月からは同じように閉校する厚田中学校と統合して新たな小中一貫した教育を取り入れた「石狩市立厚田学園」として歩み始めた。

【沿革】

明治10年3月	厚田教育所開設 古潭教育所を合併
明治13年12月	厚田教育所は古潭教育所を分教場とする
明治14年3月	厚田小学校と改称
明治18年8月	安瀬分教場を設置（明治25年7月 独立）
明治27年5月	厚田尋常小学校と改称（翌年 厚田尋常高等小学校と改称）
明治41年9月	発足分教場設置
明治43年11月	厚田小学校校舎落成（佐藤松太郎建設に尽力 1万円寄付）
昭和12年3月10日	校歌制定
昭和16年4月1日	厚田国民学校と改称
昭和18年3月	発足分教場分離独立
昭和22年4月1日	厚田村立厚田小学校と改称、高等科廃止（厚田中学校創立・併置）
昭和26年12月	厚田中学校新校舎へ移転394名
昭和40年8月	厚田小学校完全給食実施
昭和60年2月	新校舎落成記念式典挙行
昭和62年9月	開校110周年記念式典挙行（子ども像、記念植樹、記念賛歌制定）
平成15年4月1日	発足小学校を統合（発足小学校児童5名を受け入れ）
令和2年3月31日	厚田小学校閉校 [閉校時児童数 35名] [卒業生総数 4,394名] 厚田中学校 聚富小中学校とともに義務教育学校「厚田学園」へ移行

石狩市立厚田小学校校歌

作曲：飯田廣太郎
作曲：工藤富次郎

♩ = 100

み よ し の や ま の い た だ き に
 ゆ た か に み の る い し - か り の
 の び ゆ - く - す が た た た え て - は
 か が や く の ぞ み お も - う べ し う -
 ま - し わ が さ - と こ - こ に あ - り

石狩市立厚田小学校校歌

作詞 飯田 廣太郎
作曲 工藤 富次郎

一 三吉の山の頂に

豊にみゆる 石狩の
 伸びゆく 姿 たたえては
 輝くのぞみ 思うべし
 美し我が里 ここにあり

二

厚田の川の流れ入る
 はるけき潮路 日本海
 寄せ来る波を 望みては
 ふだんの努力 思うべし
 楽し学び舎 ここに建つ

昭和12年3月10日 制定

石狩市立聚富小中学校



制定 昭和27年5月

《雪・校名の頭文字S・稲束の組合せ》
・雪の結晶は厳しい風土を象徴する。
・稲束は地域の産業の発展と繁栄を期待している。
・頭文字のSはこの地に生きる児童生徒の成長を表している。
・稲の葉はペン先、すなわち勉学を意味する。



【所在地】 石狩市厚田区聚富256番地 8

聚富の地名はアイヌ語の「シュオプ」（箱の形をしたもの）に由来する。明治4年仙台藩岩出山の伊達邦直以下150名が聚富に仮居したのが開拓の始まりとされる。実際に開拓が行われたのは、明治28年、団体地区へ淡路衆、堀頭地区へ加賀衆が入ったのが始まりである。

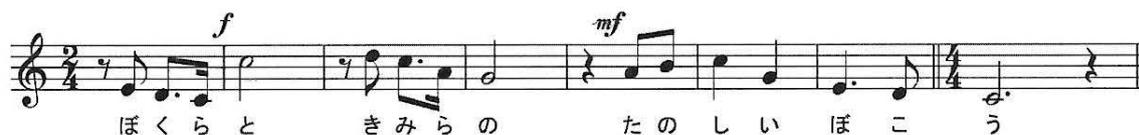
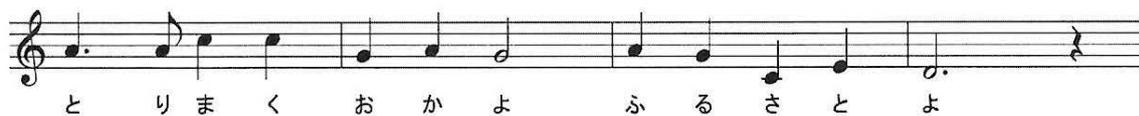
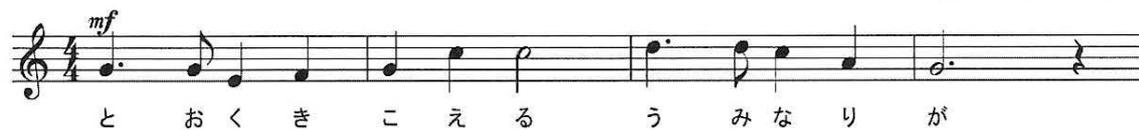
石狩川河口の北側、砂質低地と粘土性台地に開けた純農村地帯で、畑作、酪農が混在している高台地で一番高い所は海拔70mもあり、谷間の起伏が激しく、その上重粘土地で、農耕地としては不向きな所が多いが客土等で土地改良に努めてきた。昭和62年虹が原地区に団地が造成され児童数の増加があったがその後、減少が続き令和2年新生「厚田学園」に吸収されるかたちで閉校となった。僻地小中一貫教育の推進校でもあり、特色ある研究会が開かれた。又剣道スポーツ少年団の育成でも有名であった。

【沿革】

明治32年10月11日 聚富小学校設置認可（望来小学校聚富分校）
明治34年5月 聚富尋常小学校と改称し独立
大正7年12月 校舎落成
昭和22年5月 望来中学校聚富分校として単級編制
昭和27年5月 厚田村立聚富中学校として独立
昭和27年11月 校歌制定
昭和38年4月 小学校4学級 中学校3学級編制認可
昭和38年5月 開校60周年記念式典並びに祝賀会挙行
昭和39年4月 小学校6学級編制
昭和47年5月 聚富剣道スポーツ少年団結成
昭和22年12月 小学校80周年・中学校30周年、校舎落成記念式典並びに祝賀会
平成元年11月 新築校舎完成
平成10年10月 全道僻地複式併置校研究大会石狩大会
平成17年10月 厚田村、浜益村が石狩市と合併し石狩市立聚富小中学校と改称
令和2年3月31日 聚富小中学校閉校 [閉校時児童生徒数 小学校11名 中学校13名]
[卒業生総数 小学校1,542名 中学校904名]
厚田小学校 厚田中学校とともに義務教育学校「厚田学園」へ移行

石狩市立聚富小中学校校歌

作詞：坪松 一郎
作曲：千葉日出城
編曲：佐々木昭典



石狩市立聚富小中学校校歌

作詞 坪松 一郎
作曲 千葉日出城
編曲 佐々木昭典

一 遠く聞こえる 海鳴りが
とりまく丘よ 故郷よ
雲は 光って 風を呼ぶ
流れの丘の この学舎は
僕等と 君等の
楽しい母校

二 聚富の丘に スロープに
線の海の 風が吹き
遠い昔を しのぶよに
光輝く この学舎は
あなたと わたしの
楽しい母校

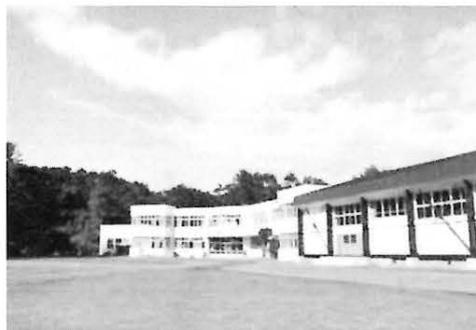
昭和27年11月 制定

石狩市立望来小学校



制定時期 不明

・望来小学校の略称「望小」を中心にして、海と波と稲の穂がそれを囲んでいる。
・海の波は「日本海の荒波にも負けない、健康でたくましい子に育つことを願っている」。
・全体を取り囲む稲の穂は、望来の稲の古い歴史や地域の豊かさと共に子ども達も豊かな心に育ってほしいとの願いがこめられている。



【所在地】 石狩市厚田区望来105番地

望来の地名はアイヌ語の「モライ」（遅い流れ）に由来する。明治4年4月、庄内より14戸45人が移住したのに始まる。明治6年には南部団体、明治18年には山口県団体、明治27年には石川県団体が移住し開拓が行われてきた農村地域である。近年、山間部を利用した墓園やゴルフ場が多い。明治18年私設教育所も創られたが本格的な学校は明治30年の公立望来尋常小学校が始まりである。学校は300名弱の児童数を誇った時期もあったが、過疎化の影響と少子化で児童数は減少してきた。

海岸の砂を利用した「砂の造形」、厚田の粘土を使った「汐里焼」など地域の自然、人材を活用した特色ある教育が進められてきた。平成31年3月をもって122年の歴史を閉じた。

【沿革】

明治18年	私設教育所できる
明治30年6月15日	公立望来尋常小学校と称し1学級で開校
明治41年4月1日	義務教育6ケ年に延長される
大正元年12月5日	校舎落成
大正5年11月25日	桂の沢特別教授場設置
大正9年4月	高等科併置許可
大正10年8月	望来小学校同窓会設立
大正12年5月	正利冠分教場設置
昭和16年4月	望来国民学校と改称
昭和20年7月15日	米軍機による空襲 11人が死亡 内7人は子ども
昭和22年4月	望来小学校と改称 高等科廃止
昭和22年5月1日	新製の望来中学校併置（4学級編制） 昭和27年10月 独立する
昭和24年11月3日	校舎増改築（教室3 工事費200万円 村費・PTA折半）
昭和25年8月	校歌制定
昭和43年4月	校旗・TV・袖幕寄贈
昭和61年1月	新校舎改築落成
平成17年10月1日	厚田村が石狩市との合併により石狩市立望来小学校と改称
平成31年3月31日	望来小学校閉校 [閉校時児童数 5名] [卒業生総数 2,113名] [厚田小学校]へ統合

石狩市立望来小学校校歌

作詞：堀岡 英男
作曲：渡辺日出雄

おおし きあ そ の や - ま - め ぐ り な が
れ て う み に そ - そ - ぐ と こ れ き
し は ふ - る き い ね の さ と ま -
な び き た れ る も - ら い こう

石狩市立望来小学校校歌

作詞 堀岡 英男
作曲 渡辺日出雄

- 一 おおしき阿蘇の 山めぐり
流れて海に そそぐとこ
歴史はふるき 稲のさと
学びきたれる 望来校
- 二 あかねに映ゆる 日本の
理想はひろく 洋々と
平和の世界 きずかんと
遠きはるかな わがゆくて
- 三 嵐はげしく すさぶとも
あしたの希望 みちびかん
久遠の文化 さんらんと
あげよ たたえよ 望来校

昭和25年8月 制定

厚田村立発足小学校



制定 昭和32年10月30日

・発足地域の基幹産業が、農業であることを稲をもって表現し、発足の子も達が恵まれた自然の中で、稲のようによくすくと成長し、米が日本人の糧として、日本の力の源となるように、子ども達が、日本をしっかりと支える心豊かなたくましい人間に成長することへの願いが込められている。



【所在地】 厚田村大字厚田村字発足292番地2

発足の地名はアイヌ語の「ハッタラ」（川の曲がりくねったよどみの多い所）に由来する。

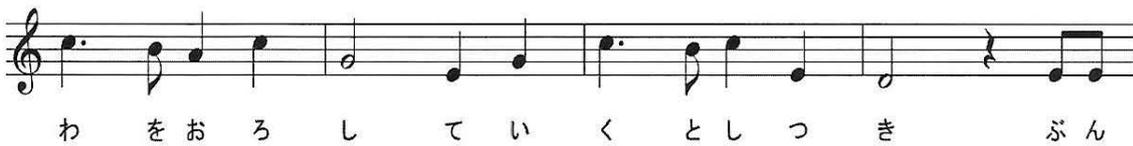
明治19年に四国徳島から五戸の入植者が開拓の鋤を入れたのが始まりとされる。それから12年が過ぎた明治31年に美馬与平、井川由太郎両氏の計らいで、笹小屋1棟を建て、浄土宗の僧侶によって寺子屋式の教育が行われたのが教育の始まりとされている。5年後の明治36年6月17日に発足簡易教育所が認可された。学校は地域教育と文化の中心として大きな役割を果たしてきたが、児童数の減少により平成15年3月をもって100年の歴史を閉じた。

【沿革】

明治36年6月17日	発足簡易教育所として開校する	佐藤辨蔵氏が校地500坪を寄付
大正2年9月16日	部落総会25名満場一致で寄付金を集め、校舎の増改築	
昭和14年	部落で本格的に養蚕を開始、学校での養蚕の成績佳良	
昭和18年4月26日	厚田郡発足国民学校設置認可	
昭和22年4月1日	学制の変更により、厚田村立発足小学校と改称	
昭和24年11月1日	厚田中学校発足分校設置（小学校に併置）	
昭和32年10月1日	厚田村立発足中学校として独立	
昭和32年10月30日	校歌制定	
昭和44年6月17日	開校記念日の制定	
昭和46年7月22日	発足中学校閉校 厚田中学校に統合	[卒業生総数 173名]
昭和54年11月30日	新校舎落成	
昭和56年7月16日	学校スキー場造成完了	
昭和57年7月14日	鮭の孵化井戸完成 その後学校孵化場で鮭の採卵・受精、鮭飼育活動開始	
昭和58年6月26日	開校80周年記念式典並びに祝賀会挙行	
昭和60年	農園活動開始 全道へき地複式研究大会石狩大会第一会場	
昭和62年	文部省指定「勤労生産学習研究発表会」開催	
平成13年	臨時PTA総会で閉校受け入れ決定	
平成15年3月31日	発足小学校閉校 厚田小学校へ統合	[閉校時児童数 8名] [卒業生総数 575名]

厚田村立発足小学校校歌

作詞：杉田安太郎
作曲：田辺 辰夫



厚田村立発足小学校校歌

作詞 杉田安太郎
作曲 田辺 辰夫

一 清き厚田の 水上に

すいらん 迫る

新天地

くわを おろして

幾年月

文化の光

輝きぬ

二 緑 滴る 山々に

黄金 波打つ

黄金波

拓き進まん

意気高し

歴史輝く

発足校

昭和32年10月30日 制定

厚田村立古潭小中学校



制定時期 不明

・古潭の文字を模様化した。
・六角は雪の結晶、そして雪国北海道を表し、全体の形から船の舵輪をも意味し、主産業の漁業の村のイメージを創っている。また、周囲の「古」の重なりによって歴史性を表わし、三つの古は堅実、真剣、真面目の三つの校訓を象徴している。



【所在地】 厚田郡厚田村字大字古潭村31番地

古潭の名はアイヌ語の「コタウンベツ」（村の川）に由来し、アイヌのチャシ跡もある。松前藩時代から運上屋が置かれアツタ場所の拠点であった。隣の押琴の地名は「オシヨロコツ」（湾・お尻の形）に由来し弁財船の寄港地としても栄えた。明治になって古潭には開拓使厚田出張所がおかれ、厚田村発祥の地となっている。教育面では明治9年6月に佐藤辨蔵が自費で教員を雇い駅通において児童に教育の場を与えていて、これは厚田村最初の教育とされている。学校は地域の教育、文化の中心となって特色ある実践を進めていたが、児童生徒の減少により平成2年に小学校は115年、中学校は43年の歴史を閉じ、それぞれ望来小学校、望来中学校に統合された。

【沿革】

- | | |
|-------------|--|
| 明治9年6月10日 | 古潭教育所が創設される |
| 明治10年3月 | 厚田教育所の設置により古潭教育所は合併する |
| 明治13年12月23日 | 厚田教育所古潭分教所となる |
| 明治17年6月20日 | 古潭尋常小学校として独立する |
| 昭和16年4月1日 | 学制変更により古潭国民小学校となる |
| 昭和20年7月15日 | 米軍機による空襲 校舎全焼により記録焼失 |
| 昭和22年4月1日 | 学制変更により厚田村立古潭小学校となる |
| 昭和22年5月20日 | 厚田中学校古潭分校を小学校に併置する |
| 昭和30年10月1日 | 厚田村立古潭中学校として独立（校舎は併置） |
| 昭和33年11月23日 | 校歌制定 |
| 昭和40年9月5日 | 開校90周年記念式典挙行 |
| 昭和46年12月15日 | 新校舎落成式を行う |
| 昭和51年4月より | 「辺地校の四季」道新に連載 |
| 昭和58年 | 「漢字の王様」の取り組み始める |
| 昭和60年6月10日 | 創立110周年記念行事を行う |
| 平成2年3月31日 | 古潭小中学校閉校 小学校は望来小学校 中学校は望来中学校へ統合
[閉校児童生徒数 小学生3名 中学生15名]
[卒業生総数 小学校 1,480名 中学校 379名] |

厚田村立古潭小中学校校歌

作詞：鈴木 藤吉
作曲：石橋 健

♩ = 112
mf

や ま - ど り - の こ だ ま に あ け - て あ

か - ね さ - す い り ひ に ね - む り

p *mf* *f*

ち から わ く し お - の か お り - に す く す く

mp *f*

と す く - す く - と わ れ ら そ だ ち ぬ

厚田村立古潭小中学校校歌

作詞 鈴木 藤吉
作曲 石橋 健

一 山鳥の こだまに明けて

あかねさす 入日にねむり
力わく潮の香りに
すくすくと すくすくと
われら 育ちぬ

二 輝ける 古き歴史の

誇りもつ この学舎に
清らかな 星かげ仰ぎ
喜々として 喜々として
われら いそしむ

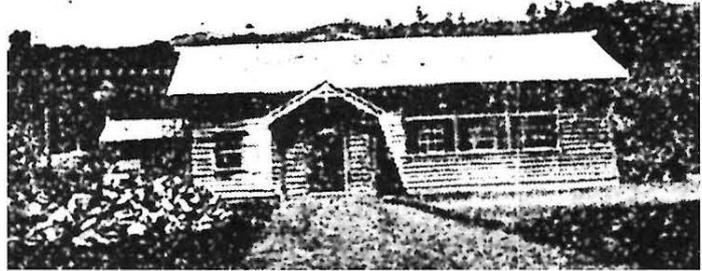
三 波荒き 日本海にも

ひらけゆく 道は果なし
美しき 花輪つくり
手をとって 手をとって
われら 進まん

昭和33年11月23日 制定

厚田村立桂の沢小学校

校章不明



桂の沢分教場

【所在地】 厚田村大字望来村字桂の沢129番地10

桂の沢は望来川の右手支流にあたる桂の沢川流域にあった集落である。明治27年に石川県人宮岸某が同県人31戸の団体名義で桂の沢に9万坪、嶺泊村境界に30万坪余の貸付を出願したことに始まる。

山に通じる沢道沿いに開墾がなされ、多い時は70～80軒の集落があったという。

当時学校の前に住んでいた古老の話によると「山には桂の木や栓の木が多く、秋の紅葉や春の芽吹きの際は美しい所だった。山から産出された良材は馬樵や流送で望来の木材工場まで運ばれ製材されていた」という。

大正5年、校舎が新築され望来尋常高等小学校桂の沢特別教授場が開設された。その後、望来小学校の分教場となり、昭和16年に独立校となるが、昭和44年望来小学校に吸収統合される。地域の知と文化の中心であった。

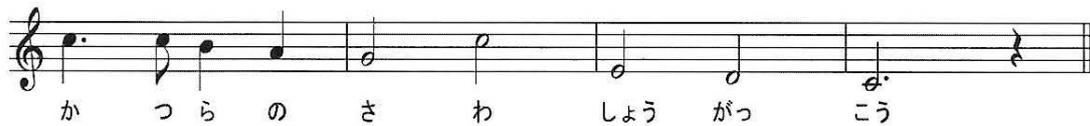
【沿革】

- | | | |
|-------------|-----------------------------------|--------------|
| 大正5年11月25日 | 望来尋常高等小学校桂の沢特別教授場開設（単級編制） | 校舎新築 |
| 大正10年3月11日 | 望来尋常高等小学校桂の沢分教場に昇格 | |
| 昭和16年3月31日 | 望来尋常高等小学校桂の沢分教場を厚田村立桂の沢尋常小学校として独立 | |
| 昭和16年4月1日 | 厚田村立桂の沢国民学校と改称 | |
| 昭和22年4月1日 | 学制改革により厚田村立桂の沢小学校となる | |
| 昭和25年9月8日 | 校舎増築 | |
| 昭和34年4月1日 | 学級編制基準の改正により2学級編制 | |
| 昭和34年11月 | 校歌制定 | |
| 昭和38年11月27日 | 校舎移転新築 校長住宅新築 | |
| 昭和39年4月24日 | 教員住宅移転改築 | |
| 昭和39年7月26日 | 新校舎敷地内にグラウンドを設ける | |
| 昭和40年4月1日 | 児童数の減少により単級編制となる | |
| 昭和44年3月31日 | 桂の沢小学校閉校 | 〔閉校時児童数 11名〕 |
| | 正利冠小学校とともに「望来小学校」へ統合 | 〔総卒業生数 245名〕 |

厚田村立桂の沢小学校校歌

作詞：齋木武雄
作曲：津田 甫

♩ = 110



厚田村立桂の沢小学校校歌

作詞 齋木 武雄
作曲 津田 甫

一 海なみの風 あらくとも

わがまなびやは 山あいに
だかれていとも しずかなる
桂の沢小学校

二 いたうるわしき 山かいに

はてなき夢を えがきつつ
わが父母の 学びたる
桂の沢小学校

三 四季それぞれに 美しく

われらはぐくむ 大自然
幸をもとめて 学ぶなり
桂の沢小学校

昭和34年11月 制定

厚田村立正利冠小学校



制定時期 不明

(制定の趣旨
不明)
北国を象徴
する雪の結
晶の中心に
正利冠の「正」
の字を配置
している。



【所在地】 厚田村大字望来村字正利冠234番地5

正利冠（まさりかっぶ）の地名はアイヌ語で「マサラカオフ」(海岸より一段小高くなっている場所の上を通っている川)に由来する。正利冠集落は望来に河口をもつ正利冠川の流域に位置する。

この地には明治28年4月石川県団体42戸150人が67万余坪の貸付けを受け移住したのに始まる。

大正12年、正利冠川の沢沿いに開墾された地区に望来小学校正利冠分教場が設置された。

校舎は区域有志の寄付により建てられたが、大部分は佐藤常三郎の篤志によるものと言われる。昭和33年の戸数調査によると、総戸数は57戸、人口は389人とある。昭和44年正利冠小学校は桂の沢小学校とともに望来小学校に統合された。

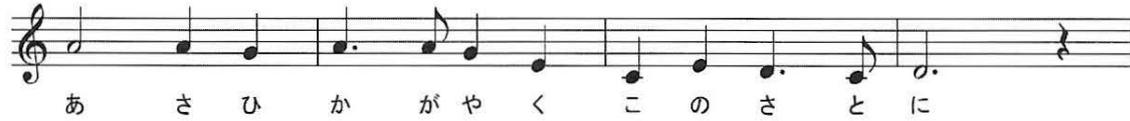
【沿革】

- 大正12年11月 5月に学校設置の認可を受け、校舎竣工 校舎総坪数33,5坪 教室20坪
- 大正12年12月20日 望来尋常高等小学校正利冠特別教授場を開設
校舎建築は区域有志の寄付を受け建築の大部分は佐藤常三郎氏の篤志による
- 昭和9年5月17日 正利冠特別教授場として独立し、正利冠尋常小学校と呼称（単級）
- 昭和16年4月1日 公立正利冠国民学校と改称（初等科のみ2学級）
- 昭和18年4月1日 高等科設置認可（1学級）
- 昭和20年 秋 校歌制定
- 昭和22年5月1日 学制改革により高等科廃止、厚田郡厚田村立正利冠小学校となる（2学級）
望来中学校正利冠分校併置される（1学級）
- 昭和26年12月26日 職員室前廊下屋根付近から出火、校舎全体、接続住宅、教員住宅1棟2戸
総建坪167坪が全焼した この火災で女性教師1人焼死する
- 昭和27年1月22日 仮教室にて2部授業
- 9月20日 新校舎落成 3教室、職員室、便所（99坪） 住宅1棟2戸（25坪）
- 昭和28年3月31日 望来中学校正利冠分校閉校 [卒業生総数 46名]
- 昭和39年12月14日 学校給食（温食）開始
- 昭和44年3月26日 正利冠小学校閉校 [閉校時児童数 35名] [卒業生総数 383名]
桂の沢小学校とともに「望来小学校」へ統合

厚田村立正利冠小学校校歌

作詞：鈴木 藤吉
作曲：朝倉 哲司

♩=110



厚田村立正利冠小学校校歌

作詞 鈴木 藤吉
作曲 朝倉 哲司

一 黎明の鐘 今鳴りて

朝日輝くこの里に

真澄の空も いや高く

希望のもとに 学ばなん

正利冠小学校

二 石狩原頭 秋酣けて

垂穂豊けきこの里に

恵みの幸の 湧くところ

感謝とともに 学ばなん

正利冠小学校

三 純朴の風 漲りて

土の香高きこの里に

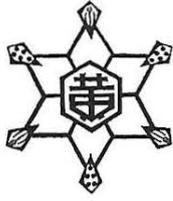
祖先の偉業 受け継ぎて

更に磨かん もろともに

正利冠小学校

昭和20年秋 制定

浜益村立黄金小学校



制定 昭和31年7月12日

輪郭は北国の象徴ともいべき雪の結晶、三角形は黄金山とその裾野の田園を表し、先端は稲穂、逆三角形は雄大な日本海を表わし、先端は波濤。中央の「黄」は、上記の自然にかこまれた本校を表わす。
全体として、自然の厳しさに打ち勝つ強い身体と、誰とでも仲良くできる広い心をもち常に明るく、学習に励む黄金の子どもをとの願いをこめて図案化した。



【所在地】 浜益村大字柏木村1番地17

黄金小学校の校区は川下、柏木、実田、毘砂別の各村が範囲だった。

この地の中心には浜益川（旧黄金川）が流れ、広く低地を作っている。後方には黄金山がそびえ、摺鉢山やトミサンベツ（毘砂別）と共に先住民族アイヌのユーカラ（叙事詩）の舞台でもある。また、万延元年（1860）に荘内藩によって西蝦夷地の警備のためハママシケ陣屋が設けられ、この地で浜益最初の水稲栽培が行われ、その後広大な農業地帯となった。明治に入り人口の増加とともに川下の有志が主となって明治28年2月19日、黄金小学校が開校された。それから104年の歴史を刻み浜益小学校として統合されるまで地域の教育、文化の中心としての役割を担った。

【沿革】

- 明治28年2月19日 黄金尋常小学校として開校 修業年限3年 児童数 84名
通学範囲は川下、柏木、実田、毘砂別
- 明治33年2月6日 登校時突如の暴風雪により7名の女子が飛ばされ、2名が犠牲になった
（現在 浜益小学校校庭に「二妙薦福之碑」として残されている）
- 昭和4年4月1日 黄金尋常高等科学校が開設 新校舎落成 児童数460名
- 昭和8年2月11日 吹雪の夜中に火災発生、校舎全焼 同年12月に新校舎落成
- 昭和16年4月1日 浜益村立黄金国民学校と改称
- 明治22年4月1日 浜益村立黄金小学校と改称
- 昭和22年6月6日 浜益村立黄金中学校開校（黄金小学校に併置）
- 昭和23年4月 3学級編制 児童数118名
- 昭和26年2月1日 黄金中学校は浜益中学校に統合し、校舎は川下に新築
- 昭和36年2月19日 校歌制定
- 昭和52年4月1日 統合により実田小学校の児童が本校に通学
- 昭和58年4月1日 統合により尻苗小学校の児童が本校に通学
- 平成2年4月1日 「沖揚げ音頭保存会」発足 備品を整備し、以後、児童の活動を支援
- 平成6年10月 開校100周年記念式挙行
- 平成11年3月31日 浜益北部小学校、浜益中央小学校、黄金小学校は閉校し統合 黄金小学校の校舎を活用し「浜益小学校」の名を復活
[閉校時児童数 63名] [卒業生総数 4,446名]

浜益村立黄金小学校校歌

作詞：松山 一雄
作曲：服部 茂

♩=88 正気と 希望にみちて

くもはたなびく ことがねふじ
めぐるはまべに はなさいて
れきしはとおい まなびやに
じゆうのいぶきも あたらしく
なかよく つどう
1, 2. ことがねのこども 3. ことがねのこども

浜益村立黄金小学校校歌

作詞 松山 一雄
作曲 服部 茂

一 雲はたなびく 黄金富士
めぐる浜辺に 花咲いて
歴史は遠い 学びやに
自由のいぶきも 新しく
仲よく集う 黄金の子ども

二 姿をうつす 浜益川
伸る早苗は 目もはるか
豊かにひらけ ゆく末の
文化の里を 築こうと
進んで学ぶ 黄金の子ども

三 しお風つよい 日本海
浜なすかおる 砂浜に
きたえ育った 年月を
平和のねがい 胸にひめ
明るく励む 黄金の子ども

昭和36年2月19日 制定

浜益村立浜益中央小学校



制定 昭和39年9月1日

(制定の趣旨不明)

波の形を思わせる円形のデザインの中に浜益のシンボル黄金山を正三角形に模りその中に「中央」の文字を記している。統合により浜益の中心校であることを示していると思われる。



【所在地】 浜益村大字浜益55番地 1

浜益は松前藩時代からニシン漁と関わりを持って村の繁栄をもたらしてきた。昭和30年代に入り不漁が続き人口の減少と共に歴史ある浜益（茂生）小学校、群別小学校も児童数減少のため統合の論議なされその結果対等の形で統合が決まった。新校舎は両校の中間地点にあたる浜益村茂生160番地（通称適沢）の高台に建てられた。開校時は浜益小学校と称したが間もなく校名を変更し「浜益中央小学校」と改称された。浜益中央小学校の沿革を見ると開校以来独自の歴史と浜益の中心校として歩んだ旧浜益（茂生）小学校の歴史を併せ持ちながら教育、文化の中心校としての役割を果たしてきた。

平成に入り浜益村の人口が更に激減傾向にあるため、浜益中央小、北部小、黄金小が統合し、村の小学校を1校に絞り、黄金小学校の校舎を活用し校名を浜益小学校と改称し復活された。

【沿革】

- 昭和39年 1月 1日 旧浜益小学校及び旧群別小学校を廃止、適沢に浜益小学校を設立
- 昭和39年 1月20日 浜益小学校と群別小学校が統合し浜益小学校として開校 6学級編成 253名
- 昭和39年 2月 1日 校名変更 浜益村立浜益中央小学校と改称
- 昭和39年 8月 1日 校歌制定
- 昭和43年 8月14日 創立90年行事記念式挙行 記念碑建立（旧浜益小学校創立 明治11年）
- 昭和53年 8月 創立100周年記念式挙行
- 昭和63年 5月 1日 6学級編制（74名）
- 昭和63年 8月 創立110周年記念式挙行（浜益中央小 開校25年）
- 平成 4年 4月 6日 入学式 4学級編制（3・4年 5・6年 複式）
- 平成 7年 4月 6日 入学式 3学級編制（完全複式）
- 平成10年 4月 7日 入学式 4学級編制（1・2年 単式）
- 平成10年11月 1日 創立120周年・閉校記念式典挙行 「記念之碑」建立（開校35年）
- 平成11年 3月31日 浜益中央小学校閉校 [閉校時児童数 23名] [卒業生総数 700余名]
[旧浜益（茂生）小学校からの卒業生総数 4,300余名]
- 平成11年 4月 1日 浜益北部小学校、黄金小学校と統合 黄金小学校の校舎を使用し、新設「浜益小学校」へ移行

浜益村立浜益中央小学校校歌

作詞：小田 観螢
作曲：荒谷 正雄

Moderato

や ま や ま ま ぢ か く と お く に み え て

は る な つ あ き ふ ゆ た の し い む ら の

は ま ま す ち ゆ う お う ま な び や む と せ

た だ し く あ か る く げ ん き で ゆ こ う

浜益村立浜益中央小学校校歌

作詞 小田 観螢
作曲 荒谷 正雄

一 山々まぢかく 遠くに見えて
春夏秋冬 たのしい村の
浜益中央 学び舎六とせ
正しく明るく 元気で行こう

二 群別川波 ひびきをあげて
花咲き紅葉も きれいな村の
浜益中央 学び舎六とせ
心もからだも きたえて行こう

三 前には海ばら あおあお見えて
船出のかけごえ たえない村の
浜益中央 学び舎六とせ
力を合わせて たゆまず行こう

昭和39年8月1日 制定

浜益村立浜益北部小学校



制定 昭和41年

(制定の趣旨不明)

全体を六角の雪の結晶にかたどり、その六つの角は北部小学校の「北」の字を配している。中央の円には「小」の字を記し、それを波のデザインで包んでいるものと思われる。



【所在地】 浜益村大字群別村字幌942番地2

浜益北部小学校は、幌小学校と床丹小学校の統合新設校として、昭和40年10月1日に新たに開校した。統合時には、床丹・幌それぞれの地域代表者、学校、教育委員会によって、学校的位置について話し合われ、床丹、幌、その中間という3案が出されたが、中間には適地がないため、幌地区に決定した。昭和40年12月に落成した校舎は、「多くの人が驚きと羨望の声を放った」と伝えられるほど、新しい構造と建築材料を駆使した最先端の建築物であった。

北部小学校の教育として「ヤマベ学習」が有名である。豊かな自然環境を活かした、ヤマベの飼育、採卵、受精の成果は、研究会などで披露され、各種の表彰を受け、広く報道された。幌は、鯉漁場として繁栄した他、開拓使が明治10年に配ったりんごなどの苗木から果樹栽培が始まり、温厚な気候が適合して果樹栽培が盛んに行われるようになった地域である。幌中学校の「りんご栽培即売体験活動」と共に、北部小学校の「ヤマベ学習」は、地域の特色を活かして児童生徒の郷土愛を育てる教育活動として人々に感動を与えた。地域と学校が一体となった特色ある教育活動が高く評価された北部小学校であったが、児童数の減少を押さえることはできず、開校時の194名から平成11年には6名に減少し、閉校が決定した。学校の池で飼育されていたヤマベは幌川に放流されて、自然ふ化を続け今日にいたっている。

【沿革】

- 昭和40年9月31日 床丹小学校と幌小学校が統合
- 昭和40年10月1日 新たに浜益村立浜益北部小学校として開校 児童数194名
- 昭和40年12月 校舎落成
- 昭和41年 体育館落成 校舎落成式挙行 校歌 校旗制定
- 昭和54年4月1日 千代志別小学校を浜益北部小学校に統合
- 昭和60年 第34回全道僻地複式教育研究大会第七分科会場
ヤマベふ化場完成。採卵研学校課題研究発表会
その後、閉校まで特色ある教育活動として「北部小のヤマベ学習」が続く
- 平成10年 閉校記念式典・記念碑除幕式 惜別の会実施・閉校式
- 平成11年3月31日 浜益北部小学校閉校 [閉校時児童数 6名] [卒業生総数 342名]
- 平成11年4月1日 浜益中央小学校、黄金小学校と統合 黄金小学校の校舎を使用し、新設「浜益小学校」へ移行

浜益村立浜益北部小学校校歌

作詞：三浦 敏夫
作曲：木村 光雄

♩ = 112 ~ 120

お お き な そ ら き た の そ ら
あ さ の ひ か り の あ か る い ま ど に き ぼ
う の う - た が こ だ ま す る た の
し い が っ こ う は ま ま す ほ く ぶ こ こ
ろ を む す ん - で み ん な は ま な ぶ

<p>三 輝く海 北の海 潮のかおりの 流れる丘に 希望の鐘が なりひびく 楽しい学校 浜益北部 きょうも新たに みんなは進む</p>	<p>二 はたらく村 北の村 緑の風の ささやく庭に 希望の花が さきにおう 楽しい学校 浜益北部 からだをきたえて みんなは励む</p>	<p>一 大きな空 北の空 朝の光の 明るい窓に 希望の歌が こだまする 楽しい学校 浜益北部 心を結んで みんなは学ぶ</p>	<p>浜益村立浜益北部小学校校歌</p> <p>作詞 三浦 敏夫 作曲 木村 光雄</p>
---	---	--	---

昭和41年 制定

浜益村立濃昼小中学校

濃昼小学校



濃昼中学校



制定時期 不明

・中央に「小」「中」の文字を配し、周囲を「ゴキビル」の文字を図案化して構成した。
 ・濃昼小中学校児童生徒の全人的発達と、それが将来にわたって発達の伸びていることを願っている。



【所在地】 浜益村大字尻苗村字濃昼58番地2

濃昼の地名はアイヌ語の「コキビル」（蔭の多い所）に由来する。突き出た山に囲まれ狭い平地の中心に濃昼川が流れている。松前藩時代、初めはアツタ場所に属していたが寛政2年にアツタ場所とハママシケ場所の境界が濃昼川となり、両岸に番屋が置かれ網引場もあった。明治の頃、村は川の北側が浜益郡尻苗村に属され、南側が厚田郡濃昼村であった。厚田側には濃昼山道の出入り口もある。ニシン漁の盛んな時代、木村番屋、港、学校、神社があったのは尻苗村濃昼である。この地の教育は当初は明治27年に開設された尻苗尋常小学校へ通学していたが、濃昼の児童が増えたため明治30年8月に浜益郡尻苗尋常小学校濃昼分教場設置されたのが始まりである。それから95年、地域の教育文化の中心的役割を担ってきたが、児童数の減少により閉校に至った。

【沿革】

明治30年 8月	浜益郡尻苗尋常小学校濃昼分教場設置	修業年限3年 補修3年
明治40年4月	浜益郡尻苗尋常小学校から分かれ、浜益郡濃昼簡易教育所となる	
明治41年4月1日	浜益郡濃昼教習所と改称	
大正6年4月	浜益郡濃昼尋常小学校と改称	
昭和16年3月	濃昼国民学校と改称	
昭和22年4月1日	学制変更により濃昼小学校と改称	
昭和22年8月18日	浜益村立浜益中学校濃昼分校を併置	
昭和29年4月1日	濃昼中学校として独立し濃昼小学校に併置	
昭和42年8月14日	濃昼小学校開校60周年記念式典開催 記念誌「濃昼峠」発行 校歌制定	
昭和56年11月	第33回高松杯全日本中学校英語弁論大会（東京）道代表で女子1名出場	
平成2年3月	小・中学校最後の卒業式（小学校男1名 女1名 中学校女2名）	
平成2年4月	小学校児童数「0」となる。中学校のみとなる。入学生 男1名 女1名	
平成3年3月18日	濃昼小中学校閉校記念事業協賛会結成	
平成4年3月31日	濃昼小中学校閉校 記念誌「濃昼 郷土と学校の歩み」発行 [閉校時児童数 0名 生徒数 2名] [卒業生総数 小学校579名 中学校237名]	

浜益村立濃昼小中学校校歌

作詞：幅 麗二
作曲：横谷 瑛司

は な ひら - く や ま ふ と こ ろ に つ ど
う ま な び や ま ゆ た か - き わ こ う
ど ら あ り - あ あ み ち あ れ ば こ
そ お お し く - も ま な
び て ゆ か め

四	三	二	一	浜益村立濃昼小中学校校歌 作詞 幅 麗二 作曲 横谷 瑛司
白銀の 山ふところに 若き 生命は ひそかにも 育まれつつ 見よ 道はるかなり 久遠の あゆみは今ぞ	紅葉する 山ふところに 流れ 清らか そそぎては 海原あおし 行け 道ひとすじに れいろうの 水音高く	緑なす 山ふところに 希望 あふれて 生新の 心ひろびろ おお 道たしかなり 幽邃(ゆうすい)の 真理をこめて	花開く 山ふところに つどう 学舎 眉たかき 若人らあり ああ 道あればこそ 雄々しくも 学びて行かめ	

昭和42年8月14日 制定

浜益村立尻苗小中学校



制定時期 不明

(制定の趣旨不明)

尻苗の「苗」の字を大胆に舟を正面から見た形にデザインし、それを大きな波で包み、漁業を生業とする校下にふさわしい意匠である。



【所在地】 浜益村大字尻苗村字送毛1番地

この地域一帯は厚田安瀬から濃昼、送毛、毘砂別と山々が続き、海岸いたるところ断崖がそびえ崖は直ちに海に入り込んでいて松前藩時代から陸上交通の難所であった。その海岸の所々に沢が存在し、ハマシケ場所当時から送毛にもニシンの漁小屋が置かれていた。送毛の地名はアイヌ語の「ウクリキ」（植物のトキナの名）に由来する。ウクリキが訛って「ラクリケ」になった。この地域は明治2年には尻苗村に属していた。尻苗村は明治35年の二級町村制により合併して黄金村に属した。昭和17年頃より尻苗村の有志が協議し送毛に私学が開設された。尻苗村は明治20年の現住人員は57人、同24年には67戸、男148人、女135人であった。その時期に設置された学校が尻苗小学校である。

【沿革】

明治24年	茂生小学校の分教場を開設
明治27年	公立尻苗尋常小学校が設置される 児童数 男子17名 女子9名
明治28年11月	融資に寄り資金を募り校舎を新築し移転 尻苗尋常小学校と改称 児童数 24名
明治30年	在籍数増加 児童数 70余名
明治30年8月	濃昼からの通学児童も多くなり、濃昼に分教場を設ける。
明治34年	修業年限4年制
明治38年	水産農業補修学校を併置
昭和10年	尻苗青年学校を併置
昭和16年4月1日	尻苗国民学校と改称 高等科併置
昭和22年4月1日	浜益村立尻苗小学校と改称 新制浜益中学校尻苗分校を併置
昭和39年10月	校歌制定
昭和57年9月12日	校庭に閉校記念碑「さくら 潮風 そして 学び舎」を建立する
昭和58年3月31日	尻苗小中学校閉校 [閉校時児童生徒数 小学校 5名 中学校 7名] [卒業生総児童生徒数 小学校 351名 中学校 261名]
昭和58年4月1日	尻苗小学校は黄金小学校に統合 尻苗中学校は浜益中学校に統合



浜益村立尻苗小中学校校歌

作詞・作曲：三浦 述而
編曲：鈴木 誠次



は る あ け ぼ の に み どーり も え



あ きーゆ う ば えーに も みーじ て る



や ま ふ と こ ろ の ま な び や に きーよ き こ こ ろ を う けーつ ぎ て ま こ



と の み ち を わ れーら ゆ く

浜益村立尻苗小中学校校歌

作詞・作曲 三浦 述而
編曲 鈴木 誠次

一 春曙に 緑萌え

秋夕映えに 紅葉照る
山ふところの 学び舎に
清き心を 受け継ぎて
誠の道を 我等ゆく

二 荒波おさえ そそりたつ

尻苗の磯の 岩のかげ
きたえるからだ 赤銅の
堅き心に 胸を張り
正しき道を 我等ゆく

三 石狩の海 幸多く

恵み豊かに 育まれ
世界に続く 海原の
広き心に 手を結び
平和の道を 我等ゆく

昭和39年10月 制定

浜益村立千代志別小中学校



制定時期 不明

(制定の趣旨不明)

回りの波はニシン漁を営む日本海を表し、左右の扇型の図形は集落の両側に迫る山を図案化しその山に挟まれたように「千代志別」の名前が中央に記してあると思われる。



千代志別小中学校跡地（校門が残る）

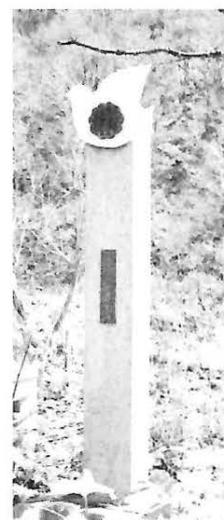
【所在地】 浜益村大字群別村字千代志別595番地 1

国道231号の千代志別トンネルと浜益トンネルの僅かな透間に千代志別の集落がある。

千代志別の地名はアイヌ語の「チセソシベ」（家の跡のあるところ）に由来する。陸路がなく交通の難所であったが、安政4年（1858）千代志別と雄冬を結ぶ雄冬山道が開削された。ハマシケ場所当時は漁小屋も置かれていたが、特に明治36年、ニシン刺し網場が設けられたことにより定住者が増加し、学校の設置がなされた。戦前、この地は一時、金山が掘られ、木材販売、製材、造船、下駄製造、木炭製造と盛んな時期があった。陸路が不便な時代、買い物などは小樽との行き来が多かった。

【沿革】

明治36年 3月26日	千代志別簡易教育所設置 修業年限4ケ年
明治41年	義務教育年限延長により6年制となる
明治42年 8月	千代志別簡易教育所失火により全焼
大正6年 4月	千代志別尋常小学校と改称
大正6年 秋	新校舎完成 16坪5合
大正10年 12月	台風のため校舎倒壊
昭和2年	千代志別川の氾濫に寄り校舎流失
昭和2年 12月	新校舎完成 30余坪
昭和16年 4月1日	千代志別国民学校と改称 高等科併置
昭和22年 4月1日	浜益村立千代志別小学校と改称 高等科併置廃止
昭和27年 10月1日	浜益村立浜益中学校千代志別分校併置
昭和29年 4月1日	浜益村立千代志別中学校独立（小学校に併置）
昭和37年 10月	千代志別小中学校に電灯が点火される
昭和39年 10月	校歌制定
昭和40年 4月1日	千代志別中学校は幌中学校に統合（生徒は幌で寄宿舍生活）
昭和54年 3月31日	千代志別小学校閉校 校庭に「千代志別小学校閉校記念碑」建立 [閉校時児童数 4名] [卒業生総数 197名]
昭和54年 4月1日	浜益北部小学校に統合



千代志別小学校閉校記念碑

浜益村立千代志別小中学校校歌

作詞：杉田安太郎
作曲：服部 茂

Moderato

mp

わ どーの い り え に さ か ま く ど と う

5

い し か り の う ー み て ん を つ く と ー も

9 *mf*

お そ れ ず こ げ よ ち か ら を あ わ ー せ

13 *f*

き ぼ う の み な と に ゆ き つ く ま で は

17 *mf rit.*

わ れ ら が ほ こ う ち よ し べ ー つ

21 *f* *a tempo*

お お ち よ し べ ー つ ち よ し べ ー つ

浜益村立千代志別小中学校校歌

作詞 杉田安太郎
作曲 服部 茂

一 湾洞の入江に 逆巻く怒涛

石狩の海 天を突くとも

恐れず漕げよ 力をあわせ

希望の港に 行き着くまでは

我等が母校 千代志別

おお 千代志別 千代志別

二 タンパケに立てば 水平線の

はるか彼方に 北斗七星

真理と正義の 灯かかげ

世界の平和に つくさんと呼ぶ

我等が母校 千代志別

おお 千代志別 千代志別

三 進みゆく道 険しかろうと

我等が友よ 勇気を出して

手と手をにぎり 理想と熱で

我等が祖国 日本を造ろう

我等が母校 千代志別

おお 千代志別 千代志別

昭和 39 年 10 月 制定

浜益村立実田小学校



制定時期 不明

(制定の趣旨不明)

リボン状の台座に実田の「実」の字が中央に大きく配しているものと思われる。



実田小学校之碑

【所在地】 浜益村大字実田村129番地 2

実田村は明治初年から明治35年までの浜益郡の村である。幕末の安政6年蝦夷地警備を目的に庄内藩が川下地区にハママシケ陣屋を設置し武士や職人、農民等が移住したが、戊辰戦争が始まる慶応4年には多くは引揚げていったが中には残留した者もいた。その中の2戸が明治3年、実田村に移住したのが村の始まりである。実田村地区にある黄金山はアイヌの叙事詩ユーカラの舞台になっているといい、アイヌ文化に関する名勝に指定されている。

集落には黄金川（現浜益川）が流れていて田畑耕作に適している。村名の起こりは、移住者が黄金川沿いに登ったときに仏像を拾ったことから「彌陀村」と名付けたことにより、明治4年に「実田村」と改めたといわれる。

また、実田小学校の側には黄金神社が建立され、学校と神社の辺りが村の中心であったと考えられる。

【沿革】

明治30年頃	柄内吉承氏部落の子弟を集めて自宅教授をする。 戸数21戸 112名
明治36年6月	民家の空家を充当し簡易教育所開設 児童数 男13名 女7名 計20名
明治41年4月	義務教育6ヶ年制となる
明治43年9月10日	新校舎新築移転 32.5坪 部落民の寄付による
大正6年4月1日	実田尋常高等小学校と改称
大正15年	青年訓練校併置
昭和5年	2学級編制 児童数 79名
昭和16年4月1日	実田国民学校と改称 高等科を併置
昭和22年4月1日	浜益村立実田小学校と改称 高等科を廃止 新制黄金中学校実田分校を併置
昭和34年	屋外運動場部落民により拡張整備される
昭和36年	校舎2教室増築される
昭和43年8月	実田中学校は浜益中学校に統合され、単独の実田小学校となる
昭和50年4月	浜東小学校を統合
昭和52年3月31日	実田小学校閉校 [閉校時児童数 38名] [卒業生総数 不明]
	校庭に「実田小学校之碑」を建立
昭和52年4月1日	黄金小学校に統合

浜益村立実田小学校校歌

作詞・作曲：藪下 三郎
編曲：秋元 藤吉



浜益村立実田小学校校歌

作詞・作曲 藪下 三郎
編曲 秋元 藤吉

一 空は黄金の 山なみに

潤す流れ 逆(さかさ)川

真冬の雪は きびしくも

春摺鉢に 桜咲く

ああ自然に生きる 我が母校

二 恵み豊かに 川なみの

幾年流れ 変るとも

あけゆくつとめ 年毎に

築いて生きる 道開く

ああ弥陀の川原の 我が母校

三 実りの秋の 喜びを

求めて共に ゆくかなた

自由の鐘も 高らかに

文化のはたと 咲きかおれ

ああ我がふるさとの 我が母校

制定時期 不明

浜益村立浜東小学校



制定時期 不明

(制定の趣旨不明)

左右対称の構図で頂点と上の一文字が見える。下は、右払い左払いのように見える。中間の一文字に、黒い十の区切りを加えて「田」とみると、全体に「東」の文字が浮かびあがってくる。鳥を図案化したようにも感じられるシンプルな意匠である。



【所在地】 浜益村大字実田村字御料地335番地 1

「流れる水は青くすみ、山峡深く道を踏む」と校歌に歌われるように、浜東小学校は浜益と新篠津を結ぶ山間に位置する学校である。地域名は皇室管理の御料林があったことから「御料地」と呼ばれている。明治に入り北海道の開拓が進むと森林の乱伐が問題となり、開拓使は「伐木規制」を定め、森林を保護し管理を行った。道庁時代の明治23年には道内の山林原野を御料地に編入、同28年には各地の官有林が御用林になった。学校は、明治40年に帝室林野局留萌指定分担区詰所の一部を教室として、簡易特別教育所留萌教育所として設置された。その後、浜益の最東に位置することに由来して浜東尋常小学校と改称し、制度変遷にともなって校名が変化した。地域には、かつて駅通が置かれ、林業従事者が従事していたが、農地としては狭小で、人口児童数ともに各時代にわたって極少であった。

【沿革】

明治40年 4月	簡易特別教育所留萌教育所として設置される 帝室林野局留萌指定分担区詰所の一部を教室とした
明治40年 7月	校舎完成 総坪数 41坪 (教室24坪1室、教員室6坪、玄関2坪、物置その他9坪)
明治45年 7月	留萌教育所を浜東教育所と改称
大正 6年 4月	浜東尋常小学校と改称 (児童数40名内外であった)
昭和16年 4月	浜東国民学校と改称 高等科を併置 (この間 青年訓練所、青年学校も併置)
昭和22年 4月	浜東小学校と改称
昭和22年 7月18日	新制中学校併置 黄金中学校実田分校浜東分室
昭和27年	小学生65名、中学生29名
昭和29年 4月 1日	浜益村立浜東中学校と独立 併置
昭和31年 7月 7日	校歌制定
昭和41年 4月 1日	中学校は浜益中学校に統合 小学校は単独小学校となる
昭和46年	児童数は減少 18名
昭和50年 3月31日	浜東小学校は閉校 [閉校時児童数 6名] [卒業生総数 466名] 実田小学校に統合

浜益村立浜東小学校校歌

作詞：佐々木利男
作曲：千葉日出城



ながれるみずはあおくすみ
さんきょうふかくみちをふむれ
きしのひととともどもにこ
どもようたえよいつのひもお
おはまひがしまなびやのうた

浜益村立浜東小学校校歌

作詞 佐々木 利男
作曲 千葉 日出城

一 流れる水は 碧く澄み

山峡深く 道をふむ

歴史の人と ともどもに

子どもよ歌えよ いつの日も

おお浜東 学舎のうた

二 緑の森は 照り映えて

大空高く 雲は行く

世界の友と ともどもに

子どもよ歌えよ いつの日も

おお浜東 学舎のうた

三 凍てつく雪は ふきすさみ

故郷白く 燃えあがる

文化の夢と ともどもに

子どもよ歌えよ いつの日も

おお浜東 学舎のうた

昭和31年7月7日 制定

浜益村立浜益（茂生）小学校



制定時期 不明

(制定の趣旨不明)

ハママシケ場所として栄えたシンボルとしてニシンの群来を呼ぶ海藻をデザイン化しリボンで結ばれ「濱」の字を丸く囲んでいるものと思われる。



【所在地】 浜益村大字浜益50番地

浜益はハママシケ場所の中心として運上屋が置かれていた。明治から大正時代はニシン漁業の最盛期で道内屈指の漁場として建網154統を数え繁栄したところである。人口も増え子弟の教育に関する思いも強く明治11年、大心寺向いの地で浜益教育所が開かれたのが最初ある。教育所は茂生学校と呼ばれ、現在の浜益支所（浜益村役場）の上の方に移された。明治34年、茂生尋常小高等学校の時代茂生山（現浜益中学校地）に移り、昭和39年1月の統合されるまで茂生地区の教育・文化の中心を担っていた。

はまます郷土資料館には「茂生学校」の扁額が残されている。

【沿革】

明治11年11月25日	浜益郡教育所開校（大心寺向い）児童24名 通学区域 茂生 群別 川下
明治12年7月	浜益教育所を茂生学校と改称
明治13年	群別小学校分校独立
明治17年	尻苗小学校分校独立
明治18年	村民協議の上校舎新築 場所は現在の浜益支所（旧浜益村役場）の上の方
明治20年4月	簡易小学校茂生学校と改称 男子45名 女子11名 計56名
明治23年	幌小学校分校独立
明治28年3月	茂生尋常小学校と改称 黄金小学校分校独立
明治34年8月	茂生山の上（現浜益中学校地）に校舎新築 浜益尋常高等小学校が誕生
明治40年	浜益尋常小学校は6ヶ年に改め 高等科は2年となる
大正7年5月2日	校歌制定
昭和2年	浜益尋常高等小学校の新校舎完成 当時在学児童 354名
昭和16年4月1日	浜益国民学校と改称（高等科は茂生地域地区の通学のみ）
昭和22年4月1日	学校制度改正により 浜益村立浜益小学校と改称（高等科は廃止）
昭和22年6月5日	浜益村立浜益中学校開校（浜益小学校に併置）
昭和26年2月1日	川下に浜益中学校独立する。（黄金中学校と統合による）
昭和26年5月7日	北海道滝川東高等学校浜益分校開校 定時制課程（浜益小学校に間借）
昭和39年1月20日	群別小学校と統合 通称適沢に建てられた新設校「浜益中央小学校」へ移行



茂生学校 扁額

浜益村立浜益(茂生)小学校校歌

作詞：高橋 季雄
作曲：町野 久作

♩ = 110

や ま より い ず る あ さ ひ か げ お
 き べ に し ず む ゆ う ひ か げ う
 み と や ま と の さ ち う け て い
 や さ か え ゆ く は ま ま す に
 ま な ぶ わ れ ら の た の し さ よ

浜益村立浜益(茂生)小学校校歌

作詞 高橋 季雄
作曲 町野 久作

一 山より出ずる 朝日かげ

沖辺に沈む 夕日かげ

海と山との 幸うけて

いや栄えゆく浜益に

学ぶ我らの 楽しさよ

二 治まるみよに 生まれあい

楽しき家に 育まれ

国と親との 恩うけて

いや栄えゆく浜益に

学ぶ我らの 楽しさよ

大正7年5月2日 制定

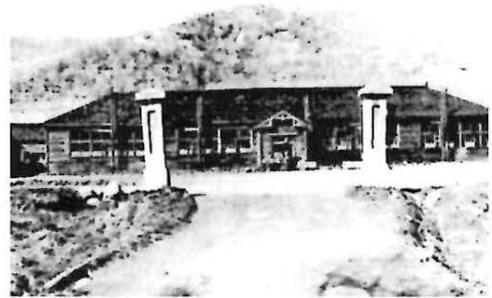
浜益村立群別小学校



制定時期 不明

(制定の趣旨不明)

校下の浜に打ち寄せる波濤で周りを囲み地域産業の要である漁業を表す中心に群別の「群」の字を配しているものと思われる。



【所在地】 浜益村大字群別村595番地15

群別の地名はアイヌ語の「ポンクンベツ」（小さなクンベツ川）に由来する。松前藩時代、ハママシケ場所の鯨漁場であった。群別は明治2年8月より浜益郡8村の一つで同15年には雄冬村と合併し群別村となり明治35年には茂生村と合併し浜益村となる。この時代の群別は鯨の建網、刺網、鮭の建網、海鼠曳、昆布、鮑などの生産が盛んで人口も2,000人を越えていた。住民の教育への関心が高く明治13年には茂生小学校に次ぐ二番目の小学校が群別に開校された。しかし、浜益村においても昭和30年以降のニシンの不漁により人口も減少が続き、遂に浜益小学校と共に閉校し、昭和39年より両校の中間地の適沢に新しく「浜益中央小学校」を創設し統合した。



【沿革】

明治13年7月1日	群別分教所開設	浜益で2番目の学校
明治14年3月1日	群別教育所と改称	児童数 男子17名 女子5名 計22名
明治14年8月25日	校舎新築	建坪24坪（村有志の寄付金による）
明治20年5月	簡易小学校群別学校と改称	児童数 男子34名 女子8名 計42名
明治28年4月1日	群別尋常小学校と改称	（補習科併置 修業年限3年）
明治38年7月	水産農業補習学校併置	（修業年限2年）補習科廃止
明治41年4月	小学校令改正により義務教育6年制	児童数 80余名
大正15年7月1日	青年訓練所令公布により群別訓練所併置	（軍事訓練を主とした）
昭和10年	群別青年学校が併置	（水産農業補習学校も統合）
昭和16年4月1日	群別国民学校と改称	（高等科併置）尋常科122名 高等科42名
昭和22年4月1日	浜益村立群別小学校と改称	（高等科廃止）
昭和22年6月5日	新制中学校開設により群別小学校卒業生は浜益中学校に通学	
昭和23年	校歌制定	
昭和24年6月30日	開校70周年記念式典挙行政	
昭和27年4月1日	児童数163名	4学級編制
昭和34年8月15日	開校80周年記念式典挙行政	
昭和38年12月3日	浜益小学校との統合式典挙行政	
昭和39年1月20日	浜益小学校と統合	通称適沢に建てられた新設校「浜益中央小学校」へ移行 [閉校時児童数 97名] [卒業生総数 1,150名]

浜益村立群別小学校校歌

作詞・作曲：新谷 正一

♩ = 100



あ した に や ま を あ お き っ つ つ
ゆ う べ は う み に ひ た り つ つ じ
ん と ち り ゃ く を や し な わ ん
じ ゆ う く ん べ つ し ょ う が っ こ う

浜益村立群別小学校校歌

作詞・作曲 新谷 正一

一 あしたに山をあおぎつつ

ゆうべは海にひたりつつ

仁と智力を やしなわん

自由 群別小学校

二 古き歴史をせおいつつ

あらたな道をもとめつつ

日ごとにつまん

平和 群別小学校

昭和23年 制定

浜益村立床丹小学校



制定時期 不明



床丹の集落



床丹小学校跡地

【所在地】 浜益村大字群別村字床丹

床丹の地名はアイヌ語の「トクコタン」（土地の出来た処）に由来する。明治4年浜益郡群別村の一字と定められたのが古い記録という。記録によると明治28年には37戸が住み、明治36年のニシン刺網の設置資料によると、床丹はニシンの三漁場があったとされる。明治29年頃床丹では小さな店を経営していた田鎖賢治氏が私塾を開いて「読み・書き」を教えたのが始まりと言われる。本格的には明治40年に幌尋常小学校の床丹分教場として発足された。以来60年の歴史を重ねてきた。

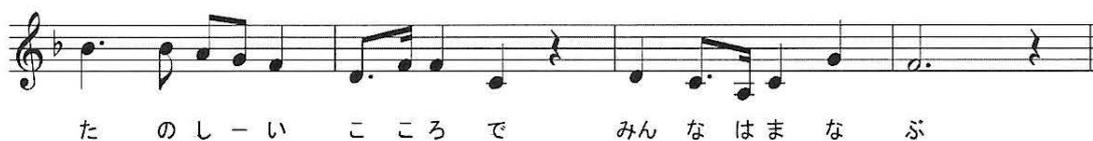
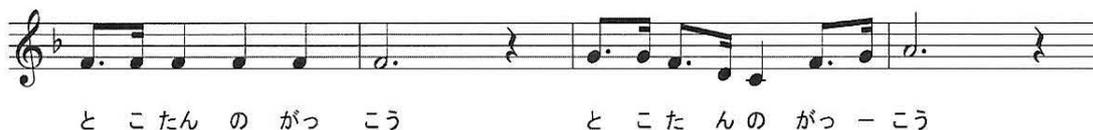
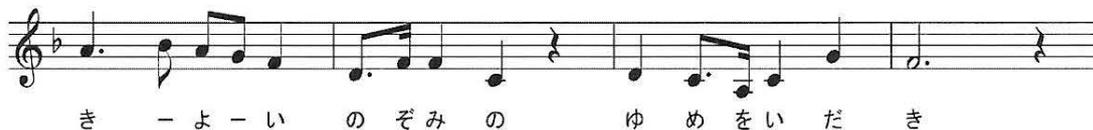
幌から床丹までの国道はそれ以北の難工事区間に先行して昭和35年に開通している。利便性が高まる一方、そのころから人口と児童数の減少が顕著となり、バス通学を条件に幌小学校と統合して閉校し、浜益北部小学校が開校した。

【沿革】

明治40年11月	幌尋常小学校床丹分教場として発足
明治41年	分教場建築 34坪9合1勺
昭和6年	児童数 64名
昭和7年 秋	校舎新築工事着手
昭和8年1月	新校舎完成
昭和8年1月30日	新校舎落成式
昭和16年4月1日	床丹分教場は幌国民学校と分離し床丹国民学校として独立 高等科併置
昭和22年4月1日	浜益村立床丹小学校と改称
昭和22年6月5日	中学生の通学区域は幌中学校となる
昭和26年4月	児童数増加により2学級編制となる 児童数は60名を超えた
昭和32年11月1日	校歌制定
昭和35年～38年	児童数減少する 35年/62名・37年/55名・38年/42名
昭和41年3月31日	床丹小学校閉校 60年の歴史を閉じる [閉校時児童数 不明] [卒業生総数 447名]
昭和41年4月1日	幌小学校と統合 幌に新設された「浜益北部小学校」に移行

浜益村立床丹小学校校歌

作詞：佐々木利男
作曲：池田 正



浜益村立床丹小学校校歌

作詞 佐々木利男
作曲 池田 正

一 大きな空 高い空

清い望みの 夢をいだき
床丹の学校 床丹の学校
楽しい心で みんなは学ぶ

二 ふもとの村 海の村

遠いむかしの あとたぎね
床丹の学校 床丹の学校
益々あらたに みんなは進む

三 はたらく船 浮ぶ船

うねるうしおの 幸をもとめ
床丹の学校 床丹の学校
からだを鍛えて みんなは励む

四 かがやく海 青い海

広い世界の 友をおもい
床丹の学校 床丹の学校
輪に輪を結んで みんなは遊ぶ

昭和32年11月1日 制定

石狩町立生振中学校



制定 昭和23年10月

星型に生振の「生」をかたどり、中央に「中」を配す。



【所在地】 石狩町大字生振村5線北番外地

生振の地名はアイヌ語の「オヤフル」（川尻の丘・次の丘）に由来する。生振6線北には幕末時には石狩アイヌが住んでいた。明治4年に「生振村」が誕生し、同年5月宮城県や山形県からの入植で開村。石狩アイヌの豊川アンノランは未開地の生活に戸惑う開拓民に対し助言と協力をする。明治27年には愛知団体が入植し生振村は大いに開拓が進んだ。戦後の昭和22年学校制度改革により新制生振中学校が開校し生振小学校に併設された。また、参泉小学校には生振中学校参泉分教場が置かれた。

しかし、生徒数の減少に伴い昭和55年3月で33年の歴史を閉じ石狩中学校に統合した。

【沿革】

- 昭和22年5月1日 学制改革に伴い新制中学校として石狩町立生振中学校開校
(認可学級2学級、参泉小に分教場、旧生振小に1学級を置く)
- 昭和23年4月1日 参泉分教場廃止(認可3学級)
- 昭和28年4月1日 新校舎落成 開校式挙行 12月5日 青年学級開設
- 昭和37年4月1日 併置校から脱却し独立校となる。中学校に専任校長を配置
- 昭和42年11月1日 中学校開校20周年記念小中合同学芸会開催
- 昭和43年11月3日 町内中体連籠球大会で女子優勝、男子準優勝
- 昭和51年12月 歩くスキーによる登下校開始
- 昭和52年4月1日 創立30周年を記念して中学校独自の校歌を制定する。
- 昭和52年10月7日 第1回学校統合説明会開く(高岡、石狩、生振3中学校を統合案が示される)
- 昭和53年2月6日 STV特集番組「もやしっ子を鍛えよう」で全道に紹介される。
- 昭和54年7月23日～24日 閉校記念ニセコアンヌプリ登山実施(「道新」報道)
- 昭和55年3月22日 生振中学校閉校記念式典並祝賀会挙行
- 昭和55年3月31日 閉校 [閉校時生徒数 55名] [卒業生総数 914名]
- 昭和55年4月1日 高岡中学校とともに新生「石狩中学校」に統合
- 平成2年11月18日 生振開村120年記念事業として生振中学校統合記念碑「悠久」を建立
「生振中学校同窓生一同・生振開村百二十年記念事業協賛会」

石狩町立生振中学校校歌

作詞：石川 徹
作曲：岡崎 豊治

幅広 ゆったりと
mf

お お - い な - る か わ と う と う と み

ど り の き ぎ は と も を よ び ひ

cresc. *f*
ろ い こ こ ろ を つ ち か え る わ

れ ら お や ふ る ち ゆ う が っ こ う

石狩町立生振中学校校歌

作詞 石川 徹
作曲 岡崎 豊治

一 大いなる河 とうとうと

緑の樹木は友を呼び

広い心を培える

われら 生振中学校

二 原始の森は風に耐え

雪原の道 はるかなり

強い身体を鍛えたる

われら 生振中学校

三 嶺に流れる 雪白く

悠久の空 青々と

真理を求め学びたる

われら 生振中学校

昭和52年4月1日 制定

石狩町立花川中学校



制定時期 不明

・花畔の地名にあやかり、日本を代表する桜の花びらは清楚をあらわす。
・小さく配している葉は真理を求め大きく育つ願いを
・母校のそばを流れる石狩川の大自然の上に「花中」の文字を配す。



【所在地】 石狩町大字花畔村583番地2（現在 石狩市花川北6条1丁目42番地）

旧花川中学校は昭和22年4月、教育制度の改革により新制中学校として開校された。当初は花川小学校の校舎に併置された。昭和40年代になると校下地区は水田・酪農地帯から一挙に札幌に隣接する新興住宅地と変化し、急激な人口の増加により生徒数も増えたため昭和53年4月には花川南中が開校され、生徒は移籍した。さらに昭和55年4月には花川北中学校が開校し生徒が移籍した。昭和61年12月、マンモス化した花川北中学校の生徒を花川北中からの一部分離し、生徒減少の花川中との統合し新生「花川中学校」を花川北4条1丁目2-1に設置することが決まった。校舎の一部は石狩市公民館として使用されている。

【沿革】

- 昭和22年3月31日 学制改革に伴い新制中学校として花川中学校設置決定
校舎は花川小学校に併設され、通学区は花川・南線・志美各小学校とする
- 昭和28年8月8日 校歌制定
- 昭和35年12月21日 中学校校舎第一期工事竣工により、小学校校舎より新校舎に移転
- 昭和36年12月22日 校舎第2期工事落成（体育館 普通教室1 技術室 職員室 宿直室 便所）
- 昭和40年4月30日 イタリアンポプラ200本植樹
- 昭和42年11月12日 開校20周年記念式挙行
- 昭和46年1月18日 花川中学校生徒憲章制定
- 昭和47年7月31日 第二線校舎普通教室増築工事完了
- 昭和52年10月2日 開校30周年記念式挙行
- 昭和53年4月1日 花川南中学校の開設に伴い、本校より花川南・樽川地区の生徒が移籍する
- 昭和55年4月1日 花川北中学校の開設に伴い、本校より花川南・樽川地区の生徒が移籍する
- 昭和56年12月18日 花川中学校校舎建設促進の陳情採択（石狩町議会）
- 昭和61年12月20日 町議会本会議において花川北中一部分離と同時に花川中との統合が可決
- 昭和62年1月16日 花川中学校閉校式・開校40周年・閉校記念事業協賛会設立準備会・総会開催
- 昭和62年3月13日 第40回卒業証書授与式 [旧花中最後の卒業生 55名]
- 昭和62年3月22日 花川中学校閉校式及び40周年・閉校記念式挙行 [卒業生総数 2,902名]
[閉校時生徒数 137名]
- 昭和62年4月1日 新生「花川中学校」へ移行 [2年生 41名 3年生 41名]

石狩町立花川中学校校歌

作詞・作曲：筒井 秀武

♩=92~104

mf

て いね は る け く く も さ け て き ぼ う の あ さ は
あ け そ め め い ざ や と も た か ね あ お ぎ て
こ え あ げ よ あ た ら し き よ き - つ く
る は わ れ ら - い ざ う た え
は な か わ そ わ れ ら か ぼ こ う -

石狩町立花川中学校校歌

作詞・作曲 筒井 秀武

一

手稲はるけく 雲さけて
希望の朝は 明けそめぬ
いざや友
高嶺仰ぎて 声挙げよ
新しき世を 創るは我等
いざ謳え 花川ぞ 我らが母校

二

ここ石狩に 緑萌え
かがやく若き 生命あり
いざや友
学びの道に 進むべし
行く手の茨 踏みしだかむ
いざ謳え 花川ぞ 我らが母校

三

流るる水の はて知らず
永遠の真理を 想うなり
いざや友
手を取り合いて 花川の
清き理想に 心すまさむ
いざ謳え 花川ぞ 我らが母校

昭和28年8月8日 制定

石狩市立厚田中学校



・六角は雪で、本道を示し親子波三つを
組み合わせ、海と協和を表徴している。
・中の●印は、知恵の実にちなみ、学問
の向上を示す。



制定 昭和22年6月5日

【所在地】 石狩市厚田区厚田109番地2

厚田の歴史は松前藩時代にアツタ場所が置かれニシンとともにあった。明治時代から戦後にかけても厚田はニシンの豊漁が続きおおいに栄えた。厚田には各方面での優れた指導者が集まり、子母澤寛はじめ多くの著名人を輩出しており、文化の発展にも大きな影響を与えている。

戦後の教育改革により昭和22年5月に厚田中学校が創設された。平成17年厚田村は合併により石狩市厚田区となったが、厚田中学校は地域の中心校として特色ある経営の下、多くの卒業生を社会に送り出してきた。しかし、ニシンが不漁となった昭和30年代から厚田の人口減少が進み、生徒数も激減し、遂に令和元年度を最後に73年の歴史を閉じることになった。令和2年度からは厚田小学校と統合され義務教育学校として小中一貫教育を取り入れた「石狩市立厚田学園」として新たにスタートした。

【沿革】

昭和22年5月1日 北海道厚田郡厚田村立厚田中学校創設
昭和22年5月20日 厚田小学校に併設で開校 本校3学級編制
古潭村に分校を設置 1学級編制
昭和24年11月1日 発足村に分校を設置 発足小学校に併置
昭和26年秋 校歌制定
昭和26年12月1日 厚田村106番地に独立校舎を新設、移転
昭和30年9月30日 古潭分校廃止（厚田村立古潭中学校独立）
昭和32年10月1日 発足分校廃止（厚田村立発足中学校独立）
昭和41年8月25日 屋内体育館新築落成（PTAより紅白幕5張寄贈）
昭和42年10月22日 開校20周年記念式典挙行
昭和44年11月1日 第14回学研教育賞受賞（道德教育）
昭和46年8月20日 発足中学校と統合
昭和49年8月24日 校舎改築落成
平成4年7月25日 第1回門前町子ども親善大使派遣
平成9年9月14日 開校50周年記念式典挙行 校庭に「学 是即人生也」の碑建立
平成19年4月1日 望来中学校閉校により統合する
令和2年3月31日 厚田中学校閉校 [閉校時生徒数 22名] [卒業生総数 2,256名]

石狩市立厚田中学校校歌

作詞：鈴木 藤吉
作曲：熊谷 敬信

♩=90 雄大にして明るく

ほし かげ きよき きたーの そら に ほんか
いーに のぞむーところ みらい あれ このまなび
や か ようものー つねに た だ し く
し んりー の みち きわめ なん あつーた
ちゆ が く さ か え あ れ さ か え あ れ あ れ

<p>三</p> <p>厚田中学 まことの道に 栄えあれ栄えあれ</p>	<p>二</p> <p>厚田中学 力を合わせ 進まん 栄えあれ栄えあれ</p>	<p>一</p> <p>厚田中学 真理の道 究めなん 栄えあれ栄えあれ</p>	<p>石狩市立厚田中学校校歌</p> <p>作詞 鈴木 藤吉 作曲 熊谷 敬信</p>
--	---	---	---

星影清き 北の空
日本海に 臨むところ
未来あれ この学び舎
通うもの 常に正しく
幾世代を うけつぎて
健てし平和の 理想郷
未来あれ この学び舎
通うもの 常に雄々しく
浜の白砂 みどりの丘
繁る文化の 森のかげ
未来あれ この学び舎
通うもの 常に明るく
昭和26年秋 制定

石狩市立望来中学校



制定 昭和32年3月1日

雪の結晶を基本に望来の文字を図案化し円満な人格をめざし学究してやまない望来中学校生徒の生き方を表している
色彩：いぶし銀 黒字に白文様
中のみ金文字



【所在地】 石狩市厚田区望来96番地1

望来はアイヌ語の「ムライ」（河口が塞がっている遅い川）に由来する。明治4年4月、庄内より14戸45人が移住したのに始まる。その後、明治6年には南部団体、明治18年には山口県団体、明治27年には石川県団体が移住し開拓が行われてきた農村地域である。中学校は開校当初は望来小学校に併置されていたが2年後に新校舎が落成し独立した。幾度も正利冠川の氾濫によって校舎が浸水を受けた記録がある。望来空襲を演劇化、大型紙芝居づくり、望来獅子舞のルーツを調査し、研究をまとめ、地域保存会の指導を受け郷土芸能活動として全校生徒が取り組んできた。これらの活動は統合した厚田中学校へ引き継がれた。

【沿革】

昭和22年5月	新制厚田村立望来中学校として開校 望来小学校に併置
昭和27年10月	新校舎落成し独立校となる
昭和35年3月15日	校歌制定
昭和44年12月	冬季スクールバス運行開始
昭和58年11月	石狩管内視聴覚教育研究大会開催（望来獅子舞初披露） 以降諸々の機会に発表
昭和59年2月	文部省勤労生産学習研究発表（石狩管内教育実践奨励賞受賞）
昭和62年8月	NHK「中学生日記」生徒全員が出演
平成2年4月1日	古潭中学校閉校により本校に統合 3学級編制
平成4年7月	厚田村「子供門前親善大使」派遣開始
平成12年2月	校内LAN完成（インターネット環境整備）
平成12年11月	博報賞（伝統文化教育部門）受賞
平成13年6月	望来中学校ホームページ公開開始
平成15年11月	農林水産業体験フォーラムin秋田参加（北海道代表 生徒体験発表）
平成18年3月31日	望来中学校閉校 厚田中学校に統合 [閉校時生徒数 16名] [卒業生総数 1,444名]



石狩市立望来中学校校歌

作詞・作曲：関村 寿

明るく 雄大に

mf

あ さ ぎ り は ー れ て さ わ ー や か に ー ま

す み の あ お そ ら は ー る ー ば る と ー き ぼ う と か

f

さ す は ー な き ー よ ー く ー の び ゆ ー く わ か ー き い

cresc.

の ー ち あ り ー つ ー ま ー ん ー こ こ ろ の お し ー え ぐ

f

さ ー つ き せ ぬ よ ろ こ び わ ー が ー ぼ こ う

石狩市立望来中学校校歌

作詞・作曲 関村 寿

- | | | |
|--|---|---|
| <p>一
朝ぎり晴れて さわやかに
真すみの青空 はるばると
希望とかざす 花清く
伸びゆく若き 命あり
積まん心の 教え草
尽きせぬ喜び 我が母校</p> | <p>二
旗雲なびく 海原に
高嶺にのぞみ かがやかし
理想とかざす 道拓く
こぞりかがよう 若みどり
進まん力の わくところ
絶えせぬ喜び 我が母校</p> | <p>三
黄金の波うち 磯辺のほとり
文化の泉 わきいでし
光とかざす 歌声は
きよく心に ひびき合う
学ばん共に 手をとりて
尽きせぬ喜び 我が母校</p> |
|--|---|---|

昭和35年3月15日 制定

浜益村立幌中学校



制定 昭和48年

(制定の趣旨不明)

全体を縁起の良い八角形の鏡をデザインし中央に大きく「中」の字を配し、それを波の形で下から包んでいるものと思われる。



【所在地】 浜益村大字群別村字幌161番地

幌の地名はアイヌ語の「ポロクンベツ」（大きな・川）に由来する。松前藩時代の寛政8年（1796）ハママシケ（浜益）に運上屋が置かれポロクンベツには番屋が建てられたのが記録に出てくる最初である。幌の地は茂生に次ぐ繁栄の地であった、戦後の新学制により開校した中学校は浜益、黄金、幌の3中学校であった。幌は昭和30年以降鯨漁の衰退によって鯨番屋も消え人口減少も続き幌中学校の生徒数も減り平成11年4月には52年間の歴史を閉じ浜益中学校に統合された。

幌中学校はこれまで幌豊漁太鼓、りんご栽培、浜清掃など特色ある教育活動を実践してきた。

【沿革】

- 昭和22年6月6日 新制浜益村立幌中学校開校 幌小学校に併置
(通学区域は室蘭沢・幌・床丹・千代志別)
- 昭和25年4月 浜益中学校幌分校となる
- 昭和27年4月 千代志別に浜益中学校の分校設立許可
- 昭和29年4月1日 浜益中学校幌分校廃止 浜益村立幌中学校と独立する
- 昭和40年4月1日 千代志別中学校が廃止 幌中学校に統合する
寄宿舎新築落成
- 昭和40年4月1日 幌小学校閉校、北部小学校開校による校舎移転で、専用校舎となる
- 昭和42年 開校20周年記念式 校歌制定
- 昭和48年 校旗制定
- 昭和61年 幌豊漁太鼓振興保存会の太鼓5基を学校で保管管理し、教育活動に活用
- 昭和63年 「りんご栽培、即売体験活動」を始める。以後、閉校まで続く
- 平成元年 第44回はまなす国体大会旗・炬火リレー出発式において幌豊漁太鼓を演奏
以後、特色ある活動として、閉校まで各種行事の際に演奏する
- 平成3年8月 村内2年生ハワイ研修旅行実施され参加
- 平成9年 閉校記念事業協賛会設立総会実施
- 平成10年 小中合同で閉校記念事業大運動会・学芸会実施
閉校記念式典・惜別の会実施
- 平成11年3月31日 幌中学校閉校 [閉校時生徒数 12名] [卒業生総数 1,250名]
- 平成11年4月 浜益中学校へ統合

浜益村立幌中学校校歌

作詞：佐々木与吉
作曲：渡部道三郎



た かく そ び える しよ かん べ つ な が れ る
み ず も き よ ら か に い ー だ く た い し に
ま ゆ あ げ て め ぐ み ゆ た ー か ー に
の び る わ れ ら あ か る く さ と く そ だ ち ゆ
く は ま ま す ほ ろ の ち ゆ う が っ こ う

浜益村立幌中学校校歌

作詞 佐々木 与吉
作曲 渡部 道三郎

一

高くそびえる 暑寒別
流れる水も きよらかに
いだく大志に まゆあげて
恵み豊かに のびるわれら
明るく聴く 育ちゆく
浜益幌の 中学校

二

潮路はるかな 日本海
寄せくる波も おごそかに
みなぎる力 腕にこめ
行手の星に 誓うわれら
正しく強く 進みゆく
浜益幌の 中学校

三

光あふれる 北の国
緑の風も さわやかに
世紀のねがい 胸に秘め
久遠の栄え になうわれら
大きく高く 築きゆく
浜益幌の 中学校

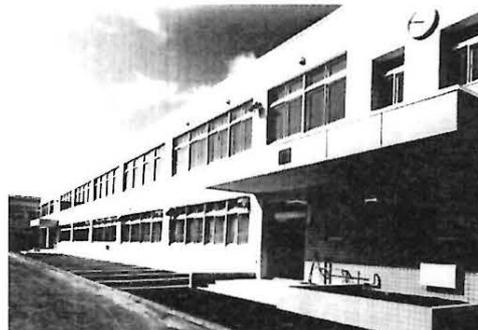
昭和42年 制定

北海道浜益高等学校



制定 昭和29年

・六角形：自然環境の厳しい浜益を雪の結晶の形で表徴し、浜益の頭文字ハを兼ねる。
・内内円：厳しい環境の中にあっても一丸融合による揺るぎない大志と飛躍を表し、外周のハとあわせ浜益の二文字のマを円周に配して浜益高校であることを表す。
・中央の上下：上に豊饒の稲穂、下に漁業の恩恵が深い波と荒波を凌駕する不屈の精神を表徴。



【所在地】 石狩市浜益区浜益50番地22

松前藩時代から重要なニシン漁場として栄えていた旧浜益村は、次世代を担う有為な人材の育成を願う地域住民が「浜益村の子どもたちに高等教育を」という切なる思いの高まりを受け、昭和26年に道立 滝川東高等学校浜益分校として開設されたのが始まりである。最初は村立の昼間季節制定時制という四年生の高等学校としてスタートした。当時は「漁繁休業」と称してニシン漁の手伝いのための休業日を設けるなど特色ある経営がなされていた。その後、地域住民や教育関係者の願いが実り、昭和48年、全日制普通科の高校となり、昭和57年には待望の道立移管となった。しかし、地域産業のニシン漁の衰退後、人口減少を止められず、遂に60年間の歴史を閉じることになった。

【沿革】

昭和26年5月7日 北海道滝川東高等学校（現滝川高）浜益分校として開校 定時制課程
普通科1学級設置 第1学年28名 浜益小学校校舎を間借
昭和27年4月 漁繁休業開始（ニシン漁繁忙のため） 昭和33年まで実施
昭和27年11月1日 北海道浜益村立北海道浜益高等学校と改称（第2種高等学校）
昭和34年9月21日 援農休暇開始（その後春季と秋季に実施 昭和48年度まで続いた）
昭和35年9月23日 校歌制定
昭和36年4月1日 生徒急増対策 道立移管運動開始
昭和39年1月1日 浜益小学校統合校舎移転のため専用校舎となる
昭和39年4月1日 普通科1間口増設認可（2間口となる）
昭和41年4月1日 商業科1間口開設普通科1間口減
昭和48年4月1日 全日制課程普通科2間口認可（定時制課程普通科、商業科募停）
昭和54年11月21日 新校舎落成（鉄筋コンクリート2階建）
昭和57年4月1日 道立移管 北海道浜益高等学校と改称
平成21年度 生徒募集停止
平成23年3月31日 浜益高等学校閉校 60年の歴史を閉じる
[第57回卒業生 1名] [卒業生総計 2,097名]

【校訓（実践目標）】 「けじめとねばり」

北海道浜益高等学校校歌

作詞：小田 観蜚
作曲：中川 則夫

♩ = 116 律動的に快適に

mf

み あ げ よ あ おぞら か が や く ひ ざ し

く に に ぞ い き - つ つ み が く ち と と く

f

け わ し き み ち - い く な に い と わ ん や

mf

ま な び や は ま ま す い く と せ か け て

た ゆ ま ぬ ど り よ - く に ま ゆ ね ぞ あ が る

北海道浜益高等学校校歌

作詞 小田 観蜚
作曲 中川 則夫

一 見上げよ蒼空 かがやく日ざし

国にぞ生きつつ みがく智と徳
嶮しき道行く 何いとわんや

学び舎浜益 幾とせかけて
たゆまぬ努力に 眉根ぞ上がる

二 見わたせ海原 果てなき眺め

希望に生きつつ いそしむ勤め
世に立つ荒波 何いとわんや

学び舎浜益 四とせをここに
はるけき行く手に 眉根ぞ上がる

三 継ぎ行け一村 自立のたつき

おのれに生きつつ 協する力
苦難の山坂 何いとわんや

学び舎浜益 一世をかけて
きたへむ覚悟に 眉根ぞ上がる

昭和35年9月23日 制定

石狩町立若生小学校



石狩役所絵図



【所在地】 石狩町大字八幡町字若生町 1 番地 2

若生の地名はアイヌ語で「ワッカオイ」（飲み水のあるところ）に由来する。

安政2年、幕府は再び蝦夷地を直轄し、安政2年石狩役所を設置、安政5年には石狩改革が行われた。

石狩役所は本町地区にあったが、安政6年ワッカオイ（若生）に移された。安政5年にはこの地に八幡神社が創立している。明治に入り石狩役所の役割を終え、八幡神社も明治7年本町地区に移設された。

明治19年6月、石狩役所跡地に石狩小学校若生分校が建てられたのが最初である。誇り高い文教の地で昭和26年までの65年間、若生小学校は石狩川右岸地区の教育の中心となり、子ども、青年等の教育、文化面で重要な役割を果たした。昭和26年発泉小と統合し翌27年新たな石狩町立石狩東小学校に統合された。

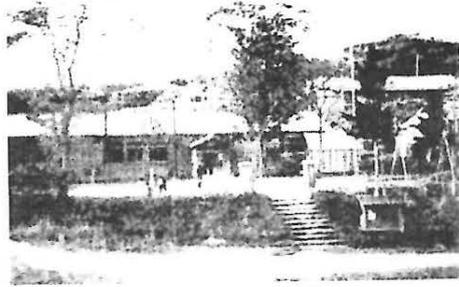
【沿革】

- 明治19年6月20日 民家を使用し石狩小学校若生分校として創立する 4学年で単級
(この間、明治38年頃まで樺太アイヌの子弟が籍を置いていたようだ)
- 明治36年4月 若生尋常小学校として石狩尋常小学校から独立する
- 明治41年4月1日 義務教育6学年延長に伴い5学年増設、5学年単級
- 明治41年10月 石狩尋常高等小学校若生分教場として独立
- 大正12年4月1日 若生尋常小学校として独立する
- 大正8年9月1日 3学級編制となる (1・2年 3・4年 5・6年)
- 昭和6年4月1日 児童減少のため2学級編制となる
- 昭和16年4月1日 若生国民学校と改称する 3学級編制
- 昭和17年4月 高等科が併置となる 4学級編制
- 昭和22年4月 若生小学校と改称する 3学級編制
- 昭和24年4月 4学級編制となる
- 昭和26年12月31日 閉校 [閉校時児童数 159名] [卒業生総数 561名 明治37年以前不明]
閉校後は発泉小学校とともに新設「石狩東小学校」へ移行する。

【校歌制定】 当時の教員、児童の話によると校歌はなかった。

石狩町立八の沢小学校

校章不明



校地跡に校門が残る

【所在地】 石狩町大字八幡町字シラトカリ615番地1

平成12年10月、八の沢小学校跡地に「石狩油田八の沢鉱業所跡」碑が建てられた。碑文にはその歴史が記されているので紹介する。「碑文 安政5年（1858）厚田望来の海浜で石油の湧出を確認 明治12年（1879）春別で試掘。採掘に数々の困難を窮め採算及ばず 後に日本石油株式会社に譲渡され 昭和初期の最盛期には油井数188坑 年間産油量 約一万キロリットル、従業員250余名の活況を呈した その後帝国石油株式会社に引継ぐが油量激減 北宝石油鉱業株式会社に継承 昭和35年（1960）8月 採掘を廃止し採掘から81年の歴史を閉じた」

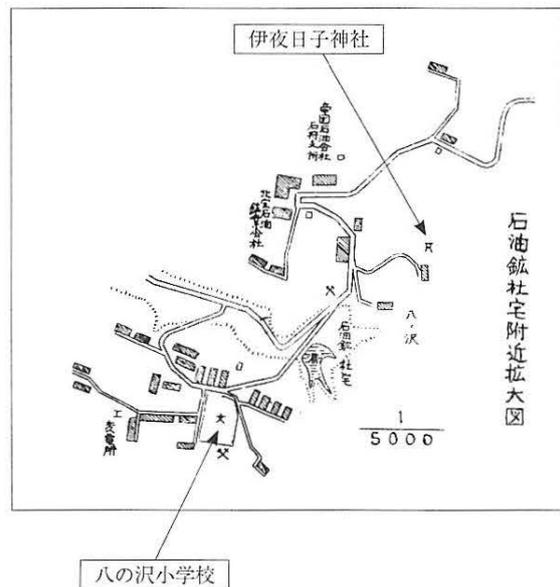
当所八の沢の子ども達は4キロの道程を五の沢小学校まで通学していたが、鉱業所の最盛期にあたる昭和2年に五の沢尋常小学校八の沢特別教授所が開設されたのが最初であった。それから35年の歴史を重ねたが鉱業所が採掘を廃止したのに伴い学校も閉校された。

【沿革】

- 昭和2年1月17日 五の沢尋常小学校八の沢特別教授所として開校
- 昭和16年4月 八の沢国民学校と改称
- 昭和23年9月1日 八の沢小学校として独立
- 昭和37年3月19日 最後の卒業式挙行
- 昭和37年3月31日 閉校 [閉校時児童数 4名]
- 昭和37年4月1日 児童は五の沢小学校に移籍
児童は寄宿舎から通学



最後の卒業式（卒業生1人）



石狩町立参泉小学校

校章不明



昭和5年頃の校舎

【所在地】 石狩町大字生振村3線南6番地

生振村3線には「参泉小学校」があった。この地は明治26年に殖民地区画が設定された後の明治27年に愛知団体56戸、320人が入植したのが始まりである。入植者の間では子弟の教育の事が協議され、明治28年に建てられた伏籠神社の社地内にかやぶき掘って立て小屋の寺子屋が建てられた。

伏籠神社地にはハルニレ（アカダモ）の一本木（現在で推定約350年）が立っていて、3線の道路を行き来する人の目印となっていた。現在、北海道開拓記念保護樹に指定され生振のシンボルツリーである。

明治29年生振村に公立小学校が誕生したが、遠距離のため分教場設置の要望が住民からおこり、明治36年生振小学校の分教場として開校された。独立校等の歴史を重ねた後、昭和28年生振小学校に統合された。

【沿革】

- 明治36年4月 生振小学校参泉分教場として始まる
- 明治37年1月15日 参泉尋常小学校と改称（校長は生振小学校長が兼任）
- 明治41年9月16日 日露戦争後の財政難のため再び生振小学校参泉分教場となる
- 明治45年6月13日 参泉尋常小学校として認可独立
- 昭和4年4月1日 参泉青年訓練所が生振管轄から分離設置された
- 昭和6年 生振青年学校に吸収される
- 昭和10年 参泉青年学校と改称
- 昭和16年4月1日 参泉国民学校と改称
- 昭和22年4月1日 石狩町立参泉小学校と改称 児童数122名
- 昭和28年3月31日 参泉小学校閉校 「生振小学校」へ統合
[閉校時児童数 105名]
[卒業生総数 532名]
- 平成2年11月18日 参泉小学校跡地に「愛郷」の碑建立



伏籠神社とハルニレの木



【校歌制定】 卒業生に確認したところ、校歌はなかった。

厚田村立安瀬小学校



校章不明

【所在地】 厚田村大字厚田村字安瀬 8 番地 6

安瀬の地名はアイヌ語の「ヤソシュケ」（陸の崩れたところ）に由来する。安瀬は明治初年から明治35年まで厚田郡安瀬村と称され鯨漁場が置かれていた。この安瀬で文久3年8月10日に生まれたのが後に全道屈指の大網元と称された佐藤松太郎である。松太郎は厚田に電灯をひいたり、厚田小学校建築に多額の寄付を投じたり公共事業にも貢献し、北海道議員にもなった。もう一人、大正9年に安瀬に生れ、安瀬小学校に入学し、6年生の時母を亡くしたため厚田小学校に転校したが、大相撲界に入り昭和29年に第43代横綱になった吉葉山（本名池田潤之輔）がいる。安瀬の小さな集落から二人の大きな著名人が出ている。安瀬は農業耕作地も少なく鯨漁が中心であったが昭和30年頃からの鯨漁の衰退とともに児童数も減少し学校は廃校となった。

【沿革】

明治18年 6月	厚田小学校安瀬分校として開校する 民家を使用する
昭和25年 7月	安瀬尋常小学校として独立 児童数32名
昭和29年 2月	補習科設置 5月 山崩れにより校舎大破、休校4か月
昭和41年 9月	厚田尋常小学校安瀬分教場と改称 昭和13年まで
昭和16年 4月	安瀬国民学校と改称
昭和22年 4月	厚田村立安瀬小学校と改称
昭和26年 9月	校舎増改築
昭和27年 7月	2学級認可
昭和28年	2学級 児童数46名
昭和34年	校舎老朽化により増改築（63.5坪）
昭和37年	2学級 児童数42名
昭和42年	安瀬小学校閉校 「厚田小学校」へ統合 [閉校時児童数22名] [卒業生総数 不明]



佐藤松太郎



43代横綱 吉葉山

【校歌制定】 卒業生の話によると、校歌はなかった。行事の際などにはベートーヴェンの第九交響曲「歓喜の歌」を歌っていた。

浜益村立幌小学校

【所在地】 浜益村大字群別村字幌942番地2

幌はアイヌ語の「ポロクンベツ」（大きな川）に由来し、間宮林蔵が樺太探検後の文政5年（1822）頃に作成した地図にホロクンベツの表記がある。安政5年（1857）に松浦武四郎が幌川を渡ったという記述もある。松前藩時代からハママシケ場所が置かれ、漁番屋のあったところである。安政4年に幕命で場所請負人伊達林右衛門が私費を投じて開鑿した増毛山道の入口がある。明治に入ってから、幌はニシン漁場として栄え、商店が海浜に連立し、巡査駐在所、寺院説教所等があり、茂生に次ぐ繁栄の地で人口も多かった。明治29年の茂生警察分所の調べでは人口758名、昭和23年の人口統計では1402人を数え、村内一の人口を抱えていた。漁業に次ぐ幌のもう一つの産業は果樹栽培であった。開拓使が積極的に奨励するために、明治10年に配ったりんごなどの苗木が、温暖な気候が適合して果樹栽培が盛んに行われるようになった。



昭和30年頃の幌の風景

幌小学校は、浜益で三番目に開設された幌簡易小学校が始まりである。校舎は住民の拠金によって建設された。その後、児童数が増加し、明治27年には86名となったため、翌年、校舎増築を行い、2学級制として修業年限3か年となった。明治38年には、水産農業補習学校を併設した。明治41年から6年制が実施されると、学校が狭くなり、明治44年には新校舎を建築した。その後、制度変遷によって校名が変更していった。昭和22年に浜益村立幌小学校となった。昭和30年以降の鯨漁の衰退によって、隆盛を極めていた鯨番屋も消えて、地域の人口は減少していった。昭和41年に、床丹小学校と統合することとなり、その際に、幌小学校はその歴史を閉じ、浜益北部小学校として新たに開校することになった。

【沿革】

明治23年9月	幌簡易小学校の設立認可（児童数29名）
明治27年	校舎増築（教室15坪1室 25坪1室 その他 合計65坪）
明治28年4月	幌尋常小学校と改称
明治38年	水産農業補習学校を併設
明治40年4月1日	幌尋常小学校床丹分校設置
明治44年11月	校舎新築（20坪教室4室、その他、合計183.5坪）
昭和4年4月1日	幌尋常高等小学校開設。（通学区域は幌、床丹、千代志別）
昭和16年4月1日	浜益村立幌国民学校と改称 床丹分校が独立校に昇格したため 通学区域が幌のみになる
昭和22年4月1日	浜益村立幌小学校と改称
昭和22年6月6日	浜益村立幌中学校開校・併置
昭和40年9月31日	床丹小学校が幌小学校と統合
昭和40年10月1日	床丹小学校と統合 幌に新設された「浜益北部小学校」に移行 [卒業生総数 2,078名]

【校歌制定】 幌小学校卒業生に確認したところ、校歌はなかった。

廳立来札尋常小学校



石狩の樺太アイヌ



樺太アイヌの碑
(八幡墓地)

【所在地】 石狩町大字八幡町字来札（番地不詳）

来札の地名はアイヌ語で「ライサツ」（死んで干し上がった川）に由来する。来札は明治時代における樺太アイヌの歴史と関わりがある。平成14年9月、八幡墓地に建立された「樺太アイヌの碑」によると、「明治8年（1876）、日本とロシアが調印した樺太・千島交換条約によりロシア領になった樺太南部のアイヌの人たち108戸、841人を北海道に移住させることになり、最初に江別対雁に土地を与え開拓させようとしたが、漁業や狩猟を仕事としてきた樺太アイヌの人たちには馴染めず、まもなく石狩の来札に移り、石狩や厚田で鮭や鯊魚に取り組んだ。ところが、明治13年に流行したコレラや明治19年に流行した天然痘で多くのアイヌの命が喪われた。明治38年、日露戦争後、日露講和条約により樺太南部は再び日本の領土となり樺太アイヌの人々は帰還することになった。」と記されている。

明治18年、江別対雁より来札に移転した児童は男22名、女2名という。樺太アイヌの児童に対する教育に関する十分な資料は少ないが、若生小の記録によると樺太アイヌの児童は明治19年に開設された石狩小学校若生分校に籍を置いている。（一部は厚田小学校にも籍を置いたという）

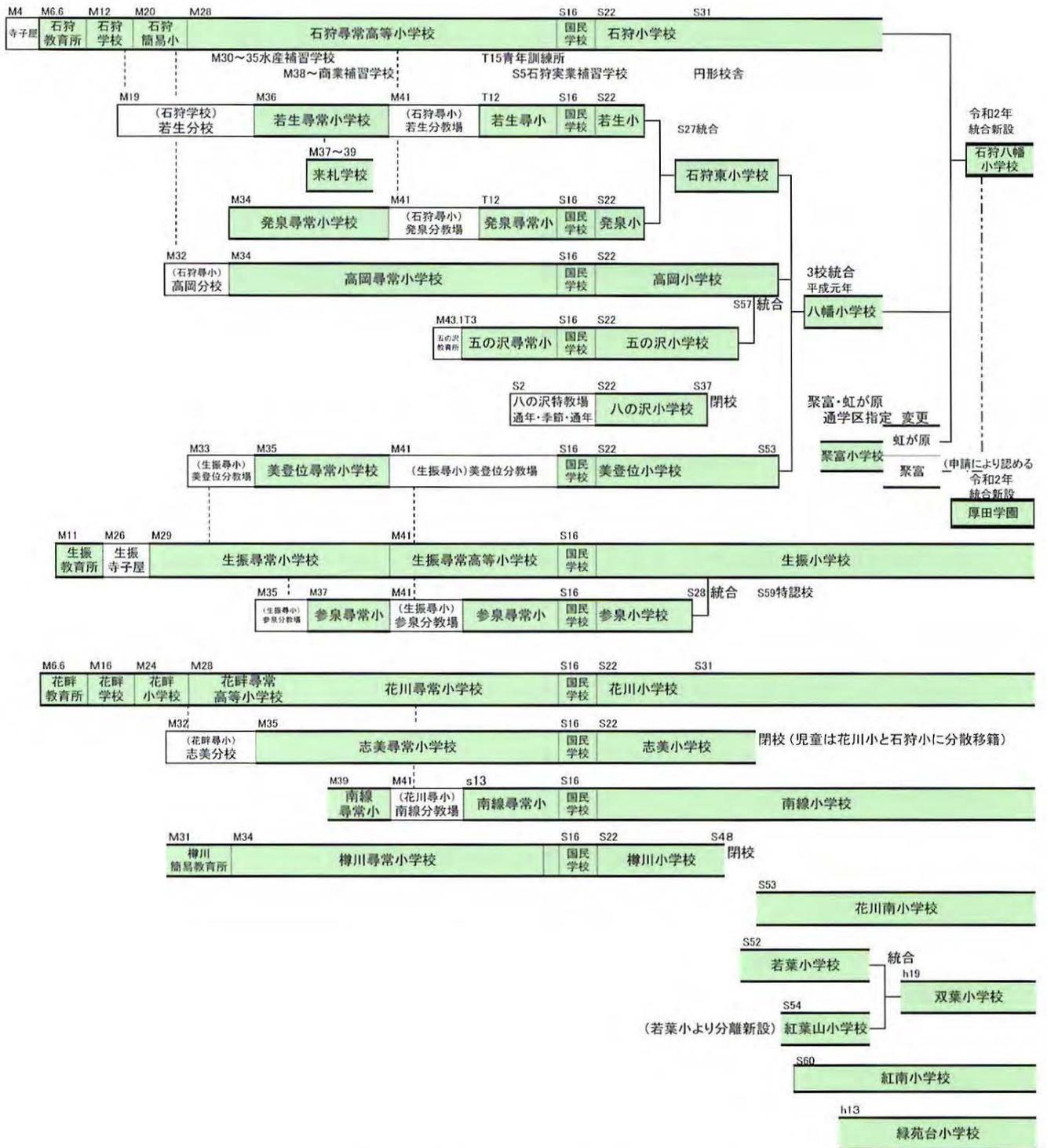
その後、明治38年の日露講和条約により来札の樺太アイヌは南樺太に帰還したため、「アイヌ学校廳立来札尋常小学校」は開校後2年後の明治30年に閉校された。

【沿革】

明治19年	樺太アイヌの児童は石狩小学校若生分校籍を置く（一部は厚田小学校に置く）
明治22年	樺太アイヌの児童は男子30名、女子2名、計32名
明治26年	樺太アイヌの児童は男子22名、女子2名、計24名 この年までに5名が卒業。
明治37年	樺太アイヌの児童のために廳立来札尋常小学校が建てられる 20名が若生尋常小学校から分離される。 在校生数 男19名 女10名 計29名
明治38年	在校生数 男15名 女11名 計26名
明治38年9月	日露講和条約締結
明治39年10月	樺太アイヌのほとんどが樺太に帰ったため閉校する
明治43年1月11日	五の沢教育所開設に当り、閉校した廳立来札尋常小学校の校舎を移築した

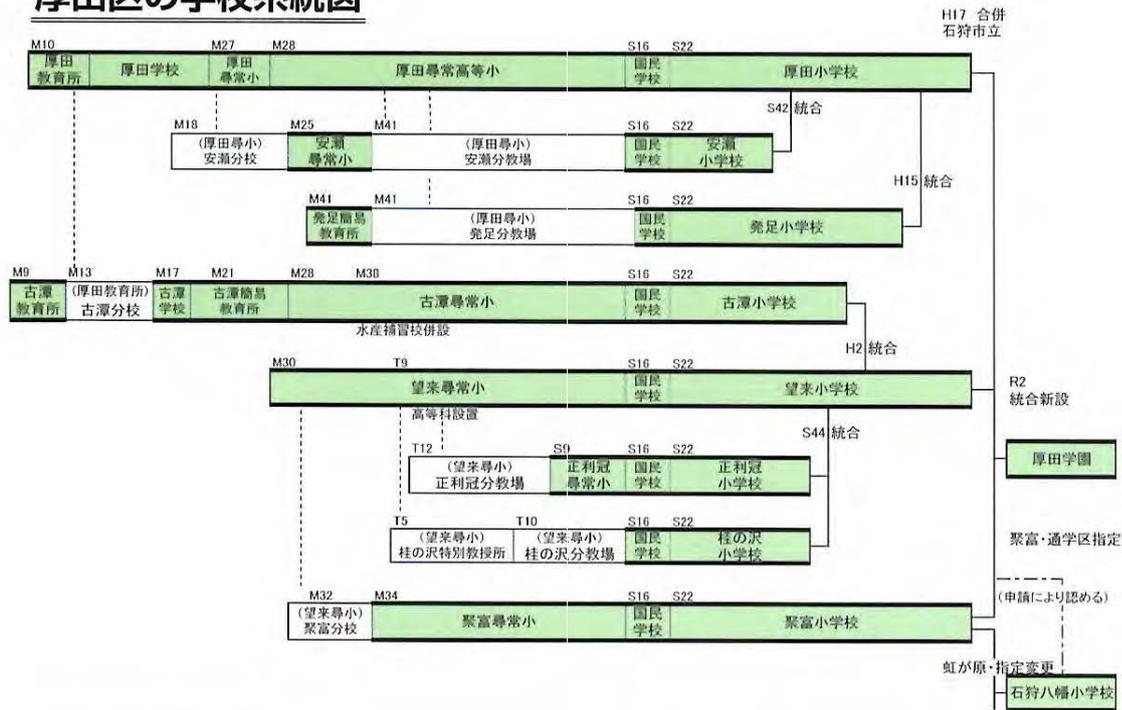
【校歌・校章】 明治という時代を考えると校歌、校章はなかったと思われる。

旧石狩市地区の学校系統図

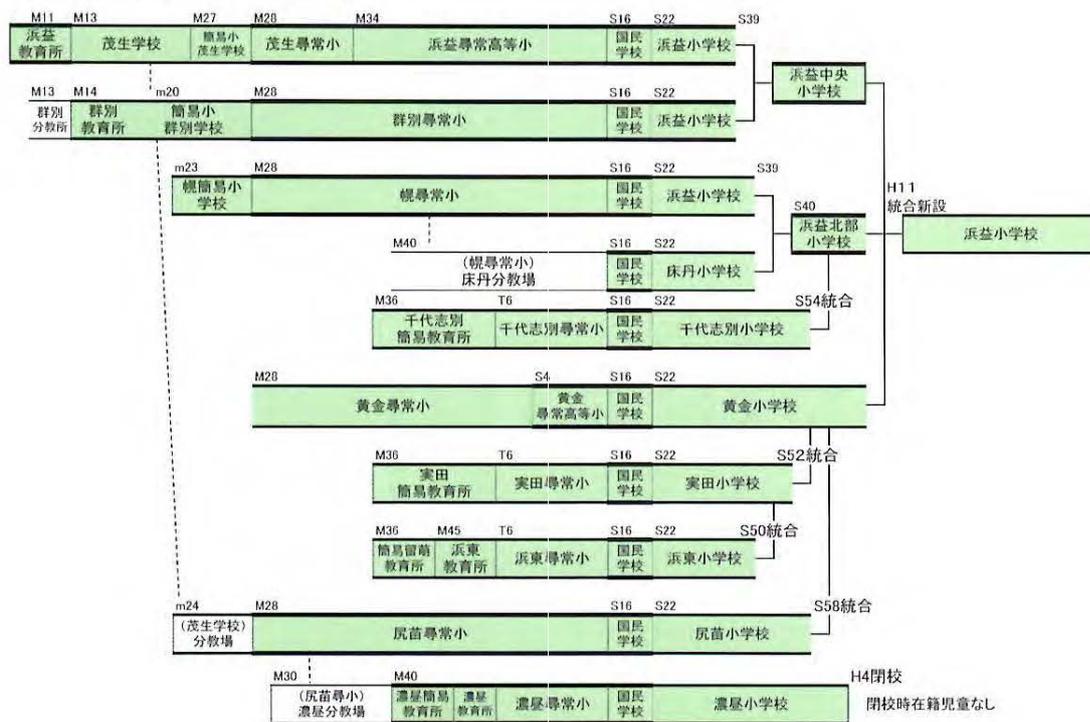


※ 中学校は、多くが昭和22年に開校し現在に至っているので、図にしていない。
 個別の歴史は各学校の沿革を参照。

厚田区の学校系統図



浜益区の学校系統図



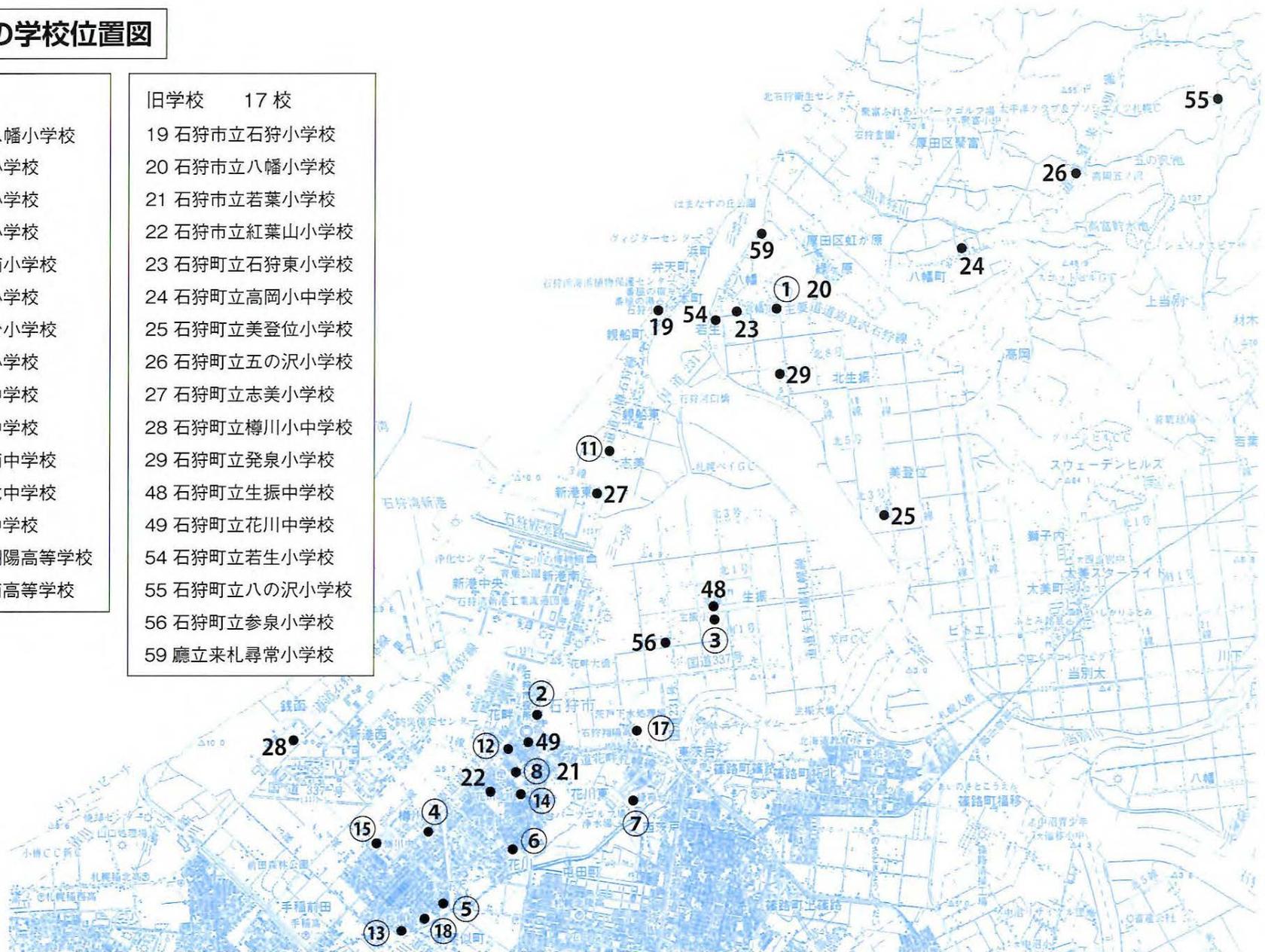
旧石狩地区の学校位置図

現在校 15校

- ① 石狩市立石狩八幡小学校
- ② 石狩市立花川小学校
- ③ 石狩市立生振小学校
- ④ 石狩市立南線小学校
- ⑤ 石狩市立花川南小学校
- ⑥ 石狩市立紅南小学校
- ⑦ 石狩市立緑苑台小学校
- ⑧ 石狩市立双葉小学校
- ⑪ 石狩市立石狩中学校
- ⑫ 石狩市立花川中学校
- ⑬ 石狩市立花川南中学校
- ⑭ 石狩市立花川北中学校
- ⑮ 石狩市立樽川中学校
- ⑰ 北海道立石狩翔陽高等学校
- ⑱ 北海道立石狩南高等学校

旧学校 17校

- 19 石狩市立石狩小学校
- 20 石狩市立八幡小学校
- 21 石狩市立若葉小学校
- 22 石狩市立紅葉山小学校
- 23 石狩町立石狩東小学校
- 24 石狩町立高岡小中学校
- 25 石狩町立美登位小学校
- 26 石狩町立五の沢小学校
- 27 石狩町立志美小学校
- 28 石狩町立樽川小中学校
- 29 石狩町立発泉小学校
- 48 石狩町立生振中学校
- 49 石狩町立花川中学校
- 54 石狩町立若生小学校
- 55 石狩町立八の沢小学校
- 56 石狩町立参泉小学校
- 59 廳立来札尋常小学校



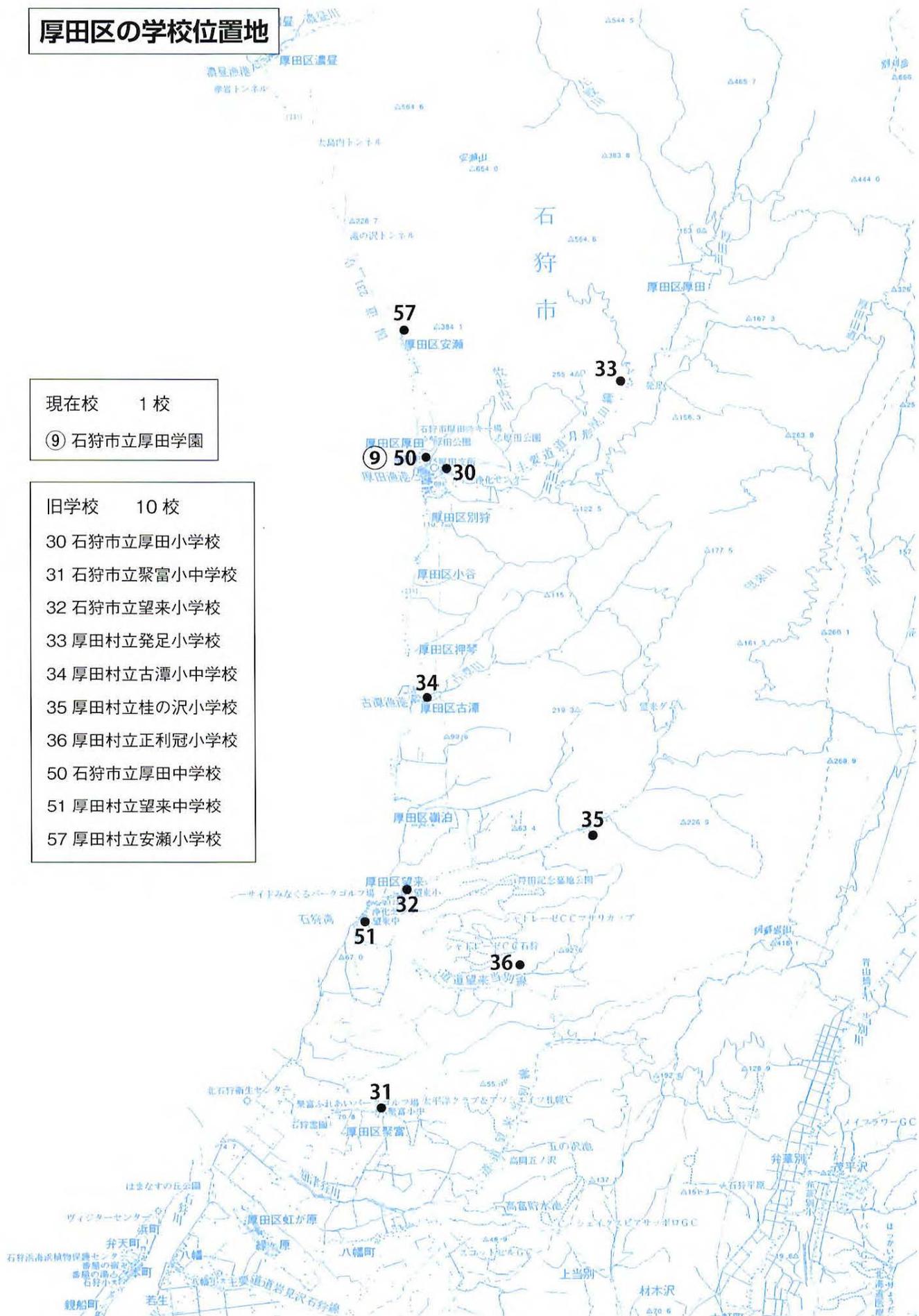
厚田区の学校位置地

現在校 1校

⑨ 石狩市立厚田学園

旧学校 10校

- 30 石狩市立厚田小学校
- 31 石狩市立聚富小中学校
- 32 石狩市立望来小学校
- 33 厚田村立発足小学校
- 34 厚田村立古潭小中学校
- 35 厚田村立桂の沢小学校
- 36 厚田村立正利冠小学校
- 50 石狩市立厚田中学校
- 51 厚田村立望来中学校
- 57 厚田村立安瀬小学校



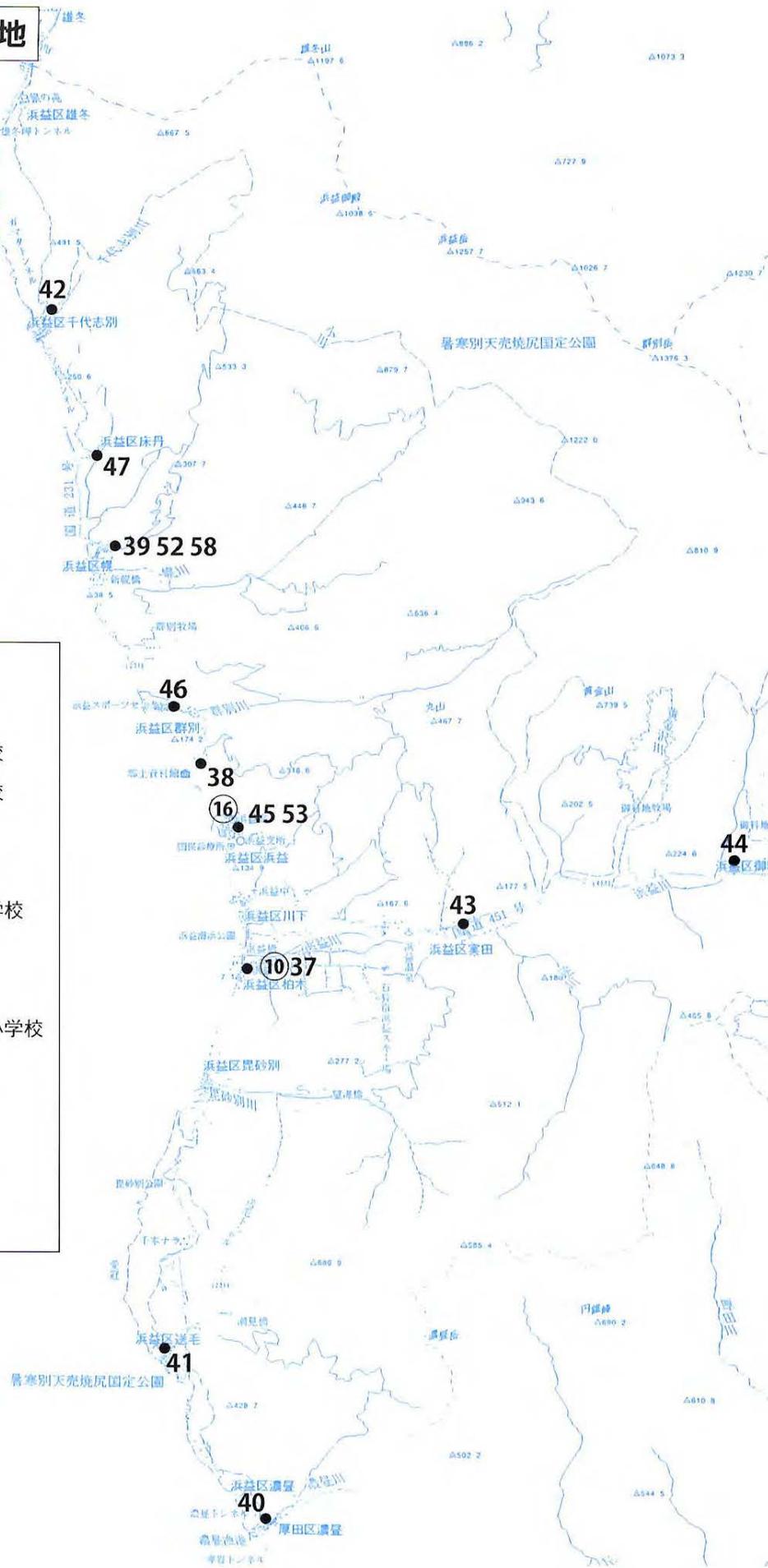
浜益区の学校位置地

現在校 2校

- ⑩ 石狩市立浜益小学校
- ⑯ 石狩市立浜益中学校

旧学校 13校

- 37 浜益村立黄金小学校
- 38 浜益村立浜益中央小学校
- 39 浜益村立浜益北部小学校
- 40 浜益村立濃昼小中学校
- 41 浜益村立尻苗小中学校
- 42 浜益村立千代志別小中学校
- 43 浜益村立実田小学校
- 44 浜益村立浜東小学校
- 45 浜益村立浜益（茂生）小学校
- 46 浜益村立群別小学校
- 47 浜益村立床丹小学校
- 52 浜益村立幌中学校
- 53 北海道浜益高等学校
- 58 浜益村立幌小学校



参考文献・引用資料

石狩関係

- 「東の子」 石狩東小学校 閉校記念誌 平成元年3月26日発行
- 「ふれあい」 生振小学校 開校90周年 特認開校1周年記念誌 昭和61年11月24日発行
- 「おやふる」 1980年3月 生振中学校 昭和55年3月22日発行
- 「たかおかの歩み」 高岡小80周年・高岡中30周年・高岡中閉校記念誌 昭和55年3月20日発行
- 「道究」 高岡小学校閉校記念誌 平成元年3月発行
- 「あしあと」 石狩町立五の沢小学校 開校65周年記念誌 昭和50年9月7日発行
- 「郷友」 石狩町立美登位小学校 閉校記念誌 昭和63年3月31日発行
- 「古里の礎」 志美小学校記念事業協賛会・80年の風雪に耐えて 平成8年3月発行
- 「礎・いしずえ」 石狩町立花川北中学校 開校10周年記念誌 平成元年11月12日発行
- 「花川南」 石狩町立花川南中学校 開校10周年記念誌 昭和62年10月4日発行
- 「かなん」 石狩町立花川南中学校 開校20周年記念誌 平成9年発行
- 「翔」10年のあゆみ 石狩市立樽川中学校 開校10周年記念誌 平成16年10月8日発行
- 「創造」 石狩町立花川中学校 40周年・閉校記念誌 昭和62年3月22日発行
- 「遊歩道」 石狩町立若葉小学校 開校20周年記念誌 平成8年10月4日発行
- 「ふたばっ子」 石狩市立双葉小学校 開校10周年記念誌 令和元年発行
- 「翔」 石狩町立石狩小学校 創立120周年記念誌 平成6年3月発行
- 「夢と笑顔で未来を築け」 石狩小学校 開校130周年記念誌 平成15年11月16日発行
- 「閉校記念式典」 石狩市立石狩小学校 閉校記念典誌 令和元年11月30日発行
- 「感謝」 石狩市立石狩小学校 閉校記念誌 令和2年2月発行
- 「はなかわ」 石狩町立花川小学校 開校110周年記念 昭和58年12月11日
- 「防風林」 石狩市立南線小学校 開校百周年記念誌 平成10年3月16日発行
- 「想」31年のあゆみ 石狩市立紅葉山小学校 閉校記念誌 平成22年3月発行
- 「ふるさと紅葉山」 石狩市花川北2条3丁目 紅葉山町内会 創立40周年記念誌 昭和63年1月発行
- 「いしかり暦21号」 石狩小学校・花川小学校の開校と統廃合の経緯 安井澄子 平成20年3月31日発行
- 「文化・歴史に探る明日の石狩」 田岡克介著（石狩市長） 平成14年10月10日発行
- 「辺地校の四季」 古潭小中学校 小林幸男 新北海道教育新報社 昭和55年10月発行
- 「石狩町誌」中巻一 石狩町 昭和60年3月31日発行
- 「石狩町誌」下巻 石狩町 平成9年3月31日発行
- 「生振開村百二十年」 平成4年11月10日発行？
- 「生振村愛知県団体開拓百年誌」 平成6年（1994）発行？
- 「高岡百年」 高岡開基百年記念誌 昭和59年6月25日発行
- 「未来にはばたけ花小っ子」 花川小学校開校120周年記念親子文集 平成6年3月18日発行
- 「石狩油田史」 岩本龍夫編著 日孔社 平成17年11月15日発行
- 「北生振郷土資料集一」 発泉小学校同窓会名簿 平成22年3月発行
- 「石狩市年表」資料編1 石狩市 平成15年1月31日発行
- 「石狩町各学校々歌（含む閉・廃・統合前の学校）」 田中實 平成6年5月15日発行
- 「石狩尋常高等小学校々歌」（昭和11年）吉岡玉吉

厚田関係

- 「厚田村史」厚田村の教育 総集編 厚田教育委員会 平成17年8月発行
- 「石狩の碑」厚田区編 石狩市郷土研究会 平成24年12月発行
- 「あつたの歩み」 石狩市厚田区 平成18年5月発行
- 「あつた」上 小学校3年用社会科副読本 厚田村教育委員会 昭和61年3月20日発行
- 「あつた」下 小学校4年用社会科副読本 厚田村教育委員会 昭和61年3月20日発行
- 「発足開基百年 記念誌」1985 昭和60年9月7日

「発足の昔」明治・大正・昭和の発足の歴史 厚田村立発足小学校	平成 15 年 1 月発行
「古潭 百十五年の歩み」厚田村立古潭小中学校 閉校記念誌	平成 2 年 3 月 25 日発行
「望来小学校史」	平成 17 年 3 月発行
「校歌検定願」 厚田村役場 (コピー資料) 厚田小学校校歌解説	昭和 11 年 9 月 26 日発行
「厚田村郷土誌」 厚田尋常高等小学校編	昭和 9 年 9 月 10 日発行
「厚田の物語」 厚田 150 年記念誌	平成 31 年 3 月発行
「大地は語り継ぐ 聚富開村百周年記念誌	平成 6 年 11 月発行
「弁財船」と厚田村 I・II 厚田村教育委員会	平成 7 年 12 月 28 日発行
「平成 17 年度 厚田村の教育 (総集編)」厚田村教育委員会	平成 17 年 8 月発行

浜益関係

「石狩の碑」浜益区編 石狩市郷土研究会	平成 27 年 12 月発行
「濃昼 郷土と学校の歩み」浜益村立濃昼小中学校 閉校記念誌	平成 4 年 3 月 17 日発行
「とこたん」 床丹小学校閉校記念誌	昭和 41 年 1 月 10 日発行
「ごめ」 浜益村立浜益中央小学校 創立 120 周年・閉校記念誌	平成 10 年 11 月 1 日発行
「はまます」 浜益村教育委員会 浜益村社会科副読本	
「希望をのせて」 浜益村立黄金小学校 100 周年記念誌	平成 6 年 10 月 23 日発行
「かがやき」 浜益村立浜益北部小学校・幌中学校閉校記念誌	平成 10 年 11 月 22 日発行
「追憶」 北海道浜益高等学校 閉校記念誌	平成 20 年 吉月吉日発行
「蒼空」 北海道浜益高等学校創立 50 周年記念誌	平成 12 年 10 月 14 日発行
「清流」 北海道浜益高等学校創立 40 周年記念誌	平成 2 年 6 月 17 日発行
「学校要覧」 平成 22 年度 北海道浜益高等学校	平成 22 年発行
「はまます」 浜益村	昭和 46 年 8 月 20 日発行
「浜益村史」 浜益郡浜益村役場	昭和 55 年 3 月発行
「はまます」 85 浜益村勢要覧	昭和 60 年 7 月発行

その他

「石狩管内小中学校校歌集」 石山美治	昭和 60 年 1 月発行
「北海道の地名」 日本歴史地名大系 I 平凡社	平成 15 年 10 月 20 日発行
「石狩教育史」 石狩教育研究所 石狩教育研修センター組合	昭和 55 年 2 月 20 日発行
「石狩歴史散歩」資料 いしかり市民カレッジ	平成 25 年 6 月 29 日発行
「校歌は心の原風景」(郷土研究会講和資料) 伊藤 潮	平成 30 年 5 月 17 日発表

資料提供・校歌作成協力者

石狩市校長会 石狩市教育委員会 石狩市厚田支所・浜益支所 伊藤 潮 渡邊千秋 蓮田栄一 大橋修作
 釣本峰雄 吉田隆義 寺内恵三男 飯田登美子 三枝 豊 小向裕子 佐藤あき 木村弘一 八田彬太郎
 八田美津 工藤麗子 下澤孝則 高橋 博 向後裕子 向 澄子 (敬称略)

※CD や H.P. での校歌の音声は、一部分が編曲等されている学校や、歌いやすい音域の調で録音されている学校のものもあります。

あ と が き

校歌集作成のきっかけは当会の顧問田中實さんが石狩市（旧）小中高等学校の校誌・唱歌（校歌や応援歌等）を研究され、その一部が会誌「いしかり暦 22 号」（2009 年 3 月発行）で掲載されたことにあります。石狩では多くの学校が統廃合になっており、その学校で歌われていた校歌の記録も少なくなり忘れ去られようとしている中、郷土研究会として調査研究を進め、校歌集としてまとめてみようということが 3 年前の新年会の折に話題となりました。対象は明治初期創設の学校から本年度新たに開校となった厚田学園、石狩八幡小学校と高等学校を含めるとその数 59 校にもなりますが、統廃合された学校も多くあります。今では人口が減少し数軒しかない集落にも繁栄していた頃は、そこには学校があり子どもたちの歌声が響いていたものと思います。

調査する中で感じたことは、学校の誕生の歴史にはまさにその地域の父母、住民の教育への願いを託す熱い思いであり希望であることが伝わってきました。校歌にも地域の自然、郷土への思い、子どもたちの成長への願い、希望、未来や理想などが歌い込まれていることも知ることができました。

すでに閉校して久しい学校では、校歌はあったのか、楽譜は？など不明続出でした。知る手掛かりとして、新聞での「楽譜探しています」の掲載をはじめ多くの方々から情報、記念誌等の提供をいただきました。現在の学校については各学校の協力を得て子どもたちの歌を CD 化することができました。石狩小、八幡小、厚田小、望来小、聚富小中、厚田中の校歌も学校の協力で閉校前に録音していただき、子どもたちの声を残すことができました。歌詞は残っていても楽譜のない校歌もあり、高橋たい子編集委員、声楽家の今野博之氏の協力で、「校歌、・・・少しは覚えている」という方を訪ね、口ずさんでいただき楽譜に起こしていくという作業もありました。子どもたちの歌声ではないものの、蘇った校歌は今野ご夫妻による歌声とピアノ伴奏で CD で残すことができました。

この校歌集では、59 校を載せていますが、その中で小中併置学校で校歌が同じだった学校は 1 校とし、生振中学校は独立校舎を持ったので、石狩中学校は校歌が引き継がれたので 1 校として、花川中学校は校歌が新しくなったので新旧 2 校として載せてあります。

石狩市郷土研究会 60 周年の年にこの校歌集を発刊できたことを喜び、多くの方々のご協力、ご支援があったおかげと改めて感謝申し上げます。校歌は石狩市郷土研究会のホームページからも聴くことができます。時の流れとともに忘れ去れ、記憶も薄らいでいくものですが、校歌集を手にとり石狩市にこんな学校があり、こんな校歌が歌われていたのかなど思い起こし、クラス会の折になど思い出話の中に入れていただければ幸いです。

令和 2 年（2020）10 月

校歌集調査編集委員長 土 井 勝 典

石狩市小中高等学校校歌集 調査編集委員会

委員長 土井 勝典
委員 村山 耀一
星川富美子
高橋たい子
若林真紀子
石黒 隆一

題 字 田岡 克介

協 力 今野 博之
今野くる美

校歌の音声を聴取する方法

検索 石狩市郷土研究会 

ホームページアドレス <https://www.ishikari-kyoudoken.com/>

いしかり郷土シリーズ9 「石狩市小中高等学校校歌集」

発行日 令和2（2020）年10月

編 集 石狩市郷土研究会

石狩市小中高等学校校歌集 調査編集委員会

発 行 石狩市郷土研究会

石狩市花川南5条2丁目131

村山耀一方 TEL (0133) 72 - 7489

印 刷 (有)日孔社

札幌市東区北10条東2丁目

TEL (011) 721 - 1071
